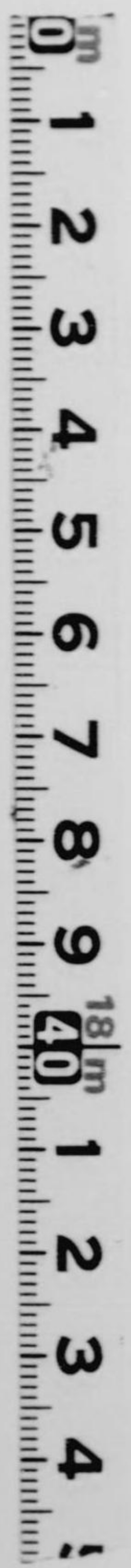
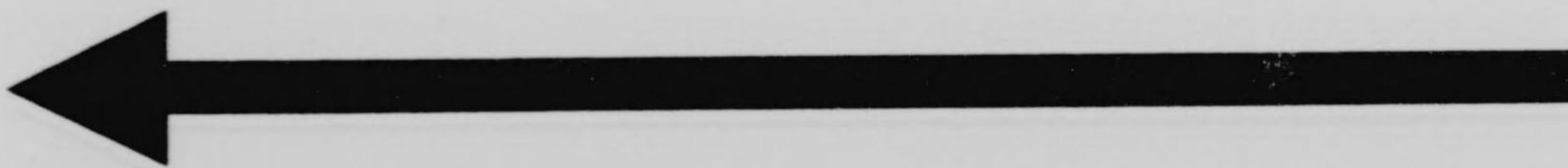


376
38



始



376-38

熊本縣知事 太田政弘閣下序文

田代政輔先生原著



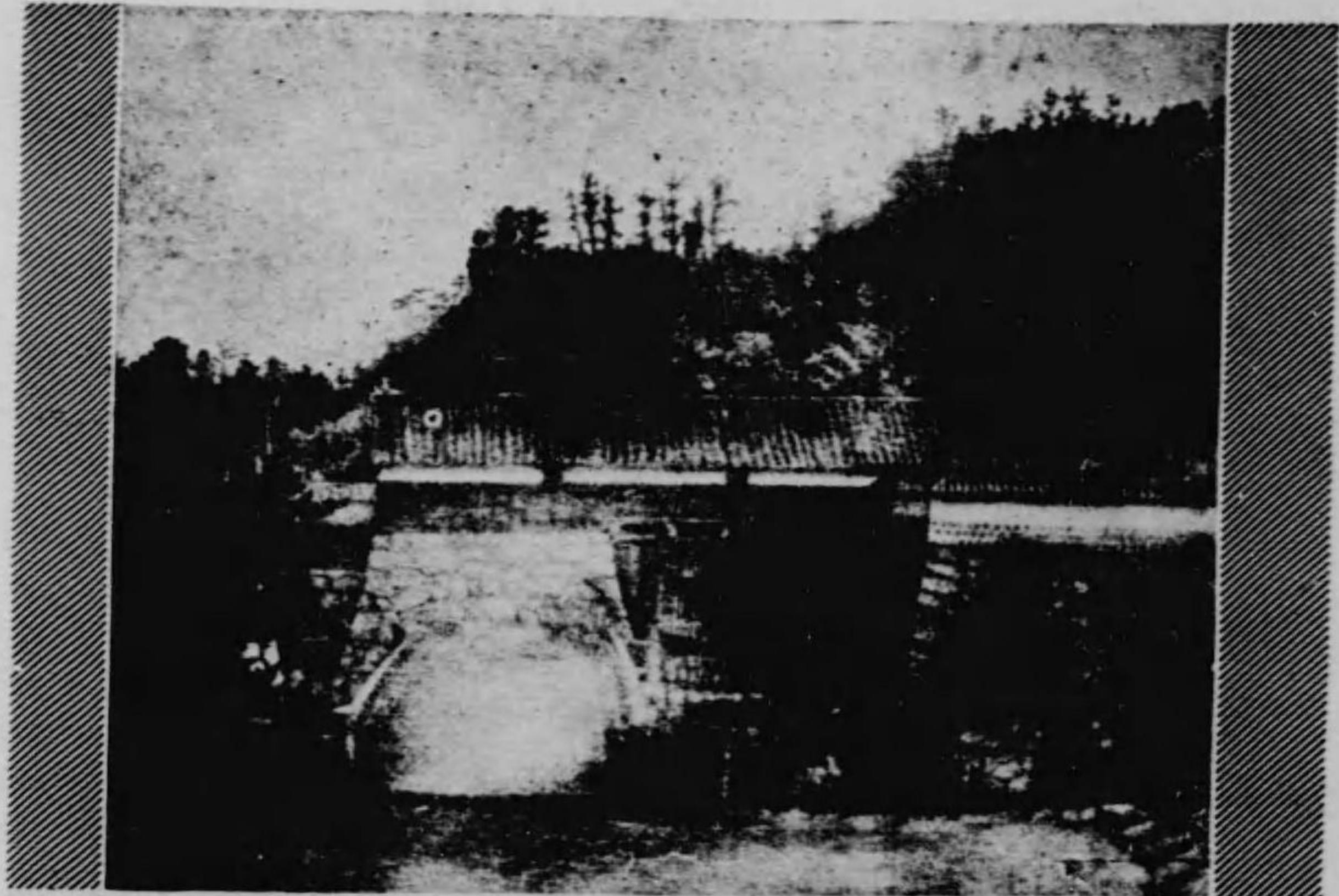
新譯 求麻外史

堂屋敷竹次郎譯註

發行所寄贈本

大正 6.12.15 寄贈





新舊人吉城の偉観
 (址城の在現は圖下—口川磨球門城舊、は圖上)

相良氏七百有餘年間の根據たりし鎌月城址。緑山を貫ひ碧潭に臨み、景致雄麗、眺望絶佳。訪客をして何時しか恍惚無我の境に入らしむ。苟も足人吉を踏まんもつ、一度は曳け、其の杖を此の緑山に……一度は滑げ、其の舟を此の碧潭に……





保久大字村地肥黒郡磨球)——塙 戦 古 原 野 知

今を距るを三百五十八年前、八月十六日の曉、直方吉房の蜂叫洩ると朝敵露かに陣
 太旗の響に和じ、人々、遠望、同勢、此所に對陣し、忽ちにして四百五餘の戦将が見る。若
 し上の繪掛の松園中の松、藩公柱來に樹を掛けて恐ひ、所を云ふの邊りの秋の夕
 べ、尾化亂るも、荒野原に、鳴々巨る響虫の音を唱か入か、さし、激戦の追圍、塗の夕
 人、て奇勝の思あり、こつれ、も、ハ、我、生、命、を、守、り、て、死、す、と、誓、ひ、宮、を、専、一、と、持、堪、公、密、禮、



(石栗字村野豊郡城登下)——塙 戦 古 原 野 豊

義陽公暖死の所、中央なる森は實に其の跡を徳公の廟所なり。今を距る事三百三十六年前、世は戦國の別據を亂れつゝ、追がの島津兵に強ひられて、頃しも其の名宗運と豐野原の一戦に死を決して義を明かにし、社稷の將來を全くす。思ひやるたにけげなる武士の心は、乞ふ之を悲憤慷慨の戦記に見よ。
(寫眞は大森藩人兵特に塙影寄附)



像 曾 公 陽 義

世 五 十 二 第 家 真 相

序 堂屋敷氏譯求麻外史成ル譯述嚴密行文流暢
 ニシテ通讀ニ便ナルコト原文ノ比ニ非ス本
 書收ムル所賴景公移封前ニ起リ長每公薨去
 後ニ至ル相良家累世ノ事蹟歷トシテ卷中ニ
 煉ナリ由來球磨ノ地山紫水明名勝史蹟亦乏
 シカラス憾ムラクハ載籍殘缺シテ復往時ヲ
 稽フル由ナキヲ惟フニ此ノ舉ノ如キハ克ク
 如上ノ缺陷ヲ補フモノニシテ今ヤ本書ハ少
 數史家ノ書架ヲ脱シテ汎ク江湖ノ郷土研究
 ノ資料タラムトス庶幾クハ世ノ之ヲ繙讀ス

田代先生小傳

田代政謙先生、字は季順、俗稱忠左衛門、自養齋又簡窩と號す。寛政二年九月十八日入吉城下に生る。夙に佐藤一齋先生の門に入りて儒學を修む、又槍術の奥義を究めて、藩の師範役たり。養父善右衛門氏(實は其の兄なり)の後を襲ぎて永く藩の家老職を占む。一旦致仕して老を養ひしも、後再び命によりて復職す。其の間前後藩政に盡す所大なり。曾て藩公の命によりて「求麻外史」四卷を編みて上る。外に「司馬法考證」、「尉繚子考證」等の著あり、其の學識の該博なる措辭の巧妙なるを以てて親ふべし。先生自ら持する謹嚴、人に接する温厚、實に君子の風あり、世其の徳を稱す。明治二年九月十一日逝、壽八十。永國寺に葬る。法諡自養齋儀雲常忠居士。

ルノ士此ノ書ニ依リテ郡史ノ由來ヲ明カニ
シ以テ郡勢ノ進展ニ資スル所アラムコトヲ
以テ序トナス

大正六年十一月

太田 政 弘

序

余の薩摩より來りて球磨郡に住するや日尙ほ淺し、從つて郡情多く通ぜ
ず。一日郡書記佐無田氏と會し、談偶々歴史教育に及ぶや、氏田代政嗣先
生著す所の求麻外史を示して、之が和譯の必要を説く。因て試みに繙讀す
るに、典據的確、叙事井然、加之精練の辭句、道勁の文章、宛然賴氏の日
本外史を讀むが如し。則ち余が故郷の相良領たりし奇縁に想到するに共
之が譯述の郡史教育上に甚大の裨益あるべきを思ふ。唯疑ふ菲才能く其の
任に堪ふるかを。

惟ふに求麻外史は、其の名眇たる一藩に係るに雖も、其の實質に於ては
求麻、葦北、八代の三郡及び下益城の一部と、薩摩の伊佐、日向の西北諸
縣郡に關する群雄割據時代の活史なり。啻に以上の史實たるに止らずして
又正に源氏の幕府を開きて以來、徳川氏の盛世に至る我が國史の重要事件

二
と關係す。即ち群雄は四方に割據し、天下は麻の如く亂る、中に、我が藩が如何なる地位を保持しつゝ、如何に外界と交渉せしかを詳述す。之を内にしては人吉城に矢瀨主馬佑に代り、平河義高を千敷原に討ちしより、賴觀・賴仙等の叛亂に於ける多良木、久米の戦ひ、水俣、津奈木、佐敷に於ける幾争鬪、久木野、朴河内、高田、八代、豊福等に於ける幾激戦、瀬野原の大合戦、湯山宗昌の普門寺事變、瑞堅和尚の上村没落、大畑、皆越、中川原に於ける薩兵との接觸、眞幸院、都城等に於ける戦争、菱刈、大口、市山、鳥神を始めとし、各所各時に大小幾十役を経て、遂に響野原の激戦となりて悽絶愴絶を極む。出で、は遠く北條時氏・泰時若くは源實朝等に從つて東海幾内の所々に出陣して、夙に九州相良の勇名を馳せ、弘安元寇の國難に殉じ、南北朝の變革に参加し、島津氏に從つて二豊筑肥の曠野に轉戦し進んで豊太閤の朝鮮征伐に於ては、我が藩勇士が拔軍の功名を博したるを

認むべし。若し夫れ關ヶ原の大戦に際し、諸雄藩士と轡を併べて陣頭に立つに至りては、其の苦衷察するに餘りあるべし。近くは椎葉山、米良山等の騷擾を鎮撫せし等、枚舉に遑あらず。其の間驍勇加藤清正、新納武藏等出沒し、策將甲斐宗運、島津龍伯等隱見す。絶世の英雄豊臣秀吉の風丰微かに窺ふべく、遠謀無比なる徳川家康の經綸遙かに望むべし。又幾多權臣の性格、忠良の面目躍如たるを見る。織るに人情の委曲を以てし、世態の變遷を以てす。而も嚴として著者獨特の主義を徹底し、史眼炬の如く終始を一貫す。以て盛衰必ず所以あり、起滅法に違つて違はざるの眞理を道破す。寔に貴重の典籍、無上の寶鑑と謂ふべし。

夫れ治亂興亡の跡を繹ねて、成敗利鈍の趣く所を察し、先人艱苦の昔を偲びて、立身達孝の基する所を知るは、所謂温故知新の道にして、歴史教育上の主眼なり。況んや我が郡史は、吾人に最も密接の關係を有し、日々

踏破する山河は、悉く是れ祖先の行跡、刻々作業する田園は、皆是れ前代の遺功たるを語るに於てをや。但懣むらくは求麻外史は、漢文にして讀誦に不便なるを。今余之が和譯を成し、附するに聊か註解を以てす。若し其の普及の結果、豫期の萬一に酬ゆるを得ば、獨り余の幸ひのみにあらざるなり。

尙本譯を完成するに至りしは、偏に田代離三先生の懇篤なる指導、高島晋先生の嚴密なる校訂、雨森眞先生の周到なる助言等に負ふ所多きを以て茲に附記して感謝の意を表するものなり。

大正六年七月十八日 球磨郡水上村岩野川畔の寓居に市房の靈峰を望みつゝ

譯者 岳海 堂屋敷竹次郎識

原著者の序

我が郡上古熊襲こゝに居る、因りて熊の縣と稱す。即、景行帝親征の地、而して今天子山あり、譯者曰く、景行天皇親征の地としてお天子又は天子川と稱す字山田合戦の峰、大村字葦原等にありとぞ傳へ言ふ御輿の止る所なりと。而るに中古更めて求麻の郡と曰ふ。延喜式及び肥後風土記は求磨に作る。東鑑は球磨に作る、延喜式に曰く、凡そ諸國部内郡里等の名は、並に二字を用ゐる、必ず嘉名を取れと。此に據りて之を考ふるに、我が郡名字を用ゐること一ならざるは、佗なし、各々其の國訓熊と通ずる字を據る、以て二字嘉名の制に遵ふなり。而して口碑相傳ふ、我が郡麻を種ふるに宜し、而して地極めて隱僻、世、人あるを知るものなし、一日、麻流れて八代の縣に至る、縣の人麻の在處を求めて來る、始めて人あるを知る、因りて名づけて求麻と曰ふ、藤原家隆木綿葉河の國歌求麻河下流一名木綿葉河家隆の國歌に曰く

夏來れば流る、麻の木綿葉河

誰れ水上に御禊しつらむ

即、其の事を記すなりと、此の説附會に近し、余外史を修するに及び、求麻に従ふは、附會の説を取るにあらず、單に家史の舊に依るのみ。其の佗、史を修するの意、凡例に見ゆ、今復叙せず。

嘉永六年癸丑初夏

臣 田代政輔謹序

凡 例

- 一。本書は故田代政輔先生、藩命を受けて著述する所にして、永く相良家に秘藏せられたるを、明治三十一年に至り、遺孫田代桂一郎氏、原書に調點を附し、上下二卷として上梓し、數百部を發行せり、又近時九州日々新聞社に於て編纂せる肥後國誌中にも、其の原文を輯録せり。然れども現代漢學の衰へ行くに従つて、此の貴重の著述も、漸く一般人士に閑却されんとす、即ち更に和譯して、以て世に普及を計らんとする所以なり。
- 二。既に和文に譯す、進んで言文一致体に意譯すべしとの意見提議せられしも、斯くては徒らに冗長に流れ、且つ原著者の眞意を失ふの恐れあるを以て、遂に直譯体を取り、力めて簡易の訓讀を與へ、難解の辭句には冠註を施し、又全文には仮名を附して讀誦に便にしたり。
- 三。本書の文章の結構は、世既に定評あり。只其の編述の体裁に於て、賴氏の日本外史に倣ひたるもの、如く、従つて鎌倉覇業以來に於ける相良藩の所謂武家史にして、嚴密なる意義に於ての球磨郡歴史たる能はず、彼の歴史の重要事項たる政治産業、若くは風俗習慣等の變遷に至りては、僅かに武家の生活を通じて之を窺ふに過ぎず、殊に日本外史が徳川幕府の確立を以て擲筆せると同じく、本書も三代將軍時代に於て擲筆されたるは、深く遺憾とする所なり。但其の武家時代を忤するに於ては、誠に能く其の眞相を穿ちたり、故に苟も球磨郡人士たるものは、必ずや一讀せ

九。巻頭の寫眞版は、本書の記事に極めて關係深き部分のみを網羅したり、若し夫れ原著者の眞筆に至りては、之を通じて著者の謹嚴なる性格と、一字一句も苟もせざる苦心の跡を見るを得べし。

一〇。本書發行に當りて、前球磨郡長中西正義氏、郡書記佐無田實氏を始め關係各郡視學等の助力少からず、又郡内各村長は、讀者勧誘の爲に大ひに盡力せられたり。次に有志賛成員としては、岩野文次郎、波多敏英、鳥井典三、奥田末吉、深水鶴城、合志林藏、江川曾一郎、愛甲巖、米良伊平、澁谷季五郎、柴田利三郎等の諸氏及び人吉時報社同人諸君は、直接間接に助力せられ、出版に當りては、原著者の族田代敏彦氏最も多く助力せられたり、今併せ記して感謝の意を表す。

大正六年十一月二十日熊本の客舎に於て印刷成るの日

譯者識す

新譯 求麻外史目次

一 賴景公 法諭 蓮 寂 一 頁

相良氏の祖先.....天兒藤根命.....中臣鎌足.....遠江守惟兼.....相良を氏となす所以.....相良賴家.....相良氏安田義定に従はず.....始めて求麻郡を食み多良木に従ふ.....山井を食む.....湯前湯山江代を食む.....賴朝の駕に従ふ.....賴景公薨す.....四郎宗賴.....北條時房に従つて高重を攻む.....泰に從つて宇治橋に戦ふ.....宗賴の子孫.....長子賴重土地を争ふ.....賴平及び其の子孫.....賴忠.....賴綱.....長綱

二 長賴公 法諭 蓮 佛 一 二 頁

求麻郡に封じ人吉城に在る.....從ひ來りし人々.....矢瀨主馬佑を討つ.....税所開略.....平河義高に謀る.....備前勳立の式.....賴朝薨す.....實朝重忠を討つに參ず.....袖切證の由來.....曾井社の更造.....院宣時を討つ.....公義時に従つて各所に轉戦す.....宇治川の戦.....相良の綱藏刀.....願成寺創立.....幕命により閑院を造る.....長賴公薨す.....血鼓原の戦.....賴氏及び其の子孫.....上相良の稱.....普蓮寺立つ.....賴村及び其の子孫.....洞然居士.....爲賴賴員及び其の子孫.....賴貞.....史論

三 賴親公 法諭 觀 仙 二 八 頁

實朝の前驅となる.....公剃髮す.....井口八幡社建つ.....流鏑馬の禮を始行す.....照角山觀仙庵成る.....賴親公薨す.....賴明及び其の子孫.....史論

四 賴俊公 法諭 迎 蓮 三 一 頁

九州探題始まる.....弘安の役に從ふ.....奉北を領し城を水俣に築く.....賴俊公薨す.....賴清.....長家及び其の子孫.....長俊及び其の子孫.....賴照及び其の子孫.....史論

五 長氏公 法諭 蓮 道 三 五 頁

公刺殺す……薨逝時北條英時を討つ……經頼を討つ……眞幸院の義兵を平す……長氏公薨す……朝氏……祐長及び其の子孫……頼照……氏泰……史論

六 頼廣公 法詮 蓮 喜

新田義貞高時を誅す……高政貞義の亂……足利尊氏反す……楠正成兵庫に戦死す……懐良親王を八代に奉す……新田義貞戦死す……經頼義直又義兵を擧ぐ……頼廣公薨す……氏高……長利

七 定頼公 法詮 契 阿

臺北田河内を攻む……八代原田を撃つ……足利直冬を撃つ……武光直氏を撃つ……武光頼尙と眞后川に戦ふ……日向北郷を領し……都城を守る……無量壽院を創す……定頼公薨す……頼功及び其の子孫……頼書及び其の子孫……頼成……前成……頼氏……史論

八 前頼公 法詮 立 阿

探題今川貞世等肥後を討つ……武朝貞世と託磨原に戦ふ……公南朝天子に拜謁す……觀音寺建つ……征西將軍薨す……無慮破結の祈禱を始む……南北朝和成る……前頼公都城に戦ひに薨す……史論

九 實長公 法詮 實 阿

眞幸院田上城を抜く……井口八幡社の再修成る……薩摩山門郷を領す……實長公薨す……頼家

一〇 前續公 法詮 笠 芳

忠國伊東祐興を撃つ……永國寺を創立す……前續公薨す

一一 堯頼公 法詮 悅 山

頼朝等反して入吉城を陥る……八重尾帯刀……長續頼朝を入吉城に討つ……公妻別に薨す

一二 長續公 法詮 寶 山

頼朝頼朝を誅せんことを謀る……古多長木久米の戦……瀨島を斬る……城戸尾の戦……税所新兵衛……豊永和吉……齊木但馬守

執を圖る……橋本反す……大隅牛屋院を領す……八代幸松丸……八代郡高田を領す……水俣時く……牛屋院を島津氏に復す……細川勝元山名持豊と京師に戦ふ……愛宕祠を建つ……長續公薨す……頼金及び其の子孫……頼輔……頼泰及び其の子孫……史論

一三 爲續公 法詮 蓮 船

文明の大學……國歌を賦して雨をふらす……瀨に如く……大造物笠船を演ず……牛山城主妻別を襲ふ……牛山河原の戦……再び牛屋院を領す……玉峰院を創す……球磨川大水……頼忠高田を襲ふ……高田の戦……八代蔵坂破る……八代を取る……照角山講廟の歌……爲光壺池氏と赤熊に戦ふ……又豊福を撃つ……頼泰等謀つて誅せらる……馬門原の戦……重朝と成を行ふ……八幡社改造……朝夏の乱に與す……爲續公の文名著はる……公と宗祇法師……公と一條顯綱……豊福の激戦……八代敗る……日奈久二見陥る……水俣侵さる……眞幸時く……牛屋院を還す……爲續公薨す……其の人物性行……其の遺言……若松……頼廉……長尙及び其の子孫……長時及び其の子孫……史論

一四 長毎公 法詮 蓮 心

壺池能運の臣忠直反す……能運を存問す……八代を撃つて復す……再び八代を撃つ……三度八代を撃つ……壺池阿蘇天草皆撃接す……足利義満職に復す……豊福の戦……惟前惟豊を堅志田に攻む……八代成願寺を創す……頼忠守山を侵す……長毎公薨す……公の人物性行……法度式目を著し一向宗を禁す……瑞堅和尙……其の末路……史論

一五 長祇公 法詮 蓮 世

長定反す……長定の驛城……公自殺す

一六 長定公 法詮 蓮 秀

長祇公を逐ふて立つ……長祇公を弑す……瑞堅僧兵を率ゐて城を陥る……長定公弑せらる……都々松丸……都々満丸……史論

一七 義滋公 法詮 蓮 乘

瑞堅の在朝僅かに三日……瑞堅上村永里城に據る……瑞堅を撃つ……麓に攻めて亡ぼす……眞幸北原と中川源に戦ふ……其

の戦死者……樹蔭の使……貞富の戦略……湯浦に重良を撃つ……庭拍寺を創す……津奈木を撃つ……匡政長廣重安重良の族
誅せらる……大倉休矣……上津浦治種を撃つ……阿蘇惟前に婚を許す……八代鷹峰に城く……諸侯來賀す……豊福を字る……
……長種語せられて頼興に殺さる……菊池義宗來り會す……義武來る……島津貴久來る……惟前來る……援兵の首途樹枝檜に
懸る……菱刈兵衛來る……徳川家康生る……高山の戦……阿久根彈正來る……岡の地頭頼反す……治頼真幸に逃る……
治頼多良木に來る……耳取原の戦……勅使至る……式目二十一條を下す……世子立ち諸侯來賀す……公の遺言及び遺歌……
義滋公薨す……公の功績……萬次郎丸……史論

一八 晴廣公 法諭 蓮慶

一〇七頁

公嗣立し諸侯來賀す……洞然居士卒す……天草尙種來る……公と遊行上人の歸詞……青井暮哉……皆吉左重字土城を攻む……
豊福を取る……豊人肥人合志部に戦ふ……頼興頼春を殺す……米一包六貫錢一升二百錢……菊池義武入友義鎮を撃たん
とす……義武遂に義鎮に謀り殺さる……式目二十條を三部に下す……一向宗を嚴禁す……晴廣公薨す……諸侯來賀す……薩
兵大畑を撃つ……十六歳の與兵衛首斬りの逸語……與兵衛八代に憤死す……相良を東面に分つ……頼貞及び其の末路……史
論（一向宗を論ず）

一九 義陽公 法諭 柳江

一一七頁

陶晴賢大内義隆を弑す……次女菱刈重任に嫁す……公大口を取らんことを志す……重任と謀つて大口を陥る……相摸守大口を公
に與ふ……頼孝等反す……豊福に頼堅を討つ……上村外記を久木野に討つ……薩兵上村を援く……大畑の戦……十三歳なる
黒肥地三郎の一番槍……一軍は上村を討つ……其の戦死者……一軍は岡本を討つ……宮原に眞幸の兵を斬る……頼野原大
戦の原因……東郷止丸目兵庫の隙……奥野の戦……牧原に戦ふ……岩崎加賀守……一勇健使命を全ふす……多良木の戦……
種葉山の湯前援兵……頼野原の大合戦……各隊の陣所……深水惣左衛門……劇戦の状況……高宗堀の戦……湯前勢の戦死者
……人吉勢の戦死者……稻留支番の逸話……槍柱……史論……八代陣内火く……頼野原戦因はれく連系者果首さる……頼
野原戦の行賞……深田有の一式大平山……水俣を取る……天草尙種城を援く……種子島に銃傳はる……眞幸を撃つて取る……
八代の士に東番に眞幸を守らしむ……島津貴久を問ふ……長任眞幸菅尾城を撃つ……豊福城主直字土を撃つ……足利義
輝弑せらる……豊福を撃つて取る……水俣に頼孝を討つ……深水源八郎の建言……頼孝自殺す……市山の戦……後藤左衛門
忠元と接戦す……忠元他日市山役を談す……八代に長藏を討つ……長藏自殺して上村氏絶す……深水長智剃髮して宗方と戦
す……馬越宗木初栗の合戦……激戦の状況……義虎危きを免る……我が戦死者……砥上の合戦……八郎右衛門の勇……其の

戦死者……元就等援を求む……市房社に謁す……公以下の國歌……祐隆飯野を攻む……日向兵の戦死者……義昭信長を伐た
んとして敗る……信長天下に號令す……頼盛を誅す……肥前前久と公及び其の國歌……義久日向を撃つて併す……清兵衛元
服……義久宇土を攻む……下野城を攻む……長堅大隅に殺さる……長堅の人物……義弘高右衛門に長堅を招かしむ……長堅
薩城に入りて義弘に見ゆ……史論（長堅）……大友島津耳川の戦……降信限府を攻む……薩兵朴河内を侵す……水俣濱口の戦
……石井半眼……朴河内城忠元に落さる……薩兵皆越及び大畑を侵す……佐敷計石の戦……薩兵敗れ退く……三高橋の功……
……阿蘇の臣井加賀陸に通す……忠元水俣を襲ふ……深水丹後……薩兵再び水俣を攻む……水俣戦の我が死者……武藏守の
矢文……史論……村山傳助の使……津邊牛五の使命と其の忠義……史論……公水俣援兵を議す……水俣遂に落つ……島津氏
兵を徵す……島津氏に和して津邊谷さる……白木社首途の奇蹟……公の守山の歌……あゝ婆娑峰……警野原の大戦……宗運
驚きて起つ……左京進堅志田甲佐を援く……油坂の援道を絶つ……中尾山……糸石谷……中尾村の戦死者……馬立切坑の戦
死者……警野原の戦死者……水間朝巴……公薨す……宗運流涕す……左京進泣く……左京進眉窪に宗運と接戦す……天草刑
部大輔……糸石山の戦死者……警野原戦の死者……彌四郎兼尾平に宗運と戦ふ……駐左衛門兄弟の忠……頼安の弔歌……薩
者警野原の古戦場を弔ふ記……島津義久八代を取る……宗運哀へて薩に人質す……虎嶽絶命の詞……台芳尼の辞世……公の
人物……長誠……史論

二〇 忠房公 法諭 了清

一七五頁

頼貞薩によりて反せんことを……愛甲彌左衛門……宗方休矣謀る……湯山宗昌の弟普門寺慶譽殺さる……盛譽の母の呪詛……
織田信長の變……生善院由來……宗運鳩殺さる……赤星道平……義久肥前を攻む……島津と龍造寺森嶽に戦ふ……川上左京
隆信を斬る……的場自休の功……自休の性行……信雄秀吉を破る……堅志田城又破る……三船降す……忠房公薨す

二一 長每公 法諭 玄高

一八二頁

秀吉關白となる……花山城の戦……其の戦死者……堅志田城又落つ……薩侯豊後を撃つ……阿蘇高森城を抜く……其の戦死
者……山鹿多久河内の戦……筑後勝尾尾城置取城を攻む……筑前岩屋城を攻む……豊後高城を抜く……其の戦死者……島嶽其
の他五城陥る……關白兵を遣して島津氏を討つ……萱迫城を守る……切禿城を守る……豊兵坂梨を攻む……休矣竹牌を始作
す……八代に關白を拜す……公佐敷に關白に謁す……島津義虎關白に降る……關白太平寺に陣す……義久降る……宗方關白に謁
す……關白宗方に朱草を賜ふ……成政の爲に薩兵を佐敷に拒ぐ……甲斐氏亡ぶ……加藤清正小西行長肥後に封す……宗方卒
す……家康江戸城に入る……朝鮮征伐……軍團の組織及び其の將帥……朝鮮役の我が藩從軍の組織……公人吉城を致す……

其の從軍者……諸軍名護屋に會す……行長釜山を拔く……清正慶州を攻む……行長忠州を取る……行長京城に入る……興一兵衛……明兵至る……公安邊を守る……敵兵に圍まる……敵大りに戦つて克つ……其の戦死者……清正嘉嘆す……和を請ひ來る……和議成らん……晋州城を圍みて敗る……元禮を斬る……大闇ト夜軍事を経議す……梅北宮内佐敷に反す……佐敷橋上の戦……其の戦死者……明王と和議成る……竹下監物に湯前城に死か賜ふ……大闇ト使を引見す……朝鮮再征の命……監物の黨湯前の士反す……公再び朝鮮征伐に従ふ……明の援兵……頼兄深見氏の黨を誅滅す……頼兄を伏見に誅ふ……公又釜山浦に屯す……唐島を攻む……南原城を圍む……穴城を齎べて亡ぼす……清正蔚山を守る……豊太閤歿す……大に明軍を敗り我が藩十多く奪す……其の戦死者……大闇の計を得て諸將皆退く……朝鮮役本藩病没者……京都五塚……井口權介の逸話……幸侃の子志和津城に反す……長陸を誅す……安康上杉勝を征す……石田三成反す……其の部下……大谷吉隆三成を佐く……三成方の諸將伏見城を圍む……其の戦死者……九兵衛の働き……關ヶ原大戦の道行……東軍岐阜を攻めて勝つ……大垣に進む……辛葉を敵伏と誤る……諸將の略略々たり……關ヶ原大戦の實況……西軍敗る……頼兄の獻策……謀を以て宇純等を斬らん……頼兄の策に陥る……平傷者……海内殆ど一統す……春日祠を創す……關ヶ原戦の功行賞……米良我に屬す……米良權葉境界を争ふ……普門寺を湯前に移す……秀忠職を襲ぐ……大如所……鷹種傳はる……休矣卒す……殉死多し……頼兄卒す……其の人物……大坂夏の陣……公軍に参加す……其の戦況……秀頼自殺……豊臣氏亡ぶ……大坂冬の陣……其の戦況……和議の三條件……大坂夏の陣……公軍に参加す……其の戦況……秀頼自殺……豊臣氏亡ぶ……武家諸法度……安康歿す……日光山建つ……樺葉山の騷擾……十二人を捕へて江戸に繋致す……樺葉山強正……十人職せ至る……樺葉山を征伐す……江代不土野平ぐ……政勝八代多島に城く……無量壽院改造……諏訪祠改造……護國堂建つ……杉を汗すと始まる……老神祠改造……丸目徹齋卒す……市房社改造……細川侯肥後に封す……藩内地圖を作る……高頼成る……二萬二千百石……十九條を頒つ……岡本城の修築……長每公の遺言……長每公歿す……其の殉死者……神滿九兵衛の殉死辭世……公の人物……長秀……史論……譯者の補遺……補註

新求麻外史目次 終

始めて求麻郡を食み
多良木に従ふ

今の多良木村字東か
山井を食む

湯前湯山江代を食む

頼朝の駕に従ふ

罪を謝す。義定も亦爲に請ふ。乃ち邑を割きて之を還す。曰く、建久四年、一條二郎忠頼、
濱松城を繕ふ、公、其の所を過りて馬を下らす、忠頼怒りて公を鎌倉に効す、頼朝其の食邑を收め、肥後
求麻郡多良木に放たる。政嗣棄するに忠頼は元暦元年、諫に伏す、建久四年に至りて忠頼の死を距る既
に久し、三書誤れり。歴代私鑑一説に曰く、美和元年、安田義定、公を鎌倉に効す、頼朝、其の食邑を收
め、豊前上毛郡成恒莊に放たる。文治中、被りて遠江に還る。義定、公を効すること、東鑑に據ること。然
るに豊前に放たれ及び放されて還る事何の據る所あるを知らず。家譜、歴代参考は、東鑑に従ふ。而して
家譜に曰く、公、宗信と俱に罪を謝す、頼朝、邑を割きて之を還す。大日本史義定傳に據るに亦同じ、
今之に従ふ。夢野氏物語に曰く、美和元年より建久四年に至る十三年間、公の居る所の處詳かならず、蓋し伊
東氏に寓す。亦非なり。既に邑を割きて之を還す、則ち其の相良莊に居ること故の如し、知るべきなり
建久四年癸丑閏七月、公に肥後求麻に作る郡多良木莊を増賜す。洞然に曰
封を移す三四年前、公、罪を蒙りて多良木に請せらる。探源記、歴代私鑑、族譜備考に曰く、建久四
年、多良木に放たる。今家譜、歴代参考に從ふ。歴代私鑑、族譜備考に又曰く、永吉莊多良木村。是
に於て公、政を世子三郎長頼に授け改めて四郎と稱す。蓮佛公鑑に曰く、是の時公、ついに多
良木に徙りて居る。曰く、求麻を三分し、上求麻は公之を有し、中求麻は平河右衛門義高之を有し、
下求麻は矢瀨主、あつて泉、新莊、山井、名を食む。鎌倉裁許狀に曰く、肥後國泉新莊内山井名と後
又并せて湯前、湯山、江代の三村を食む。公の族平原次郎頼範、其の弟新堀又四
郎頼兼、公に従つて來り、遂に家す。八年春、閏七月、公、鎌倉に如き、征夷大將軍
源頼朝に請す。三月二十三日、頼朝善光寺に詣りて、公、駕に従ふ。先陣左衛門
尉、右長江四郎、左千葉次郎、右和田次郎、左武田兵衛尉、右平井四郎、左里見太郎、右里見五郎、左伊澤五郎、
右南部三郎、左加見次郎、右村山七郎、左津利冠者、右新田藏人、左村上判官代、右佐竹別當、左所藏色、右橋

頼朝善光寺に詣りて
其の記事
本歴史上に一事實を
提供せり云ふべし

頼景公薨す

四郎宗頼

次、左江間太郎、右小出七郎、後陣左千葉新介、右葛西兵衛尉、左北條五郎、右佐々木五郎、左千葉平次兵衛尉、
右梶原利部兵衛尉、左八田太郎、左衛門尉、右江戶太郎、左土屋兵衛尉、右長井六郎、左佐々木三郎兵衛尉、右加
藤次、左梶原源太左衛門尉、右野三郎部頭、左望月三郎、右相良四郎、左海野
小太郎、右藤澤四郎、左小山五郎、右三浦平六兵衛尉、此の事東鑑に遺脱す。九年、長頼公、封を本藩
に移すや、公の子四郎宗頼、五郎左衛門尉頼平從ふ。公、山井名を割きて宗
頼に與ふ。安貞二年八月、多良木を以て長頼公に授く。哥氏物語に曰く、蓮佛公封を移す
や、公、其の第二子彌五郎頼氏を養ひて子と爲し、之に多良木を傳ふ。歴代参考之を辨じて曰く、公、多
良木を以て蓮佛公に授く、幕府下文を賜ふ、詳かに鎌倉裁許狀に見ゆ、且つ公、頼氏を養ひて子と爲す
明據なし。則ち蓋し公、多良木を以て蓮佛公に授く、公、薨して後、蓮佛公之を頼氏に授け、子孫を
て、世食せしむるのみ、公、頼氏を養ひて子と爲し、之に多良木を傳ふるにあらざるなり。今之に従ふ
十二月十七日、山井を以て宗頼の第二子頼重に與ふ。某年族譜備考に曰く、年閏ぐ。建保中。
今鎌倉裁許狀に據るに、安貞二
年は公猶在り。族譜備考誤り。四月八日、公、薨す。龜田山に葬る。歴代私鑑、族譜備考に曰
廟を建て阿彌陀佛像を安置し、以て公の神主と爲す、今の龜田山青蓮寺の本尊是なり。永仁三年六月、頼宗、
又曰く公の繼室、須藤氏青蓮尼薨す。又龜田山に葬る。永仁六年、頼宗青蓮寺を建つ。法論、蓮寂。
公、六男あり。長は長頼公、次は山井四郎宗頼、次は山北五郎左衛門尉頼平、
次は佐原六郎頼忠、次は河馳七郎頼綱、次は相良小藤次長綱なり。系圖一本、歴代参考
を以て頼平の子と爲す。歴代私鑑、族譜備考に曰く、頼忠、頼綱、長綱
頼綱、長綱は公の庶子にして、蓮佛は公の異母弟なり。後須藤氏を娶りて一女を生み、新堀頼
兼に嫁す。

四郎宗頼は、公の第二子なり。長頼公に従つて來り、山井に居る。并せて高橋

今の企救郡か

北條時房に從つて高重を攻む

村、山鹿郡内田、杉村、山下、小原、玉名、菊池軍記に曰く、玉名郡玉名村と。又曰く玉名郡
 藤原に曰く、西安寺中に塔三座あり、第一塔の記に曰く、正嘉元年丁巳八月某日、大禰那遠江の人相良
 四郎左衛門入道淨信建つ。第二塔の記に曰く、正應元年七月某日、大禰那遠江の人相良四郎左衛門入道
 建つ。第三塔の記に曰く、嘉元二年甲辰、相良三郎入道淨信建つ。山北氏傳ふる所の書に正嘉元年八
 月日、遠江の國人相良五郎左衛門入道淨信、正應元年七月日、遠江の國人相良三郎左衛門入道淨信、嘉元
 二年八月日、遠江國人相良の野原、大島、赤崎、山田の九村、筑後高橋、大塚の二村、豊
 前菊郡、肥前の寺井を食み、九州記に曰く、宗頼山鹿郡に居る。洞然狀、歴代私鑑、族譜備考に
 恒莊に留む。今うちださる。江内田氏家譜に曰く、相良三郎長頼の男四郎。而して内田、
 歴代参考に従ふ。内田相良と號す。宗頼遠江内田郷に居る。因りて内田氏を稱す。而して内田、
 龜山、田中、永留、高橋、豊田、山井、山北、佐原の九氏、之を小苗字と稱す。俗
 姓氏を謂ふ。蓋し皆公の族なり。承久三年五月、宗頼内田四郎に作る。相摸守北條時房
 苗字を爲す。蓋し皆公の族なり。承久三年五月、宗頼内田四郎に作る。相摸守北條時房
 の軍に從つて橋本驛江に次す。下總の前司中條盛綱の族人三浦筑井四郎太郎は美
 井太郎、高重等十九騎騎に作る。鎌倉軍に混じ、潜かに高志山を踰ゆ。時房之を覺る。
 即ち宗頼を遣して之を追はしむ。宗頼、弟六郎頼忠及び新野右馬允と、六十餘
 騎を率ゐて馳追し、音羽河に至りて之に及び。高重免れざるを知り、疾呼して曰
 く、我は下總守の徒三浦筑井四郎太郎なり、變を聞きて京師に赴かんとす、潜
 行して既に此に來る、而して今覺らる、は命なり、義唯一死あるのみ。然れども

鼻は罪人の首をさらしものにすること

差、泰時に從つて宇治橋に戦ふ

宗頼の子孫

長子頼重土地を争ふ

綾小路に京極なきが如し故に綾小路と京極との二ヶ所ならんか

丈夫肯て尋常の死を爲さず、請ふ決闘せんと。宗頼等進撃す。高重安房の郡司名
 等五人と趨りて民家に入り、擲りて箭を放つ。殺傷頗る多し。箭盡きて高重
 郡司と相刺して死す。四人亦尋ぎて相刺して死す。其餘の十三人馬を躍らして
 馳突す、衆寡敵せず、皆馬上に相搏つて殺さる。乃ち十九人の首を本野原に梟
 して去る。東鑑載する所差此に異れり。今六月、武藏守北條泰時の軍に從つて宇治に向
 ふ。武藏の前司足利義氏の兵、京軍と宇治橋に戦ふ、利あらず。宗頼・相馬五郎
 兵衛・土肥次郎左衛門尉・苗田兵衛・平兵衛・吉河小次郎競ひ前みて力戦し、疵
 を被りて引き退く。安貞元年三月、公に先つて卒す。二子あり。長は高橋
 左近將監頼元、嗣ぐ。次は内田次郎四郎。歴代私鑑、族譜備考よりしげのちまがら、
 尉と稱す。父卒するに及び、公、之に山井を與ふ。頼重之を鎌倉に告ぐ。幕府
 頼重下文を賜ふ。實に寛喜元年八月二十二日なり。既にして頼重、兄頼元と睦し
 からず、長頼公之を討し、其の食邑山井を收む。頼重服せず。又嘗て長頼公と多
 良木及び京師綾小路京極の地を争ひ、命達尼と高橋、早瀬、小中島の地を争
 ふ、而して皆未だ決せず。是に於て、並に諸を鎌倉に訴ふ。幕府山井を削り、

其の半と京師の地とを以て頼重に予へ、多良木を以て長頼公に予ふ。後再び命

達尼と田二反を争ひ、鎌倉に訴ふ、勝たず。此より頼重遂に復争はず。

註。久米村日大越に昔時領主の娘の田なりて有名なるあり、俚歌に一丁三反三畝六歩之も娘の化粧田

云々と、頼重争ふ所の田は之か、又其の側に堂ありて尼に關する所とす

五郎左衛門尉頼平は、公の第三子なり。長頼公に従つて來り、山北郷屋氣、

板井の二村、筑後三池郡玉村、今村、山崎、中衛の四村を食む 九州記に曰く、頼

あり。長は板井三郎頼房、次は山本五郎頼持、次は龜山六郎頼行なり 曰く、頼平法

試淨信、四子あり、長は二郎頼用、次は三郎左衛門尉頼房、板井氏を

稱す、次は五郎頼持、山本氏を稱す、次は六郎頼行、龜山氏を稱すと

六郎頼忠は、公の第四子なり。建久三年八月十四日、鎌倉鶴岡放生會に儀仗

太郎と角力の戯をなす 東鑑に曰く、第一番奇長藤次、荒次郎、第二番鶴次郎、藤原目、第三番大武

太、第六番鬼王、荒瀬五郎、第七番紀六、王鶴、第八番小中太、千手王也。東鑑は佐賀真に作る、佐賀真

は相良と國香相同じ。政論案するに江六と稱するは、蓋し其の遺江人にして六郎たるを以ての故なり。又

案するに是の歳、蓮佛公は年十六歳にして、頼忠のちあにむねありしたが、筑井高重を追撃して功あ

り。初め蓮佛公の封を移すや、頼忠相良に留まる。其の子孫考ふる所なし。

七郎頼綱は、公の第五子なり。兄頼忠と相良に留る。其の子孫考ふる所なし。

小藤次長綱は、公の第六子なり。幼にして兄頼忠等と相良に留る。長するに

幕府親王下文を賜ひ、食邑考へずを給す。其の子孫考ふる所なし。

及びて本藩に徙り、後薙髮して西心法師法體願心と號す。正嘉元年九月十四日、

幕府親王下文を賜ひ、食邑考へずを給す。其の子孫考ふる所なし。

幕府親王下文を賜ひ、食邑考へずを給す。其の子孫考ふる所なし。

幕府親王下文を賜ひ、食邑考へずを給す。其の子孫考ふる所なし。

幕府親王下文を賜ひ、食邑考へずを給す。其の子孫考ふる所なし。

幕府親王下文を賜ひ、食邑考へずを給す。其の子孫考ふる所なし。

幕府親王下文を賜ひ、食邑考へずを給す。其の子孫考ふる所なし。

幕府親王下文を賜ひ、食邑考へずを給す。其の子孫考ふる所なし。

幕府親王下文を賜ひ、食邑考へずを給す。其の子孫考ふる所なし。

幕府親王下文を賜ひ、食邑考へずを給す。其の子孫考ふる所なし。

幕府親王下文を賜ひ、食邑考へずを給す。其の子孫考ふる所なし。

幕府親王下文を賜ひ、食邑考へずを給す。其の子孫考ふる所なし。

幕府親王下文を賜ひ、食邑考へずを給す。其の子孫考ふる所なし。

幕府親王下文を賜ひ、食邑考へずを給す。其の子孫考ふる所なし。

幕府親王下文を賜ひ、食邑考へずを給す。其の子孫考ふる所なし。

幕府親王下文を賜ひ、食邑考へずを給す。其の子孫考ふる所なし。

幕府親王下文を賜ひ、食邑考へずを給す。其の子孫考ふる所なし。

幕府親王下文を賜ひ、食邑考へずを給す。其の子孫考ふる所なし。

木枝城主平河義高に
謀る

求麻外史

梶飯兼立の式著まる
別註参照

原書前に橋口と四郎
丸とを別ち茲に別た
す熟れが是か
頼朝薨す

かばう、ちんよしたか、歴代私撰、族譜備考に平河氏の系圖を引きて曰く、義高の先は平河三郎師康にして、真河右衛門義高峰大納言安世二十八世の孫なり。師康數世の孫師澄、康平六年肥後孫頼朝永吉莊を賜ひ、遂に從り居る。義高、四子あり。長は太郎盛高にして、深田の地頭となる。次は次郎藤高にして、山田の地頭となる。次は三郎師高にして、盛高の讓を受け、深田の地頭となる。次は四郎高實、多良木横瀬の地頭となる。人となり驍勇にして兵衆し、請ふて之を招き、借に主馬佑を誅せよと。公曰く、諾と。乃ち義高を招く。晦、義高等主馬佑を無熱川佑を誅する所の處、後名づけて矢瀬留の上に誘殺し、悉く其の黨を戮して公を迎ふ。公、城に入るに内城の門閉づ。上原修驗道南立坊、月七日梯を獻じ、世に以て例と爲す。飛梯を架し登りて以て門を開く。公、遂に入るを得たり。是に於て圓昭酒を奉り入りて賀し、三獻の禮を行ひ、衆萬歳を呼ぶ。是より稅所氏世に年男、年男と云ふ、後高田氏之を勤く、となる。正治元年、己未、春正月朔、梶飯の禮を行ふ。公、兵衛太夫に命じて誅はしむ。兵衛太夫才敏捷、立どころに歌を作りて以て誅ふ、著はして永式と爲す。世に之を實譽は實譽なり、の誅と稱す。三日、役を興して城を修む曰く、歴代私撰、族譜備考に、羅城の西南に地を穿ちて石を得、鐵月のほしと、橋口四郎九等鐵を立つ。初、地を穿りて以て土功を興す。形見は、因りて一に鐵月城と名づく。橋口四郎九等鐵を立つ。俗に之を兼立と謂ふ。遂に定めて例と爲す。十三日、征夷大將軍前權大納言兼右近衛大將、源頼朝薨す。公、訃を聞きて剃髮し、自ら三郎法師蓮佛と號す。時に年二十三。

註。梶飯の禮とは、毎年正月十五日の晩即ち上元の節に、藩公は表居間に臨み、藩士を一名づゝ順次に召され、手酌にて大杯を以て御酒を賜はるの例にして、此の時は廣き居間より長條に續きて數百千の燭臺、眩く點ざられ、其の座敷の上方の側には種々の列座あり、就中目立つは年男が三方の上に髮斗をあげて目八分に捧げ居り、又其の次には宗方の太夫が然も裝束にて着座し、太夫は右御酒を賜ひ終るまで長時間實譽の誦を緩々と誦ひつゞけるにあり。而して此の誦曲は宗方太夫獨特の家傳にして、他人は得て知るべからざりしなり。

實朝重忠を討つに參
諸はいつはりつぐる

袖切鏡の由来

急はせまるなり

元久二年乙丑夏六月、遠江守北條時政、畠山莊司次郎重忠を誅す。征夷大將軍源實朝、兵を遣して重忠を討つ。二十二日、公、相摸守北條義時等の諸將に從つて東下す。重忠、迎へて武藏の二俣川に戦ふ。公、先登たり。槍に中りて額を傷きたれども神氣撓まず、猶能く健闘し、殆ど危きもの數なり。從兵其の鎧袖を捉へて之を止む。公、踊躍して進み、鎧袖中斷す、遂に深く入りて首數級を獲たり、時人之を相良の袖切鏡と稱す。袖切とは袖を斷つを云ふなり、此の役、地を以て器重す。後、寛永庚辰の内亂に御殿若頼兄の庫にありて英に獲る。英餘唯の權を得と云ふ。洞然狀、探源記に此の役を以て公の未だ封を移さざる以前に保るるとするは非なり。武林傳に以て觀仙公に傷るとするも亦非なり。藩論譜に曰く、長頼先登たり、敵兵其の鎧を捉へしめて、重忠及び子弟皆敗死す。秋七月二十五日、軍功を以て幕府下文を賜ひの花押、人吉莊の地頭職に補す。文治初め、頼朝、朝に奏して始めて諸國に守護を置き、關莊に地頭を置く。歴代私撰、族譜備考に曰く、實朝立つて大將軍と爲る故を以て更に人吉莊の地頭職の下文を賜ふ。歴代私撰に一説を引きて曰く、是の歲、

人吉莊の地頭職の下文を賜ふ、即ち本藩に就封するは亦當に元久以後にあるべしとするは非なり。歴代考に曰く、建久九年唯更に本藩に封じ、而して未だ地頭職に補せず、是の歳、二俣川の功を以て始めて地頭職に補するなり、今之に従ふ

青井社の更造

建保中、青井社を更造す。神社傳記に云く、大同元年青井

院宣義時を討つ

承久三年辛巳夏五月十五日、上皇羽帝院宣を五畿七道に下し、陸奥守北條義時を討つ。二十一日、義時兵を發して京師に嚮ふ。弟相模守時房、子武藏守泰

公義時の軍に従つて各所に轉戦す

公、暨び弟四郎宗頼、六郎頼忠兵を率ゐて時房の麾下に屬し、東海道よりす。田信光、小笠原長清、小山朝光は東山道より、北、橋本驛に次す。是の日、宗頼・頼忠・筑後朝時、佐々木信實、結城朝廣は北陸道よりす。時、橋本驛に次す。是の日、宗頼・頼忠・筑井高重を追撃して功多しとなす。六月五日、一宮張に抵る。是より先、上皇諸將を美濃、尾張に分遣し、以て東軍を拒ぐ。大井戸を守る。藏人神地頼經等驍勇を守る。判官代朝日頼時等板橋を守る。判官代富來次郎等池瀨を守る。藤原秀康・三浦胤義・中條盛綱等驍勇を守る。阿波太郎等食波を守る。判官代長瀬某蘇島を守る。松井連使藤原秀澄・山田重忠洲原を守る。實藤光員市河を守。東軍相議して將士を分ち、官軍と尾張河を夾みて陣す。其の夕、東山道の將武田五郎信光、其の子小五郎、小笠原次郎長清、小山新左衛門尉朝光等大井戸に大炊渡に作。守將檢非違使大内惟信を攻めて大ひに之を敗る。官軍皆風

今の鹿田郡が

日本外史は一口に作る

を望んで潰散す。六日、遅明時房・足利義氏と大軍を率ゐて摩免戸る。國讀相同じを濟る、守將能登守藤原秀康・平九郎・三浦胤義・中條盛綱等守を棄て、宵遁る。公承久記には佐賀羅二郡に作る。及び伊具六郎有時六郎に作る善左衛門尉太郎康知・奥岳橋左衛門尉公成左衛門尉に作る阿保刑部丞實光等後を躡んで競ひ馳せ、筵田渡に抵る比、官軍三十餘騎還り戦ふ。公等撃つて之を殲す。公、手づから首級級を斬る。東軍勝に乗じて長驅す。山田次郎重忠軍を回して杭瀬川に陣す。公、公成と兵を合せて進み濟る。重忠の兵矢を發して雨注し、死傷甚だ衆く、河水色を變ず。公、流矢に中り、額を傷きて退く。紀宗介の製兜に二矢の痕あり、蓋し此の役公の蒙る所なり。大軍尋ぎて至る。衆寡敵せず、重忠遂に敗走す。歴代參考に従ひ承久記を用ふ。七日東軍駐りて野上垂井に營し、各々向ふ所を謀る。諸將三浦義村の議に従ひ、時房勢多に向ひ、泰時宇治に向ひ、信光平上に向ひ、義村淀に向ひ、藏人大夫入道毛利西阿芋洗に向ふ。公暨び宗頼轉じて泰時の麾下に屬す。官軍驛を馳せて急を告ぐ。廷議して再び諸將を勢多、供御瀬、宇治、牧島、一に眞木島に作。芋洗、淀、廣瀬に分遣して拒守せしむ。山田重忠、延暦寺の僧兵勢多を守る。藤原秀康・三浦胤義・大江親成・佐

宇治川の戦

衛門佐藤原朝俊・佐々木廣綱・熊野・南部の僧兵宇治橋を守る、判官代長瀬某・足立親長牧島を守る、参議藤原信能・法印尊長宇治橋を守る、大納言藤原忠信淀を守る、河野通信廣瀬を守る。十三日、時房、勢多を攻め、山田重忠堅く拒ぐ。時房、戦ひ利あらず、兵を收めて退く。泰時、宇治を攻め、義氏其の子駿河次郎泰村と泰時に先んじて宇治橋を攻む。官軍橋板を撤し、以て之を守る。士卒長架に縁りて進み、多く官軍の射る所となりて墜死す。士卒氣沮む。泰時馳せ至りて指揮し、兵氣復奮ふ。傷死頗る多し。宗頼等繼ぎ進んで血戦し、疵を被りて引き退く。泰時戦ひの利あらざるを知り、麾下之を却く。十四日、泰時河を濟りて戦はんことを欲す。會々天霖雨にして水勢怒漲す。陸奥人芝田橋六兼義善く泗ぐ。泰時、兼義に命じて灘の深淺を搜らしむ。兼義淺處を得、春日刑部三郎貞幸と進み濟る。公三郎に作る。暨び佐佐木四郎左衛門尉信綱・中山次郎重繼・安東兵衛尉忠家等之に繼ぎ、櫓を並べて争ひ濟る。官軍の索を水中に張るに遣ひ馬絆りて止る。公、刀を抜きて索を載る、遂に先登して北面の士北面を圍く。渡邊三郎兵衛尉利之を斬る。時人之を相良の綱截刀截吉の造る所なり、袖切鎧と同じく之を器重すと稱す。東軍相繼ぎ流を絶ちて亂涉す。兵多く溺死し流屍河を蔽ふ。官軍河に臨み鼓噪す。泰時廬舎を毀ち、筏を結んで

相良の綱截刀

(事はのつとるこせ(則る))

以て渡る。守將前權中納言源有雅・参議藤原範茂戦はずして潰走す。右衛門佐藤原朝俊・佐佐木太郎左衛門尉氏綱等、拒ぎ戦ひ克たすして之に死す。供御瀬、牧島、廣瀬皆守らず、是の夜、泰時兵を收めて深草に屯す、置酒して將士を勞ひ梅子類を青磁の碗に盛り以て公に賜ふ。公、悦び且つ之を榮とし、羣して徽號と爲す。今の梅章此に類る。東鑑、承久記には置酒して將士を勞ふ事を載せず。歴代参考、歴代私故に且く此に係く。政論日本外史を案するに、此の役泰村其の子時氏を召して曰く、我が衆將に敗れんとす、汝進んで之に死せよ。時氏六騎を以て渡り泰村之に繼ぎ、戦ひ勝つ。時氏同じく渡る所の六騎を召し置酒して之を勞ふ。此に由りて之を考ふるに、泰時は是の歳、幕府頼經軍功を賞して遠江の故地を復し、播磨飾磨不國讀相近し郡を賜ふ之を宇治川役の後に録す、故に姑く此に係く。嘉祿中閏ぐ常樂寺を創し、宇土山と號すりて尊崇する所の藥師如來の佛像、以て本尊と爲す、今の宇土藥師是なり。

安は案

安貞元年丁亥三月、山井四郎宗頼卒す。

二年 戊子秋八月、老公、多良木を授く。公、之を鎌倉に告ぐ。冬十二月、日

幕府下文を賜ふ狀に見ゆ

天福元年 癸巳閏ぐ願成寺を創し、山崎山と號し法山と號す僧弘秀を以て開山

願成寺創立

と爲す。

仁治元年 庚子秋九月二十六日、後の太夫人須惠氏 須惠氏は須惠村の巨姓、須惠某の女蓮寂公多良木に移るの後、納れて以て室 薨す。龜田山に葬る。法諡青蓮。

二年 辛丑冬十二月、公、三郎兵衛尉頼重の食邑山井を收む。是の歳閏公、代官を高橋に置く。

三年 壬寅春正月、公、清元を遣して山井の代官と爲す。是より先、頼重嫂を薨す。而して兄弟和せず、公、乃ち之を罰し、其の食邑を收む。未だ諸を鎌倉に告げず、而して代官を置く。頼重命を聴かず、頼重又嘗て公と多良木等の地を争ふて得ず、之を銜む。是に於て頼重之を鎌倉に訴ふ。

寛元元年 癸卯冬十二月二十二日、幕府裁許状を下し 本邦裁決を謂ふて裁許と爲す。頼重を罰し、山井を削りて其の半を收め、多良木を以て全く公に與ふ。公、亦擅に人の食邑を收むるに坐し、人吉莊を削りて其の半を奪はる。

四年 丙午春三月五日、公、人吉莊の南方を以て第三子佐牟田六郎頼俊に授く。正嘉元年、幕府賜ふ所の教書に公の讓狀及び蓮信の相傳狀を引きて曰く、人吉莊の南方經總名(寺田政段三丈、藤二漆町、窓形女子分田一町五段、寒田堀内香木町二町五反を除く)常樂名、龍萬名、矢里肆段、神田

頼重田を争ふ

貳町參段、新田參町政段參丈(間村にあり)民家十五宇、寒田、堀内と。正平二年、南朝下す所の宣旨に曰く、人吉莊の北方と。政變案するに經總、常樂、龍萬等の地今稱よる所なし、則ち其の南北の界も亦知るべからず、然るに間村は南方に屬す。又稅所氏の判物に據るに井口、筒口は北方に屬す。則ち求麻河を以て南北を分けしや明かなり。又案するに寒田は即ち佐牟田なり、國讓相通す。

寶治二年 戊申閏頼重命蓮尼と田を争ふ。秋九月十日、頼重、尼の置く所の代官政高を劫かして、其の徒源太郎等二人を捕ふ。彌五郎頼氏、尼に代りて鎌倉に訴ふ。

建長元年 己酉、春三月二十七日、軍功を以て幕府頼綱下文是の月改元あり、下文は寶治三年を公に賜ひ、豊前上毛郡成恒莊の地頭職に補す。秋七月十三日、幕府裁許状を下し、相模守北條時頼、陸奥守所の田を以て命蓮尼に還し予ふ。

二年 庚戌春三月朔、幕府天下の諸侯に命じて閑院を造らしむ。山城前司深澤俊平を督し、助け造る所の諸侯三百餘人、各主とする所あり。紫宸殿は北條時頼之を造り、宣陽殿は北條重時之を造り、清涼殿は甲斐の前司長井泰秀之を造る。而して公は泉田兵衛尉等と二條面南油小路西築地を築く。詳かに東鑑になら見ゆ。今之を略す。夏四月二日、公、閑院を造るを助く。

三年 辛亥春三月二十二日、公、成恒莊を以て六郎頼俊に授く。讓狀に曰く、上津房倉に告げ、頼俊の軍功を賞し、成恒莊をなす。授くに、上津房介何人なるや詳かならず。夏六月二十七日、閑院成る。

六年 甲寅春三月十日、公、薨す。歴代私鑑に以て三年三よはひ、齡七十八、願成寺金堂前に

幕命により閑院を造

長頼公薨す

血敷原の戦
今の木上村千敷原

葬る。公、大將軍源頼朝・頼家・實朝・藤原頼經・頼嗣・宗尊親王の六世に歴事して屢々功あり。前後賚賜優渥なり。一日、閏公、實朝に調す。實朝筆を走らし、索性法師萬代松の詠、四十の壽を賚するの國歌なり。古今集に見ゆを扇を翫くに題し、以て之を賜ふ。公の末年、閏公、平河右衛門義高反して木枝城に據る。公、其の功を思ひ使を遣して慰諭せしむ。義高命を奉せずして兵を發し、血敷原に陣す。公、兵を遣して之を討たしむ。木枝の兵敗走す。坂と曰ふ、俗に藤行と謂ふを居去と爲す。蓋し時人其の狼狽して亡つ追及して之を殲す。進んで城を攻め、正門を破りて入る。義高暨び城兵皆已に自殺す。乃ち火を放つて退く。公、七男あり。武林傳に曰く長頼十長は頼親公、次は彌五郎頼氏、次は頼俊公、次は上村四郎頼村、次は八郎爲頼、次は九郎頼員、次は稻留十郎頼貞なり。二女あり。長は犬童女、頼員の男長繩に配す。女を以て頼員の女とす。次は虎若女、幼にして四郎宗頼の家に育つ。宗頼、高橋の田町及び早瀬、小中島の地餘町を之に與ふ。稍々長じて愛甲九郎景元に嫁す。歴代族譜備考に曰く、景元、公に従つて遠のち大歸し髪を薙りて尼となり、命運と號す。歴代私鑑江より來ると、今の愛甲氏の祖なり。後大歸し髪を薙りて尼となり、命運と號す。族譜備考に曰く、法統愛蓮と、何の據る所あるを知らず。歴代、是に於て宗頼の次子三郎兵衛尉頼重、頼氏及び其の子孫上相良の稱

頼重又田を争ふ

頼氏及び其の子孫
上相良の稱

黒肥地村
青蓮寺立つ

ち高橋等の地租税を掠む。公、爲に代官を置きて以て之を制す。頼重相争うて鎌倉に訴ふ。幕府田を以て尼に還し、尼をして頼重の母の家に寓せしむること故の如し。後頼重又田を争ふ、彌五郎頼氏尼に代り鎌倉に訴へて之に勝つ。彌五郎頼氏は公の第二子なり。頼景公薨するに及び、公、多良木を以て頼氏に授け、其の後を續がしむ。是に於て始めて上相良の號あり。而して平原・新堀・窪田・岩崎・黒肥地・肥地岡・鍋倉・井口・乙益の九氏之を上相良の小苗字と稱す。頼氏、鎧城を築きて居る。寛元三年八月十六日、鎌倉鶴岡の放生會に富田次郎兵衛尉と競馬す。東鑑に曰く、一番左工藤右衛門次郎右衛門生、二番左富田次郎兵衛尉、右相良彌五郎西又太耶、某年月日卒す。法論淨蓮。頼氏、四子あり。長は六郎頼宗、小字牛房丸、嗣ぐ。頼宗に至りて并せて久米村を食む。永仁三年閏頼景公の廟を龜田山に建つ。六年、寺を廟側に建て號して青蓮と曰ふ。蓋し夫人須惠氏の法論を用ふるなり。正安三年九月二十四日卒す。法論蓮空。次は窪田民部少輔頼吉、是を窪田氏の祖とす。次は岩崎五郎左衛門尉頼重、是を岩崎氏の祖とす。次は黒肥地藤次郎頼秀、是を黒肥地氏の祖とす。頼宗三子あり。長は孫三郎族譜備考

は彌三郎に作る今、**經賴**、嗣ぐ。興國元年、北朝曆、應三年、縫殿允、**祐長**と義兵を起し、**山田城**に據り、歴代參考に従ふ。**經賴**、嗣ぐ。興國元年、應三年、縫殿允、**祐長**と義兵を起し、**山田城**に據り、遙かに官軍に應ず。是の歳、又内河彦三郎と再び義兵を起す。正平八年、北朝文、祐長と長氏公の功を大宰府に告ぐ。後因幡守と稱す。某年月日卒す、**法詮**、觀運。次は肥地岡某曰く、大耶賴持是を肥地岡氏の祖となす。次は鍋倉某く、周助賴年と、是を鍋倉氏の祖と爲す。賴經二子あり。長は十郎賴仲、嗣ぐ。某年月日卒す、**法詮**、觀運。次は井口某曰く、賴召と、是を井口氏の祖と爲す。一女あり。考ふる所なし。賴仲、二子あり。長は遠江守賴忠、小字五郎丸、嗣ぐ。某年月日卒す、**法詮**、大連。次は乙益四郎賴則、是を乙益氏の祖と爲す。一女あり。養毛治部少輔祐長に嫁す。賴忠、遠江守賴久を生む。初め彌三郎と稱す、嗣ぐ。正長元年二月二十四日卒す、**法詮**、源運。賴久、二子あり。長は左衛門尉賴觀、嗣ぐ。次は攝津守賴仙、文安五年與に俱に謀反して誅に伏す。續ぎ絶ゆ、事下文に具にす。賴觀、**法詮**、運玖。賴仙、**法詮**、運球。

賴村及び其の子孫

四郎賴村は公の第四子なり。邑を上村に食む、因つて氏とす。而して其の後世々上村の城主たり。某年月日卒す、**法詮**、榮運。賴村次郎賴武を生む。賴武、又五

洞然居士

郎賴綱を生む。賴綱、藤五郎隆賴を生む。隆賴、九郎長房を生む。長房、四郎賴繼を生む。賴繼、千葉介賴國を生む。賴國、民部少輔賴威を生む。賴威、上總介運重を生む。運重、遠江守高賴を生む。高賴、二子あり。長は參河守直賴、嗣ぐ。次は修理亮長國乃ち洞然居士なり。直賴、子なし。爲賴公の第二子駿河守賴廉を養つて子と爲す。賴廉、大永四年九月十六日卒す、**法詮**、行岳運性。賴廉、二子あり。長は上總介賴興、嗣ぐ。弘治三年二月二十一日卒す、年七十八、運性寺に葬る、**法詮**、通山運泰。次は兵庫允長種、天文四年四月八日、讒に遭ふて殺さる。法論古岑運玖、賴興、四子あり。長は晴廣公、次は左衛門大夫賴孝、嗣ぐ。次は左馬助賴堅、豊福の地頭となる。次は稻留左近大夫長藏、岡本の地頭となる。賴孝、弟賴堅、長藏等と俱に謀反して誅に伏す。事下文に具にす。賴孝、**法詮**、本山運光。賴堅、**法詮**、雲外昌松。長藏、**法詮**、金阿彌陀佛。賴孝、三子あり。長は四郎賴辰、父と與に誅に伏す、**法詮**、隨安運得。次は新左衛門長陸、一に賴陸、次は大和守利行、皆幼にして誅を免かる。長陸、久米の地頭となり、晴廣公の女を娶り、後密かに志を妻の兄大膳助賴貞に通す。朝鮮の役、間に乗じて謀反し、

事覺れて誅に伏す。法證正澤運貞、利行、幻術を好み、一雲齋と號す。慶長七年月日しゆつ。法證月溪一雲。三女あり。長は菱刈美濃に嫁す。次は那須某に嫁す。次は東喜兵衛頼乙に作るに嫁にす。

爲頼

頼員及び其の子孫

八郎爲頼は、公の第五子なり、天す。

九郎頼員は、公は第六子なり。後髪を剃りて九郎入道濟信と號す。弘安四年、

頼俊公に從つて元兵を禦ぎて功あり。正應五年十二月朔、幕府親王勳狀を賜

ふて、相模守北條貞時陸軍少輔、歴代私鑑、族譜備考は長綱に作り、以

て、私鑑、備考は蓮寂公の第六子とす、今、長綱、犬童女を娶りて四子を生む。長は犬

童九郎左衛門永重、是を犬童氏の祖と爲す。次は西七郎重俊、是を西氏の祖と爲

す。而して西園氏は西氏より出づ。次は豊永九郎頼元、原田の地頭と爲る。是を

豊永氏の祖と爲す。而して林田・吉牟田・馬場園三氏豊永氏より出づ。次は原十郎

重阿、是を原氏の祖となす。而して中島氏は原氏より出づ。

十郎頼員は公の第七子なり。西村の地頭と爲る。一武城に居り、稻留氏と稱

す。是を稻留氏の祖と爲す。

爲貞

史論

鎌倉

播磨國

登前

外史氏曰く、論者曰く、公、天險の地を擇んで而して來りて本藩に居る。此家の長久なる所以なりと。余の論は然らず、夫れ遠の相良は祖先の邑にして鎌府に近く、以て居るべし。然るに公去りて居らず、播磨の飾磨は膏腹の地にして京師を距ること甚だ遠からず、以て居るべし。然るに亦居らず。豊の成恒は瀬海の地に於て魚鹽の利、舟楫の便あり、以て居るべし。然るに亦居らず、公、其の僻遠を厭はずして斷然本藩を以て、定めて子孫永久の治所と爲すもの他なし、父頼景公をして自ら安んせしめんと欲するなり。孔子曰く、夫れ孝は徳の本なり、教への源りて生ずる所なりと。公は創業の主なり。其の國を治め、民を教うるに孝を以て本と爲す、則ち本立つて道生じ、國治り民化し、徳の流行強りなし。故に其の後世干戈の際と雖も猶は能く其の遺徳を存す。洞然居士、頼景公に上る書中に衰世尤も宜しく孝を思ふべしの語を觀る、感すべきなり。嗚呼公の孝や至れり。家豈に長久ならざるを得んや。家豈に長久ならざるを得んや。

卒す、法論通心。頼道、四子あり。長は藤五郎頼連、嗣ぐ。某年月日卒す、法論不存一物。次は伊勢守長俊、次は治部少輔長廣、次は土佐守頼基。頼連、四子あり。長は治部少輔實重、嗣ぐ。應永二十二年正月十二日卒す、法論道有。次は出羽守長名、次は隠岐守頼澄、次は大膳大夫長連。實重、頼廣公の女を娶り、一男一女を生む。男は長續公、後事下文に具にす。

外史氏曰く、公、源右府の前驅と爲り、一時之を榮とす。然るに公、既に職を辭するの志あり、何ぞ其の謙退の深きや。其の既に職を辭するときは、則ち身宮室に處らず、而して出で、封界要衝の地に居る、管に敢て自ら逸居せざるのみにあらず、子孫をして封疆を拓かしめんと欲するなり、何ぞ其の思慮の遠きや。嗚呼守成の良と謂ふべし。

四 頼俊公

頼俊公は、長頼公の第三子なり。東鑑に曰く、文暦元年七月六日、幕府群臣をして書を作らしめ、前山城守藤原秀朝、前山城守中原盛長、散位大江以康、散位三善康持、民部大進三善康連、中務丞大江俊行、源正忠大江以基、大膳進大江盛行、兵庫允三善倫忠、藤原頼俊等十七人に命じて奉行たらしむる。政體案するに藤原頼俊は必ず公なり。然るに舊史書せず、今附して以て博覽の初め大村佐牟田に居る、佐牟田六郎と稱す。寛元四年三月五日、長頼公人吉莊の南方を授く。建長三年三月二十二日、長頼公、公の軍功考へずを賞し成恒莊を授く。

六年 甲寅、頼親公老を告ぐ、公、嗣いで立つ。

正嘉元年 丁巳秋九月十四日、幕府親王教書藏守北條長時運署を公に賜ひ、人吉莊の南方成恒鎌倉の下文及び教書は皆成恒に作る。讓狀は國字を以て書す。亦奈利門前に作る。洞しや、然狀は奈利恒に作る。歴代参考は成恒に作る今之に従ふ、其の成恒に作るは誤りなり。莊の地頭職に補す。信相傳狀に地頭職に補すとあるに従ふ。運信未だ何人なるを詳かにせず。下文を尼妙阿及び西心法師に賜ひ、食邑を給す。阿未だ何人たるを詳かにせず。政體案するに嘉暦二年探尼妙阿と。此に據りて則ち蓮佛公の女たること疑ひなし。蓋し大童女の法號なり。今考ふる所なし。疑ひを存して以て博覽の士に俟つ。

正嘉中 曰く、年月日開ぐ、或ははつ、髪を剃りて六郎法師沙彌迎蓮と號す。

長俊及び其の子孫

頼照及び其の子孫

史 論

法を學びて正觀坊幸慶と號す。幸慶播磨坊幸圓を生む。

彌六郎長俊は、公の第四子なり。桑原氏を稱す。是を桑原氏の祖と爲す。長俊荒瀬六郎頼直を生む、是を荒瀬氏の祖と爲す。其の後世故あり、改めて有瀬氏を稱す。長俊六世の孫桑原隠岐守、上相良氏と反し、誅に伏し、後を絶つ。

讃岐守頼照は、公の第五子なり。園田氏を稱す。是を園田氏の祖と爲す。頼照、二子あり。長は樅木五郎頼綱、是を樅木氏の祖と爲す。次は鶴田八郎頼秀、是を鶴田氏の祖と爲す。歴代參考に曰く、頼綱、頼直、頼秀皆長俊の子なり。歴代私纂に曰く、皆頼綱の子なり。外史氏曰く、公、菊池氏に従つて元虜を平げ、功を以て葦北郡を領す。公の武、父兄に譲らず、而して功は以て封疆を拓くに足る。之を善く人の志を繼ぐと謂ふ、亦可ならずや。

五 長 氏 公

法 鑑 彙 通

公 制 要 考

菊池武時北條英時を討つ

長 氏 公

三五

長氏公は頼俊公の第一子なり。六郎三郎と稱す。

延慶某年春正月二十五日、頼俊公薨す。公代りて立つ。

嘉暦元年丙寅冬十月二十二日、幕府親王下文人たるを詳かにせず。政體大日本史を案するに是の歳、鎌倉の執權北條高時疾あり、族北條惟良、赤橋守時をして運籌して事を行はしむ。則ち日阿平は必ず此の二人なり。二人の姓皆平にして一人は日阿と書す、未だ何と稱するかを詳かにせず、蓋し藤原者の稱なり。今再び本書を閲するに草書にして沙彌の字あり、舊史誤讀して日阿と爲すなり。又後所氏の列物を閲するに乾元二年三月二十八日、鎌府賜ふ所の紙許狀平沙彌連署あり、蓋し此の類なり。標書又平政國圖上大和右近將監君と書す。政國右近將監も亦未だ考へず。歴代參考に曰く、政、世子彌三郎頼廣に賜ひ人吉莊の南方成恒莊の地頭職に補す。時に世子鎌倉にあり。晦、前征夷大將軍惟康親王薨す。公、計を聞いて髮を剃り、自ら蓮道と號す。是の歳、公、政を世子頼廣に授く。公の政を授くること舊史に書せず。歴代參考に曰く、嘉曆中蓮喜公嗣いで立つ。政は是の歳にあり二年五月十日、探題府書を與へるを詳かにせず。政嗣案するに蓋し探題北條英時の甥規矩掃部助高政なり。食邑刀思名今考ふる所なしをして舊に依らしむ。元弘三年三月、肥後守菊池武時兵を起して探題北條英時を博多に討つ、克たすして之に

死す。少貳貞經・大友貞宗、遂に英時を誅す。六月、公、一品親王たるを以て第二子三郎次郎朝氏、第三子九郎祐長をして、兵に將として往きて之を護衛せしむ。頼廣公も亦別に兵に將として往く。十四日、頼廣公及び朝氏、祐長兵を率ゐて太宰府に到る。十六日、朝廷御旨を下し、榮花押兵を徵す。以て蓮喜公及び朝氏、祐長をして、公年老を將として徵せしむ。蓮喜公及び朝氏等、菊池武時、少貳貞經、大友貞宗等と北條英時を討つ。何の據る所ある知らず。政議大日本史、本朝通鑑を案するに、武時を討ちしは三月にして貞經、貞宗の英時を誅するは五月なり。事皆宣旨、又祐長をして兵に將として徵せしむ。十月二十九日、祐長兵を率ゐて太宰府に到る。建武二年二月、北條英時の餘黨上總掃部助高政、左近大夫貞義に作る。今太宰府に告ぐるの書を用ふ。亂を作する。三月大友貞宗攻めて之を殺す。高政、前前の帆柱城に據る。四月、公、又祐長をして兵に將として往きて之を討たしむ。七月二十八日、祐長兵を率ゐて太宰府に到る。頼廣公、時に成恒莊にあり。是の日兵を率ゐて尋ぎて至るに討つて功あり。今太宰府に告ぐるの書に從ふ。延元三年用ふ北朝の曆三年八月十九日、太宰少貳頼尙書、参考は以て少貳入道頼尙と爲す。今之に從ふ。を三郎次郎朝氏に與へ、人吉莊の北方を復し。寛元元年、公及び長孫兵庫允定頼をして各々其

頼頼を討つ

の半を食ましむ。興國元年、北朝の曆六月二十四日、是より先、足利尊氏の反するや、少貳頼尙書を長孫定頼に與へ、兵を促す時、未だ遠かに之に應せずと雖も、然も遂に頼尙の招き誘ふ所となり、密かに志を尊氏に通す。既にして總殿允祐長、孫三郎經頼義兵を起し、山田城に據りて遙かに官軍に應ず。長孫諸を太宰府に告ぐ。是の日、少貳頼尙書の書北朝の年號を用ふ。後皆此に倣ふを公に與へ、擊つて之を平げしむ。祐長山田城を棄て、餘黨逃げ匿る。事太宰府に聞ゆ。九月二十日、太宰府書し、名を書せず。孫次郎に與へて幸法師常幸と稱す。蓋し公の族なり。之を討たしむ。正平八年、北朝の文十二月十三日、是より先、祐長、經頼己に降ると雖も、郡士頼義兵を起して官軍に應ず。公、乃ち之を要撃す。治部少輔祐長、孫三郎經頼と動狀直だ少輔孫三郎と書し、姓名を書せず。政議案するに少これ、諸を太宰府に告ぐ。是の日、頼尙動狀は即ち治部少輔祐長にして、孫三郎は即ち孫三郎經頼なり。諸を太宰府に告ぐ。是の日、頼尙動狀を與へ、公の功を賞す。去年眞幸院向の士聚りて義兵を起す。公、擊つて之を平ぐ。是の歳、眞幸院の兵復興る、公、再び之を撃つ。士卒力戰して疵を被る。祐長、經頼又諸を太宰府に告ぐ。是の日、頼尙動狀を公及び從士某ふる所等にて與へて功を賞す。某年月日、公、薨す。一説に曰く、北朝文和申と。族譜備考に曰

眞幸院の義兵を平ぐ

長氏公薨す

く、文和四年四月十四日と。探源記頭書に曰く、文和某年二月十四日と。佐牟田の迎連寺に葬る。公、
 五男有り、公、三男あり、而して氏泰を以て頼照の子と爲す。今系圖一本、探源記頭書に従ふ。長は
 頼廣公、次は三郎次郎朝氏、次は養毛治部少輔祐長、源記頭書に曰く、一名景氏と、探
 西橋十郎頼照く一名長武と次は竹下十郎氏泰、養毛氏と、探源記頭書に曰く、九郎景氏と、探
 族譜備考に曰く、氏泰を以て頼照の子と爲すは是を似す。今考ふべからず、疑を存して以て博覧の士を俟つ。なり。

三郎次郎朝氏は、公の第二子なり。元弘三年、公に代り兵に將として太宰府に
 到る。延元三年、少貳頼尙書を與へて人吉莊の北方を復せしむ。其の子孫考ふ
 る所なし。

治部少輔祐長は、公の第三子なり。養毛氏を稱す。是を養毛氏の祖と爲す。初
 め九郎と稱す、又改めて縫殿允と稱す。元弘三年再び公に代り兵に將とし
 て太宰府に到る。建武二年又公に代り兵に將として太宰府に到る。興國元年、孫
 三郎經頼と俱に義兵を起すを圖りて山田城に據る。正平八年、經頼と公の軍功
 を太宰府に告ぐ。祐長、二子あり。長は深水某、是を深水氏の祖と爲す。次は
 滑川某、是を滑川氏の祖と爲す。

朝氏

祐長及び其の子孫

深水氏の祖か

頼 照
氏 泰
史 論

十郎頼照は、公の第四子なり。西橋氏を稱す。是を西橋氏の祖と爲す。
 十郎氏泰は、公の第五子なり。竹下氏を稱す。是を竹下氏の祖と爲す。
 外史氏曰く、養爾たる我が一番中、而も或は官軍に應じ、或は賊軍に應じ、
 相攻撃して已まず、則ち天下の亂れたる知るべし。是の時に當りて天下の將士、
 禽奔獸走して嚮背定らず、譬へば一犬影を吠わて群犬其の聲に吠ゆるが如し、
 豈に一人の其の之を徵する所の者、義か不義かと曰ふて而して後之に應ずるも
 のあらんや。其の賊軍に應ずるも亦易んぞ深く罪するに足らん。

六 賴 廣 公

法 滋 蓮 尊

賴廣公は、長氏公の第一子なり。彌三郎と稱す。

嘉暦元年丙寅閏月日、鎌倉に如く。冬十月二十二日、幕府下文を賜ひ、人吉莊の南方成恒莊の地頭職に補す。是の歳長氏公政を公に授く。公、嗣いで立つ。

新田義貞高時を誅す

元弘三年癸酉夏五月二十二日、左兵衛督新田義貞、鎌倉を攻めて之に克つ。

北條高時誅に伏す。是の時、山田城主永留彌三郎賴常鎌倉にあり。義貞の軍に従ひ力戦して死す。六月十四日、公、朝氏・祐長と兵を率ゐて太宰府に至ること上。文に見ゆ。十六日、朝廷宣旨を老公に下して兵を徵す。秋七月二十六日、朝廷宣旨上卿大納言藤原宣房を公に下し、人吉、成恒二莊の領職故に襲らしむ。詔に曰く、兵革如し收まらば民安堵すべし、日者遠近の士民闕下に走集し、爲に農業を妨ぐ、徒らに益なきなり。其之を止めよ。凡そ賊黨を除く外將士有する所の食田領職一に皆故に襲らしむ、更に來りて請ふとを須たす、特旨を以て予奪する所の如きは此に準ずるを得ると勿れど。冬十二月六日、税所入郎と稱す。景宗、

高政貞義の亂

公に代り兵に將として太宰府に到る。

足利尊氏反す

建武二年乙亥秋七月二十八日、是より先、規矩高政、系田貞義亂を作す。公、時に成恒莊にありて之を聞く。是の日、兵を率ゐて太宰府に到る。祐長も亦兵を率ゐて人吉莊より先つて至る。八月二日、參議足利尊氏征夷大將軍と爲る。冬十一月尊氏反す。十二月二十三日、少貳賴尙、尊氏の命を以て書を世子八郎定頼に與へて兵を促す。

楠正成兵庫に死す

延元元年丙子夏五月二十五日、新田義貞、尊氏と兵庫津に戦ひ大ひに敗る。左衛門尉檢非違使兼河内守楠正成之に死す。時に肥後守菊池武重、義貞の軍にあり。弟武敏をして淡川の戦狀を視しめ、正成のまさに死せんとするに會し、去るに忍びずして亦之に死す。秋八月十五日、豊仁親王を以て帝を京師に稱す、是を北朝の新主と爲す。冬十二月二十一日、車駕後醍醐神器を奉じて吉野和に幸し、新に行宮を造る。是を南朝と爲す。

豐仁親王を八代に奉す

二年丁丑閏七月日、菊池武重吉野に朝し、親王を奉じて筑紫を鎮めんことを請ふ。即ち式部卿懷良親王を以て征西將軍と爲す。三月、武重懷良親王を奉じて歸り、

新に館を八代高田に築き、兵を屬して之を衛護す菊池軍記は興國元年に係く。歴代參考日本史に從ふ。備考は興國二年に係く。今大に從ふ二十七日、太宰府書武四年を用ふを平河六郎三郎に與へて曰く、本月六日、足利氏の兵、攻めて越前金崎城を陥れ、新田義貞等を殺すと。而も義貞實に未だ死せざるなり。

三年 戊寅秋閏七月二日、左近衛中將新田義貞、藤島城前を攻む。軍敗れて之に死す。

興國元年 北朝の暦かのたつなつ 庚辰夏六月十九日、是より先、孫三郎經頼、内河彦三郎義貞と復義兵を起す。是の日、少貳頼尙、書を税所景宗に與へ、撃つて之を平げしむ。義貞軍破れて薩に走る。

正平貞和の初、公、薨す歴代參考、歴代私鑑に曰く、年月日詳かならずと、或は曰く貞和申させ田迎蓮寺に葬る、法諡蓮喜。夫人は宇土侯の女するに菊池軍記に建武二年、伯耆守名和長年の孫村上顯興肥後に來り、菊池氏に寄ると。肥後古城記に曰く、文明中長年の子孫村上武顯八代より來りて宇土城主と爲り、後復名和氏を稱すと。又舊史に據るに、文明以前已に名和氏ありて宇土城主となると、此に由りて之を考ふるに、某年月日、夫人氏薨す、法諡法山佛心。公、三男あり。長は宇土侯は蓋し名和氏なり某年月日、夫人氏薨す、法諡法山佛心。公、三男あり。長は定頼公、次は外越氏高、次は松木長利に作る、今歴代參考に從ふなり。

新田義貞戰死す

經頼、義直又義兵を擧ぐ

頼廣公薨す

氏高
長利

氏高は公の第二子なり。外越氏を稱す。其の子孫考ふる所なし。
民部長利は公の第三子なり。松本氏を稱す。其の子孫考ふる所なし。

七 定頼公

法隆寺

葦北田河内を攻む
日奈久村の内

八代原田を撃つ
有佐村の内

定頼公は、頼廣公の第一子なり。初め八郎と稱し、又兵庫允と稱す。建武二年十二月二十三日、少貳頼尙、足利尊氏の命を以て書を與へて兵を招く。興元元年經頼・祐長再び義兵を起さんとす。事太宰府に聞ゆ、十二月十日、頼尙書を與へて撃つて之を平げしむ。正平元年北朝の貞九月二日、公、後門の將經尙姓を經尙とす、未だ何人たるを詳かにせず。政議案するに太宰府に告ぐるの書に曰く、原田の戦功宣尙の親しく視る所なり。此に據りて則ち宣尙は蓋し頼尙の屬にして、經尙も亦宣尙の從なりと八代原田を撃つて功あり。諸を太宰府に告ぐ。十二月三日、頼尙書を與へて田河内の戦功を賞し、且つ諸を幕府に告ぐ。足利二年北朝の貞九月十二日、頼尙書を與へて八代郡七村彌松村田津拾壹町肆段、大村田拾壹町壹段、抗瀬村田貳拾玖町、福生原村田伍段餘、萩原村田拾五町肆段、吉王丸村田壹町、京泊田伍段を給す。十一月十二日、南朝宣旨を下して兵を徵す。詔に曰く、若し義兵を擧げて王に勤めば、則ち遠江相良莊、肥後求麻郡人吉莊の北方、山北郷、播磨須川莊の領職必ず故に襲らしめんこと。

足利直冬を撃つ

正平の初め、頼廣公薨す。公、代りて立つ。

六年北朝の觀辛卯冬十月五日、是より先、中國の探題足利直冬の肥後に走るや、因幡守經頼志を直冬に通す。公、乃ち之を討つて屢戦ひ、士卒創を被る。是の日、頼尙書を與へて之を褒勞し、功を幕府に告ぐ。是の月、公、太宰府に如かんとす。二十三日、頼尙書を與へて之を止め、固く治所を護らしむ。

七年北朝の文壬辰春正月十三日、頼尙書を與へて代参考に従つて此に係く兵を招く。

十年北朝の文甲午夏四月五日、頼尙書を孫次郎に與へて、日向三俣院南方拾町の地頭職に補す。

十二年北朝の延丁酉冬十二月十八日、北朝嚴帝宣旨上郷萬里小路中納言、辨官、藏人頭、左中將兼藤原時光を下し、公を從五位下に叙し、遠江守に任す。

十三年北朝の延戊戌春、幕府一色直氏を以て鎮西探題と爲す。肥後守菊池武光撃つて之を走らす。

十四年北朝の延己亥秋七月、菊池武光征西將軍懷良親王を奉じ、少貳頼尙と筑後河に戦ひ、大ひに之を破る。冬十一月十四日、幕府義詮教書未だ何人なるを詳かにせ

武光頼尙と筑後川に

武光直氏を撃つ

日向北郷を領し都城
を守る

求麻外史

四六

予、歴代考は以て、を賜ひ、公に日向北郷領の家職を授く。公、乃ち田中公長を遣して都城を守らしむ。

十五年 北朝の延かのは月日、庚子、青井社に謁す。大官司前清、子無し。公、前清に命じて第五子九郎頼範を以て嗣と爲す。

無量壽院を創す
定頼公薨す

正平の末北朝の貞治中無量壽院を創す。歳を院中に守り、著して永式と爲す。後、

公、政を世子前頼に授け、富尾山に老す。文中元年 北朝の應永五年 八月二十五日、公、薨す。佐牟田の迎違寺に葬る。法諡契阿彌陀佛。公、六男一女あり。長は前頼公、次は今村藤太頼劫、次は丸目兵庫允頼書、次は丸野四郎頼成、次は青井九郎前成、次は小垣頼氏、女は因幡手經頼に嫁す。

頼劫及び其の子孫
頼書及び其の子孫

藤太頼劫は、公の第二子なり。今村氏を稱す、是を今村氏の祖となす。

兵庫允頼書は、公の第三子なり。丸目氏を稱す。是を丸目氏の祖と爲す。初め

頼成

の名は氏頼、應永元年 都城に戦死す。法諡一了。四郎頼成は、公の第四子なり。丸野氏を稱す。初めの名は頼豊、應永元年 都城に戦死す。法諡示賢。其の子孫考ふる所なし。

前成

九郎前成は、公の第五子なり。公の命を以て青井社を冒す。初めの名は頼範、應永元年 都城に戦死す。法諡無叔。

頼氏

頼氏は、公の第六子なり。小垣氏を稱す。其の子孫考ふる所なし。

史論

外史氏曰く、從五位下遠江守爲憲始めて武弁と爲りしより、從五位下大膳大夫頼繁に至るまで八世、叙爵任官世々相繼ぐ。而して頼景公より頼廣公に至るまで、頼親公を除く外五世、武功彼の如く其多しと雖も、而も叙任を得るものなし。蓋し天下大ひに亂れ、軍國多故の故を以てなり。公に至り始めて從五位下に叙し、遠江守に任せられ、美を先君に比するを得たり。豈に亦榮ならずや。

八 前頼公

法蘭 立阿

前頼公は、定頼公の第二子なり。

正平の末嗣、定頼公、政を公に授く。公、嗣いで立つ。

建徳二年北朝の應和のこみ辛亥、幕府義満伊豫守今川貞世を以て鎮西の探題となす。

文中元年みづのねはる壬子春三月、今川貞世、大内義弘と兵を合せて肥後を攻む。肥後守菊池

武政、征西將軍懷良親王を奉じ、逆へ戦つて之を敗る。秋八月二十五日、契阿公

薨す。

武朝貞世と託磨原に

天授四年北朝の永つらのほうまき戊午秋九月、肥後守菊池武朝征西將軍懷良親王世に鎮西宮と稱し

又後將軍宮と稱する。又後將軍宮と稱する。今川貞世と託磨原に戦つて之を敗る。

天授中興々公、從五位下に叙し、近江守に任せらる。南朝論旨を下して近江守に任ず。

弘和三年北朝の承ふのこみ癸亥夏四月十四日、征西將軍懷良親王令旨花押を公に賜ひ、

求麻郡、葦北郡の領職故に襲らしむ。菊池武政手書を副ふ。

公南朝天子に拜謁す

觀音寺立つ

元中二年北朝の至きのこみ乙丑春二月十七日、南朝の親王未だ何人たるを詳かにせず、政頼案
るに託磨原の役には、公、蓋しりやうじ左衛門を賜ひて公の軍功を賞し、肥前の守護職に補す
菊池氏に從つて功を立しなり令旨佐花押を賜ひて公の軍功を賞し、肥前の守護職に補す
冬十月十日、南朝山帝宣旨辨を下し、新故領職一に皆舊に依らしむ。是に於て、
公、朝勤の志あり。行きて南都に詣る、軍國多故に會ふて入朝を得ず、將に歸
らんとして僧無塵持にして一條前太政大臣某の次子なりとに遭ひ、語るに其の志を以て
す。無塵爲に之を朝に言し、朝議之を許す。十一月三日、宣旨辨を下し、昇殿
を聽さる。公、入勤して命を拜し、感喜意外に出づ。公、乃ち無塵を聘し、以
ひて歸り、寺を創し以て開山と爲す、采地五百石を給す。今の正法山觀音寺是
なり。

征西將軍薨す

四年北朝の嘉ひのこみ丁卯秋七月四日、兵部卿親王兵部卿親王未だ何人たるを詳かにせず。歴代
其親王の子美する所を爲りて太宰府にあり。而して帥宮と稱するものはなりと。何の據る所あるを知らず。
政頼大日本史を案するに後村上帝皇子帥宮と稱するは泰邦親王にして兵部卿に任ぜらるるは師成親王なり
今考證すやうじ右少辨を公に、勳狀花押を公の族に賜ひ、軍功を賞す。十一日、兵部
卿親王、令旨花押を公の族に賜ひ、肥前小濱莊を給す。

五年北朝の嘉つらのわたつはる戊辰春三月十八日、征西將軍懷良親王薨す。八代麓山に葬る。

前頼公

四九

冬十月十三日、征西將軍良成親王令旨花押を賜ひ、公を三侯院に赴き、和田・高木二人名、二賊を討つ功を賞せらる。

無塵疏銘の祈禱を始
疎銘の祈禱

六年北朝の康つちのまみ己巳夏四月六日、觀音寺開山無塵卒す。是より先、無塵深く敬禮の厚きを喜び、公に言つて曰く、王室に疏銘の祈禱あり。諸侯の家に行ふも古へより未だ之あらざるなり。請ふ老清京に還りて其の法を傳へ、以て特恩に報ひんと。公、之を可す。無塵乃ち弟子雲石と京師に還り法を傳へて西歸せんとし、途に病みて卒す。雲石歸りて之を行ふ。本藩疏銘の祈禱此に始まる。

大慈寺は有名なる勅
王前柏州和尚を出せ

註。疏銘の祈禱は國家泰平武運長久諸願成就五穀豐登の爲め往古より宮中疏銘殿に於て行はれたる御修法にして、其の名の由来も之に因するものか。觀音寺に於ては無塵和尚が元中六年に參内傳受し來り今尙正月三ヶ日に修法するを例せり。九州にて之を行ふは、觀音寺の外に薩州志布志の大慈寺あるのみなりと云ふ。

南北朝和成る

九年北朝の明みづのたまふ壬申冬閏十月、南朝京師と和を講じ、三種の神器を北朝後小松帝に傳へ、南北始めて一統す。

明德四年癸酉、薩、隅、日大ひに亂る。是に於て公、弟兵庫允頼書、四郎頼成、九郎前成と兵に將として日向に赴き、都城を守る。

前壇公郡の城の戦ひ
に獲す

應永元年甲戌春正月十九日、敵兵大ひに至り、我が兵殊死して拒ぎ戦ふ。克たす。公、戦ひに獲す。弟三人尋ぎて戦死す。城陥り、歸り葬る書史辨る所の地を失ふ。法證立阿彌陀佛安じ、以て公の神主と爲す。今の大神寺地蔵堂是なりと。初め公の生るゝや、定頼公、南立坊に命じ、産衣を獻せしむ。公、長するに及んで毎歳素襖を獻す。是より世々以て例と爲す。後今の服に代ふと云ふ俗の麻上下なり、即ち。公、一男一女あり。男は實長公、女は天す。

史 論

外史氏曰く、保元の乱に義朝白河宮を襲はんとを請ふ。帝其の奏を可し。詔すらく、戦勝を俟ち、昇殿を聽さんと。義朝曰く、武臣戦ひに赴く、敢て生を期せず、臣請ふ賜を拜して死せんと。衣を擲げて昇る。夫れ源平二氏世々兵權を握り、門望卑からず、而して義朝の雄名已に九重に聞ゆ、法皇遺詔の及ぶ所なり。而も猶戦勝を俟つて昇殿を聽さんとす、昇殿の重きと固より武弁の企望すべき所にあらざるなり。況んや小諸侯をや。而して公、南都に詣り、僧無塵によりて昇殿を聽さるゝを得たり、宜なり公の威喜意外に出で、而して無塵を敬禮するの厚きや。

九 實長公

法 證 實 阿

實長公は、前頼公の第一子なり。初めの名は頼茂。

應永元年甲戌春正月十九日、前頼公、戦ひに薨す。公、代りて立つ。

五年戊寅秋九月三日、公、從五位下に叙し、兵庫助に任せらる。名を實長と更む。

眞幸院田上城を抜く

六年己卯を稱するは、則ち其の叙任後にあるを知るべし。因て姑く此に備く。夏六月九日、是より先、南北朝の餘黨、猶戦争止まず、公、自ら兵に將として眞幸院に赴き、攻めて田上城を抜く。修理亮畠山直顯置く所の守將後藤新左衛門尉及び和田又四郎等を逐ふて之を走らす。是の日、道鑑、未だ何人たるを詳かにせず。書を與へて公の功を賞す。且つ諸を京師及び鎮西府に告ぐ。

井口八幡社の再營成る
薩摩山門郷を領す

七年庚辰春、再び井口八幡社を營む。三月十五日、成る。是の歳、薩侯大隅守嶋津忠國薩摩山門郷十町を分つて公に與へ、之を領せしむ。後、忠國の族を迎へて夫人と爲す。忠國山門郷を分與して以て、乃ち村上勘解由允兼長と稱す。遺はし

實長公薨す

頼 家

て其の城を成らしむ。後上相良氏の亂に之を棄つと云ふ。

二十四年丁酉夏四月四日、公薨す。其の地を失ふ。法證實阿彌陀佛、神主を無量壽院に安す。公、二男あり。長は前頼公、次は六郎三郎頼家なり。

六郎三郎頼家は、公、第二子なり。其の子孫考ふる所なし。

一〇 前續公

法詮 竺芳

忠國伊東祐堯を撃つ

永國寺を創立す

前續公は、實長公の第一子なり。初めの名は周頼、宮内大輔と稱す。應永間、年月日の初め從五位下に叙し、近江守に任せらる。公、薩侯修理大夫典守に作る。嶋津豊久の女を迎へて夫人と爲す。實は大隅守忠國の妹なり。忠國伊東祐堯を撃つて山東、河南等の城を抜き、勝に乘じて進み、都於郡に抵る。祐堯急を告ぐ、公、自ら輕騎に將とし馳せて日向に赴き、忠國に説いて兵を解かしむ。忠國、侵地を還して退く。十七年蓬萊山永國寺を創し、僧實底を以て開山と爲す。二十年三月、日開公、阿蘇山に登る。前夜吉夢を得たり、名を前續と更む。

二十四年丁酉夏四月四日、實阿公薨す。公、代りて立つ。

二十五年 戊戌、幕府義持澁川義俊を以て、鎮西の探題と爲す。

正長元年 戊申、幕府義教澁川滿直を以て、鎮西の探題と爲す。

享永五年 癸丑、閏七月日、世子虎壽丸生る。

六年甲寅、探題澁川滿直太宰少貳と、肥前に戦つて敗死す。

前續公薨す

永亨中、年月日鎮西の探題左京大夫尾張、日本外史は足利に作り、菊池軍記は新波に作る。政嗣尾張を以て氏とす。氏經の肥後に來るや、公、島津忠國と犬追物習ふ。俗に之を犬追物と謂ふ。葦北の二見に演じて之を觀せしむ。

嘉吉三年 癸亥、夏六月二十六日、公、薨す。永國寺に葬る。法詮竺芳永徳、夫人は島津氏、一男を生む。實に堯頼公なり。文明三年閏八月二日、夫人島津氏薨す。觀音寺に葬る。法詮生圓妙護。

一一 堯頼公

法諡 悅山

頼親等反して人吉城を陥る

入重尾帶刀

堯頼公は、前頼公の嫡子なり。母は島津氏、幼字虎壽丸、後三郎と稱す。
 嘉吉三年癸亥夏六月二十六日、前頼公薨す。公代りて立つ。年甫めて十一。
 文安五年戊辰春二月、多良木城主左衛門尉頼親、弟攝津守頼仙と反す。
 蓋し外越の地頭桑原隠岐守其の端を啓くなり。去年十月將に發せんとして頼仙の
 病に會ひて果さず。是の日、頼親、頼仙兵七百を率ゐて來る、隠岐之を導き、夜
 人吉城を襲ひ、火を放ちて、郭郭を焚く。事不意に出づ、城中爲す所を知ら
 ず。公、菱刈兩に逃る、太夫人島津氏は觀音寺に匿る。城兵半は遁れ、半は降
 る。薩人來り仕ふる者八重尾帶刀、聲を厲して曰く、汝等は君の舊臣にして何ぞ
 遽かに君恩を忘る、吾は一日君の祿を食むも肯て汝等に從つて君の城を棄てず
 と。刀を揮つて賊數人を斬り、身に十數創を被り、戦ひに勝へず、自ら厩舎を
 焚きて曰く、吾義賊刀に汚されずと、腹を屠り、火に投じて死す、城陷る。頼親
 遂に城に入る、頼仙兵を收めて歸る。西村・上村・木枝・深田の義兵往々遮りて之

長續頼親を人吉城に討つ

公菱刈小苗代に薨す

を撃ち殺傷頗る多し。山田城主左近將監長續、變を聞き、即ち兵を擧げて
 馳せ至り、頼親を人吉城に討つて之に克つ。頼親逃げ歸る。賊平ぐ。是に於て、
 長續、使を遣して公を菱刈に迎ふ。公、辭して曰く、寡人城を保つ能はず、幾ん
 ど社稷をして主無からしむ。罪たるや已に重し。人其誰か戴かん。寡人敢て辭
 す、今賊を平げしは卿の力なり。請ふ卿立つて之が主たれど。長續固く請ふ。
 公、歸る。三月二十八日、途にして暴かに薨す。齡十六。菱刈小苗代永福寺に葬る。
 法諡悅山大喜。公、幼にして憤を愛し、常に背に跨りて戯る。遂に憤の觸る、
 所となりて薨すと云ふ。

長續公

法 寶山

長續公は、頼親公の嫡子山田の城主永留莊司次郎頼明八世の孫にして、治部少輔實重の子なり。應永十八年閏八月山田城に生る。藤五郎と稱す、初めの名は長重。永亨中閏八月日比谷に叙し、左近將監に任せらる。

頼親頼仙を誅せんご謀る

寨は小城なり

古多良木久米の戦

文永五年 戊辰春二月、賊頼親を逐ふて堯頼公を迎ふ。堯頼公堯するに及び、群臣公を推して主と爲す。公、代りて立つ、時に年三十八なり。夏月五十三日、人吉城に入る。日夜群臣を會して賊を討たんとを謀る。既にして頼親銅城に據り、頼仙古多良木の寨に據り、其の臣源島某々久米の寨を成る。公、謀りて曰く、銅城は壘堅く、兵強し、攻め易からず。兵を分つて三と爲し、一は古多良木に向ひ、一は久米雀森の堀川に伏せ、一は久米の寨を焼くごせん、頼親梟悍にして慮り無し、火の起るを見れば必ず城を出で來らん、伏を發して夾撃せば、一鼓して殄すべしと。群臣其の計を奇とす。秋八月四日、叔父永留大膳太夫長連兵に將とし、山田主計允・井福彦十郎・村山助五郎・萬江采女正・藤井助四郎・徳

源島を斬る

多良木久米湯前湯山江代鎮す

城戸尾の戦 城戸尾城は水上村江代字尾迎と下屋敷に跨り山岳險阻重疊の間にあり 殺所新兵衛

永右馬佐・子太郎九郎・峯山逸角等之に従ふ。精兵七百餘人御署已に定まる。夜に乘じて兵を發す。五日、久米を攻めて源島を斬り、火を縱つて其の寨を焼く。頼親煙の起るを見て、果して單騎疾馳し、城を舉りて之に隨ふ。頼仙も亦寨を空ふし來りて堀川を涉らんとする比、伏起りて前後より夾撃し、大ひに之を敗り、勦戮して殆ど殲く。長連、頼親・頼仙の首を青蓮寺に獻じて歸る。頼親の子鬼太郎出で、周防に奔り、大内氏に寓す、蓋し大内義興の臣相良正任なるもの是なり。歴代私鑿、族譜備考に曰く、鬼太郎周防に奔る、後大内氏の臣相良遠江守武任といふものは是なり。大内氏亡びて後、武任筑前三笠城に戦死すと。或は曰く、上相良氏の亡びしは文安五年にあり、而して大内氏の亡びしは文明二十年にあり、則ち其の相距ると一百有四年なり、此に由りて之を考ふるに武任は鬼太郎にあらざるなり。私鑿、備考誤れりと。蓋し鬼太郎は即ち正任にして、武任は正任の子若くは孫なり、今之に従ふ井口・窪田・岩崎・新堀・黒肥地・乙益の六氏名聞ぐ。嘗て頼親を諫むるも聽かず、去つて須恵村に移り、遂に難を免ると云ふ。是に於て多良木・久米・湯前・湯山・江代の五村始めて公の邑となり、境内一統す。

寶徳元年己巳秋八月十一日、是より先、桑原隱岐守誅を畏れ、城戸尾の險に依り、堡を築きて之に據る。是の日、相良又五郎頼連、犬童美作守重國・子藤次郎重久名を重將と更む。稅所新兵衛尉、兵に將として往きて之を撃つ。兵を分つて

備瀬か

永野は岩野河内字権
葉の近傍か

豊水吉

豊羽田

寶木但馬不軌を圍る
不軌とはむほんなり

三隊と爲し、一は岩河内より進みて黒坂を登り、一は備瀬より進みて大明神口に抵り、一は高千穂より河を涉りて其の西門名づくに出で、堡に薄り、環り攻む。賊兵屢々出で、突戦し、攻圍滋急なり、堡中大ひに窘み、賊兵間を伺つて逃れ去る。追ふて之を永野に斬る。隱岐父子免れざるを知りて自殺す。族黨皆西門より出で、死戦す。悉く撃つて之を殺す。賊殲く。戦死二百七十餘人、新兵衛の功多きに居る。公、勳状を授けて之を賞し、城戸尾を賜ふ。新兵衛徒りて居る。此の役や一士あり少ふして善く射る、賊を殲すこと頗る多し。姓名を告げずして去る。公、旁く之を求む。原田の賤士豊永和吉是なり。其の祖父某、立阿公に従つて都城に戦死すと云ふ。公、召して之を賞し、氏井口を賜ひ、加ふるに箭及び田五段を以てす。名づけて鷹羽田と云ふ。是より毎歲八月朔、箭を和吉に賜ひ、和吉は厥の粉一包を獻じ、遂に定めて例と爲す。

三年辛未春閏公、自ら師を帥ゐて牛屎院摩に抵る。漆田・赤池の地頭齊木但馬隙に乘じて不軌を圍り、事覺はる。公、薩より歸る。徑に廣田彈正・養田某、名聞を遣して之を詰らしむ。但馬之に對して辭甚だ不遜なり。公、大ひに怒

り、迺ち自盡を賜ひ、原田藤兵衛尉・永井彌太郎をして之を檢せしむ。但馬命を奉せず、士兵二百餘人を集め、赤池の寨に據りて反す。三月七日、兵を發し急に圍みて之を攻む。但馬免れざるを度り、夜潜かに寨を出で、角井井村にありの廣大寺に入りて自刃す。黨與或は火を縱つて寨を焼き、自ら焚けて死し、或は鳩胸川に投じて死す。

長祿元年丁丑閏橋本某、井野木田の岩の西南に岩の遺蹟ありとに據りて反す。攻めて之を抜く。橋本自殺す。

二年戊寅閏薩侯島津忠政、牛屎院を公に與へて之を領せしめ、以て公の北原・菱刈等の豪族を制し、隙を構ふるなからしめんとを請ふ。公、許諾す。乃ち永留大膳太夫長連を遣して牛山城を鎮めしむ。後大童三郎左衛門尉長直に大膳大

夫長直、三郎左衛門尉長直、左京進兼長一人と爲す。讓れり。を以て之に代ふ。

寛正元年十二月二十二日改元あり、庚辰冬十月二十六日、肥後守菊池爲邦手書を公に與へて、葦北郡の領職舊に依らしむ。

三年壬午夏五月九日、公の妹卒す。無量壽院に葬る、法諡妙高。

橋本反す

岩とは小城のこと

大隅牛屎院を領す

牛山城

八代郡高田を領す

郡とはなかわるき、
さ(ながたがふ)
水俣時、
牛屎院を島津氏に復す

細川勝元山名持豊と
京師に戦ふ

愛宕祠を建つ

長續公薨す

四年癸未閏八月日、八代侯伯者守名波、一に名和に作る國音相同じ、長利卒するや、其の子幸松丸年甫めて十三、其の族弱に乗じて亂を作す。幸松丸殆ど危し。老臣内川式部少輔喜定、幸松丸を奉じて難を本藩に避く。公、恤みて善く之を遇し、爲に館を川邊の永江に築きて居らしむ。公、乃ち使を遣して宇土侯するに蓋し伯者忠意なり。に説き、幸松丸を納れんとを請はしむ、聽かず。使者三たび反る、乃ち許す。

六年乙酉春三月九日、幸松丸八代城に復歸す。伯者守に任せられ、名を顯忠と改む。乃ち八代郡高田郷十町を公に予へて曰く、聊か以て積日の恩に報ふ。時に公、菊池爲邦と鄰あり。爲邦來りて葦北を撃つ。水俣の兵畔きて之に應じ、境内騷擾す。是に於て公、牛屎院を島津氏に復し、其の番兵を高田に移し、村山某を遣して平山城を成らしむ。

應仁元年丁亥閏月日、政を世子爲續に授く。是の時、右京大夫細川勝元、右衛門督山名持豊と兵を構へて大ひに京師に戦ふ。勝元檄を傳へて兵を招く。公、自ら兵に將とし往きて之を援く。是の歳、愛宕祠を建つ。二年正月、公、病に罹りて歸る。二月十五日、公、薨す。齡五十八、永國寺に葬る、法諡寶山道

珍。公、犬童左京進兼長の女を納れて夫人と爲し、四男一女を生む。長は相摸守頼金、次は藤五郎頼幡、次は爲續公、次は左近將監頼泰なり。女は上村參河守直頼に嫁す。文明十一年九月六日、夫人犬童氏薨す。永國寺に葬る、法諡玉峯妙金。

相摸守頼金は、公の第一子なり。疾ありて嗣がす。頼金、長定を生む。是を蓮秀公と爲す。

頼幡

頼泰及び其の子孫

藤五郎頼幡は、公の第二子なり、夭す。

左近將監頼泰は、公の第四子なり。初め權五郎と稱す。逆を謀りて事覺はる。長享元年六月十三日、誅に伏す。法諡威風上虎。頼泰、二子あり。長は權五郎長泰、爲續公に従つて八代に在り、父と同日、誅に伏す。法諡賀呈道慶。次は次部大輔長弘、幼を以て誅を免かる。長弘、治頼を生む。治頼逆を謀りて事覺はれ、去つて豊後に往く。天文十五年五月十一日、病みて佐賀關に卒す。法諡摩利支天正位。

外史氏曰く、堯頼公の大隅に遷るや、公、兵を起して賊を誅し、而して堯頼公

を迎ふ。善頼公薨じ、公、衆の推す所となり、立つて主となる。南のかた島津氏を援けて牛屎院を得、北のかた名波氏を納れて高田郷を得、後又細川氏を京師に援く。公の武略偉なり。昔頼親公、政を弟頼俊公に授け、而して嫡子頼明をして山田城に居らしむ。夫れ天の人に福する父祖に縮むときは則ち子孫に羸る、公は頼明九世の孫、而して遂に入りて正統を續ぐ。是れ公が雄武の致す所なりと雖も、亦實に父祖の餘慶なり、豈に偶然ならんや。

一三 爲續公

法證 董船

爲續公は、長續公の第三子なり。母は犬養氏、文安四年閏山田城に生る。初めの名は頼元、四郎三郎と稱す。稍々長するに及んで長續公に従つて隈府に如き肥後守菊池爲邦に見へ、元服を其の館に加ふ。爲邦偏諱を授けて名を爲續と更む。應仁元年丁亥、寶山公政を公に授く。公、嗣いで立つ。是の歳、老公自ら兵に將として京師に赴く。

二年 戊子春正月、老公病に罹り、京師より歸る。二月十五日、寶山公薨す。冬十月二十八日、右京大夫細川勝元書花押を與へて兵を招く。公、親ら兵に將として赴き援く。

文明元年 己丑閏七月日、世子太郎長輔生る。

二年 庚寅閏八月日、從五位下に叙し、左衛門尉に任せらる。

三年 辛卯秋閏八月二日、大太夫人島津氏薨す。

四年 壬辰、夏五月より雨ふらずして、秋七月に至る、大ひに雩す驗あらず。公

文明の大旱 雩(あまこひ)

國歌を賦して雨ふら

す
球磨郷土史は此の歌を
主として何の據る所
あるか

効迎は野に迎ひに出
づること

薩に如く

大追物笠懸を演ず

牛山城主菱刈を襲ふ

乃ち川邊に適き、雨を雨宮に禱る。國歌を賦して曰く、

千早振る神の井垣も枯果て、

名も恥かしき雨の宮かな

歴代私鑿、族譜備考には

名も高き楢の松も枯れつべし

猶ほ恨めしき雨の宮かな

とあり。今案譜及び富家問書に従ふ。

歸途大ひに雨ふる。願成寺勢秀法印雨具を備へて郊迎す。其の夜洪水あり。即ち願成寺に宿る。

六年甲午冬十月十三日、第二子若松天す。

七年乙未、公、薩に如く。冬十月九日、公、薩侯薩摩守島津國久と大追物を

鹿兒島に演ず。大追物手組嶋津修理亮十正、並谷左衛門次郎四正、伊地知新左衛門尉十正、村田大郎左衛門尉五正、上原太助次郎四正、平山又六六正、市來左衛門太助四正、餅原彦五郎六正、嶋津正忠七正、嶋津源五六正、島津薩摩入道九正、島津兵部少輔三正、檢見島津十郎左衛門尉次に天辰齋六正、十日笠懸を演ず。薩摩日記相良左衛門尉二、島津知新左衛門五、平山又六五、上原太助次郎四、村田太助左衛門六、相良七郎二、並谷左衛門次郎六、島津修理亮四

八年丙申春二月二十日、牛山摩の守將島津三郎左衛門尉、兵を起して菱刈

牛山河原の戦

再び牛屎院を領す

玉峰院を創す

球磨川大水

願忠高田を襲ふ

を襲ふ。菱刈氏に名聞ぐ、政議案する。大ひに窘む。初め公、菱刈氏の女を娶りて夫人と爲す。公、其の難を聞き、二十二日、親ら兵に將とし往きて之を援く。薩侯國久も、亦自ら師を帥りて来る。三月二十八日、公、牛山城を攻む、下らず。是の日、北原氏に名聞ぐ、政議案する。來りて好を通ず。秋八月四日、公、牛山の兵と牛山河原に戦ふ。園田壹岐守、及び村山・丸目・築瀬・中島名聞ぐ。之に死す。九月二日、攻めて牛山城を拔く。是に於て國久弟豊後守季久と議し、公をして復牛屎院を領せしむ。公、乃ち永留式部大輔頼福を牛山城に置きて歸る。

十一年己亥秋九月六日、大夫人犬童氏薨す。

十二年庚子欠名波顯忠、使を遣して婚を求む。公、之を許す。是の歲、玉峰院を創す。

十三年辛丑夏六月三日、求麻川（菊池軍記に曰く、球磨河一名木綿葉川、萬葉集、續古今集、大水あり、多く民舍を流す。

十四年壬寅、薩に内亂あり。公、自ら兵に將として往きて牛屎院に軍す。秋九月二日、名波顯忠間に乘じて高田を襲ふ。城兵固く守る、葦北の援兵至る

掩撃おそひうつこと

高田の戦

相良家記録及び原本
共に祢を邪とす誤り
なるべし

八代麓城破る

八代を取る

照角山謁廟の歌

に及んで城を出で、掩撃し、大ひに之を敗る。馳せて諸を公に告ぐ、公、大ひに怒りて曰く、前日顯忠出亡して難を免る、實に先君の恵なり、而して復歸し立つを得たるは實に先君の威なり。故に其の歸るや、乃ち高田を先君に獻じて曰く、以て萬一に報ふと。其の言猶耳にあり、何ぞ之に背くの速かなるや。獨り我を輕侮するのみにあらず、是れ實に先君を欺罔するものなり。我れ討つことなからんと欲するも、將に先君を如何せん。立どころに兵を還す。

十五年癸卯冬十月朔、公、上津浦の城主草上津浦邦種と佐敷に會す。十二月十三日、公、兵を擧げて顯忠を討つ。薩侯國久弟彈正忠修理亮及び祢谷院重度・北原昌宅・菱刈道秀をして、各々其の兵に將として來り援けしむ。志岐、上津浦、柄本兩に作るの援兵も繼ぎて至る、合撃して八代麓城を破り、兵を高田に退く。而して守護菊池重朝の命を待つ。

十六年甲辰春三月七日、公、再び麓城を攻めて之を抜く。顯忠脱走す。公、乃ち八代を取り、軍民を慰撫して還る。途に照角山を踰わ、馬草野に抵り、觀仙公の廟に謁す、國歌を賦して曰く、

山川の早の秋の夢の跡を

春の幻に問ふぞ嬉しき

又賦して曰く

浦島が七世に越わつ十年して

一つに當る我は何かは

此の國歌は、公、自ら言ふ、觀仙公十一世の孫にして、八代を取る、是れ己の功にあらず、實に觀仙公の力なりと。正持寺に宿る、夜雨ふる。又賦して曰く

悦びの涙の雨や深山路の

莓の下より空に聞くらむ

明日、人吉城に歸る。初め菊池持朝の子彈正少弼爲光、宇土城主伯耆忠豐の子養する所となり、私かに菊池氏を傾けて守護職を奪はんとを圖る。是の歳、爲光兵を起して菊池氏と赤熊に戦ひて大ひに敗走し、來奔して松求麻に匿る。

長亨元年丁未春三月朔、公、兵を出して豊福を撃つ。守將竹崎主春允

山川の早の秋の夢の跡を
通ぜざる如し原本も
(早)とせるも恐らく
早(ひでり)の誤りに
あらざるか

摩は(こけ)の意ある
も(苔)の方通じやす
からん

爲光菊池氏と赤熊に
戦ふ
又豊福を撃つ

賴泰等試を謀りて誅せらる

歌は歌

馬門原の戦

重朝と成(たいらぎ)を行ふ

八幡社改造

安清及び子二人を斬り、稻留刑部大輔をして其の城を守らしむ。永國寺普山和尚を隈府に遣はし、其の老、城右京亮爲冬、隈部上総介忠直によりて、八代、豊福を併せ領せんことを菊池重朝に請はしむ。重朝之を許し券書を與ふ。夏六月十三日、是より先、左近將監賴泰・佐牟田上総介・吉牟田孫左衛門と陰に世子長輔を弑して子長泰を立てんことを圖り、事覺はる。是の日、死を賴泰父子に賜ひ、併せて上総介・孫左衛門を誅す。是の歳、公、阿蘇の大宮司惟忠と小熊野に會す。惟忠は名波顯忠の姻なり。公、顯忠を討つに及んで惟忠と歡を失ふ。居ると四年、此に至りて復舊交と修む。惟忠卒し、子惟乘嗣ぐ、惟家立たんことを爭ふ。菊池重朝惟家を助け、公、惟乘を助く。公、重朝と馬門原に戦つて敵數十人を殺す。重朝大ひに懼れ、城爲冬・隈部忠直・中條對馬守をして成を乞はしむ。公、答へて曰く、汝の主幸ひに爲光の罪を宥し、彼をして復歸するを得しめば、則ち唯命に之從はん、然らざれば則ち永く好を絶ち、肯て命を奉せざるべしと。重朝龍勉めて之を許す。公、乃ち成を行ひ、爲光を宇土に納る。

二年 戊申閏ぐ改めて井口八幡社を造る。是より毎歲、正月初卯を以て射禮を行ふ。

社前に行ひ 俗に之を御著して永式と爲す。蓋し公の八代を討ちしとき此の社に首途して、而して師利を獲たるを以てなり。

延徳二年 庚戌夏五月二十二日、幕府義植内書花押を賜ふて公の左京大夫内政弘と應援の功を爲せしを賞す。政弘手書を副へて、足利義植の職を襲ぎしことを告ぐ。

明應元年 壬子春正月初卯に、公、井口八幡社に謁し、射禮を行ひ、聯詞百韻を賦す。歸途林の湯樂寺を過ぎて温泉に浴す。國歌を賦して曰く

補陀洛の誓ひも深き湯樂寺の
庭の泉ぞわけて妙なる

二年 癸丑冬十月二十八日、菊池重朝卒す。初め重朝隈部紀伊介朝夏をして來りて子能運と菊池軍記に曰く、能運は小字宮菊丸、初め武運と名づけ、後今の名に更むしむ。公、許すに世子長輔の女を以てす。重朝卒するに及んで朝夏喪に乗じて亂を作す。八代の士内田・高橋・山井・山北名聞ぐ等朝夏の誘ふ所となり、兵を率ひて赴き援く。公も亦自ら師を帥ひて出づ。老臣固く諫めて之を止む。聽か

朝夏の亂に興す

す。是に由りて婚遂に絶つ。能運立つて深く之を銜む。公、後老臣の言を用ひざりしを悔ゆと云ふ。

三年甲寅春正月晦、是より先、右京大夫細川政元、足利義澄を迎へて之を立つ。義植越前に奔る。是の日、大内義興書を公に與へて曰く、大君難を越前に避く。孤、國に歸りて再舉を圖らんとして九州の大亂を聞く、孤、親ら之を討たんとす、請ふ子貳心ある勿れ、自餘は相良正任、政波集を手寫して以て公に贈る之を陳べん、孤、一々せずと。

四年乙卯夏六月二十日、新菟玖波集成る。初め、公、聯詞を好み、宗匠僧宗祇を師とす。宗祇の勅を奉じて菟玖波集を撰むを聞くに及び、聯詞百韻を賦し、使を遣して之を示す。宗祇五首を取りて以て其の撰に入る。是の時、筑紫の將士にして聯詞を善くするもの少からず、而も菟玖波集に入るは、たゞ公一人のみ。是に於て公の名益々著はる。時に高來侯前馬某、聯詞を善くし公と名を争ふ。亦百韻を賦して以て宗祇に示す、宗祇取らず、高來侯國歌を賦して曰く、
光りある玉は薬屑に埋もれて

爲讀公の文名著はる

公と宗祇法師

人に依るかの和歌の浦浪

蓋し公を羨み、且つ宗祇を恨むの意を述ぶるなり。公、宗祇と相識る、日已に久し。而して未だ嘗て相見るを得ず、互に己の像を書いて以て相贈る。宗祇自ら其の像を贊じて曰く、

寫しおくも我が影ながら世の憂を

知らぬ翁ぞ美まれぬる

異日、一條三位顯卿阿蘇山に登る。遂に來りて公を本藩に訪ふ。公、出で、郊迎し、無量壽院に館せしめて之を饗す。顯卿國歌を賦して曰く、

遙々と尋ねぞ來つる君がほごり

我が敷島の道をしるべに

公、答賦して曰く、

知るべして汝や待ちけむ郭公

此の山里に君が來ぬるは
留歎連日、俱に相見るの晚きを恨む。

公と一條顯卿

爲讀公

香福の激戦

六年丁巳春三月二十七日、永國寺普山和尚卒す。
 八年己未春三月十九日、是より先、菊池能運親ら肥後・筑後・豊後三國の兵に將として至る。我が兵邀へて豊福に戦ひ、多く敵兵を斬る。敵衆を悉して進み戦ふ、我が兵多く死す。支ふる能はず、退きて八代に萃る。能運、勝に乗じ、前んで八代城を圍む、有馬氏も亦戰艦數十艘を泛べて來り攻む。腹背敵を受けて城殆ど危し。公曰く、守護方に宿怨を報ひんと欲し大兵を率ゐて來る、鋒當るべからず、我れ堅く守り力め禦ぐも敵を卻くる能はずして、徒らに軍民を傷く、爲すなきなり、姑く銳を避けて後舉を圖るに若かず。是の日、八代を棄て、歸る。是に於て日奈久、二見陷る。天草の兵畔きて敵に應ず。出水の兵水俣を侵す。眞幸院の兵も亦畔く。世子長毎曰く、今統下畔兵多し、今の爲に之を慮るに、外散地を棄て、内要地を保つ、是れ萬全の策なりと。公、之を然りとし、乃ち牛屎院を島津氏に還し、而して固く求麻、葦北を守る。冬十一月二日、足利義植内書義植花押を賜ふて曰く、吾れ細川政元を討たんとす、卿、兵を出して之を援けよと。是の歲關公、政を世子長毎に授く。九年三月

八代敗る

日奈久二見陷る

水俣侵さる

眞幸畔く

牛屎院を還す

爲公公棄す

その人物性行

其の箴言

若松

爲 頼 公

七 五

十三日、是より先、義植周防に奔り、大内義興に依る。是の日、義植内書義植花押を賜ふて曰く、吾れ今難を周防に避く、諸卿、義興と志を戮せて吾が爲に收復を圖れと。六月四日、公、薨す、齡五十四、無量壽院に葬る、法諡西華蓮船。公、慈仁にして民を愛し、民の疾苦は常に自ら之を問ふ。隄防溝洫の壞れたるは毎に自ら巡視して之を修む。嘗て子弟を箴めて曰く、人は安居を求むべからず、安居は惡の由りて生ずる所なりと。左右の臣を箴めて曰く、人は言を慎まざるべからず、言は禍のよりに起る所なりと。其の左右を禦するに敢て贅言情容を以てせず、恒に自ら箴めて曰く、人は少時も直行自恣の意ある可からず、其の出入必ず一二の老臣を従へ事巨細となく必ず老臣に咨ひ、而して後之を行ふ。心に平ならざるものありと雖も、其の老臣に對しては未だ嘗て和色を失はずと。其の嘉言美行率ね此の類なり。公、五男一女を生む。長は長每、次は若松、次は駿河守頼廉、次は右衛門佐長尙、次は伊勢守長政、女は名波顯忠に許嫁し、未だ適かすして卒す。若松は、公の第二子なり、天す、無量壽院に葬る、法諡量壽。

賴 康
長倫及び其の子孫
長皓及び其の子孫

駿河守賴康は、公の第三子なり。上村城主參河守賴直の子養する所となる。右衛門佐長尙は、公の第四子なり。右衛門佐賴長を生む。伊勢守長皓は、公の第五子なり。八代關の地頭と爲り、西氏を稱す。菱刈重時の女を娶り、參河守長時を生む。長時、菱刈重副の女を娶りて左馬助長誠を生む。

註。長皓、慶長二年の頃、薩摩伊佐郡山野村小木原にある稻留丹後守の廟に詣りて石燈籠二基を建つ、廟及び石燈籠今存す。

外史氏曰く、公、天旱に値へば則ち郊野に出で、自ら雨を禱り、民の疾苦は自ら之を問ひ、隄防溝洫の壞るゝあれば自ら之を巡視す、公の仁や至れり。公、名波氏を討つて八代を取れば則ち自ら其の功に居らず、以て先君賴親公の力と爲す、公の讓や篤し。一家仁なれば一國仁に興り、一家讓なれば一國讓に興る。當時統内の治想ふべし。其の武威に於ける特に隣境に振ふのみならず、細川・大内二氏の若きも亦援を乞ふ。其の文名に於ける亦獨り筑紫に顯はるるのみならず、其の句已に菟玖波の撰に入る、一條公の若きも亦其の名を聞きて來訪す、豈に盛んならずや。且つ夫れ平日出入必ず一二の老臣を従へ、事巨

細となく之を答ひ、諫に従ふと流るゝが如し、公の徳の若き人孰れか間然するものあらん。然りと雖も一旦隈部氏の亂を作すに方りて、老臣の言を用ひず、往きて之を援く、則ち菊池氏と都を構へて遂に入代を失ふに至る、其の遺策豈に惜しからずや。噫公にして此の過あり。俚諺に所謂空海も筆を認り、駿馬も亦蹶くもの、後の人君たるもの深く戒めざるべからざるなり。

一四 長每公

法益 靈心

長每公は、爲績公の第一子なり。文明元年人吉城に生る。初めの名は長輔、太郎と稱す。後更めて長每と名づけ、宮内少輔と稱す。

明應八年己未、爲績公、政を公に授く、公、嗣いで立つ。

九年庚申春二月十三日、足利義植内書を老公に賜ひ、大内義興と俱に收復を

圖るを請ふ。

菊池能運の臣忠直反す

文龜元年辛酉閏七月日、菊池能運の老臣隈部忠直反す。

能運、肥前守重安と肥後、筑後の兵を將き、能運大ひに敗績す。死者七百餘人、重安之に死す。能運舟に乘じ高來に奔りて有馬氏に依る。忠直、

伯耆彈正少弼爲光を立て、主と爲す。將士服せず、邦内釋驛す。初め爲績公

の八代を棄つるや、常に之を復するの志あり、未だ志を得ずして薨す、公、

深く之を憾みとす。能運の高來に奔るに及んで、公、奮然として曰く、是れ吾が

父の志を繼ぐの秋なりと。乃ち使を高來に遣して能運を存問し、贈るに衣

能運を存問す

八代を撃つて復す

物を以てす。是の如きもの數次、能運大ひに喜び、書を與へて之を謝し、且つ復歸を圖るを請ふ。夏五月、公、兵を分つて三と爲し、一は照角山よりし、一は五木谷よりし、一は葦北口よりし八代を撃つて六邑村・守山・二邑名間を取。伯耆忠豐、宇土にありて聲援を爲す。城輒く抜くべからず。兵を高田に退り、平山の故城を修め、守兵を置きて歸る。

今の太田郷 再び八代を撃つ

二年壬戌秋八月、公、再び八代を撃ち大田講、松尾に陣して城に迫る、城未だ抜くべからず、冬十月、兵を高田に退く。

三度八代を撃つ

三年癸亥秋八月、公、又八代を撃つ。萩原に陣して以て動靜を観る。冬十一月に至る。是の時、能運既に國に歸りて爲光父子及び忠直を誅して邦内稍々定まる。能運、公の方に八代を攻むるを聞き、親ら兵に將とし來りて守山に軍す

菊池阿蘇天草皆聲援す

聲言すらく相良氏を援け、以て前日の恩を報せんと。檄を天草に移して兵を招くに、八城の主深江・宮岡・大矢野・長島舟師を發して來援す。阿蘇の大宮司惟長も亦親ら兵に將として來り、小川驛に陣し、以て聲援を爲す。我が兵威大ひに張り、城兵益堅守す。公、使を遣して能運に謝し、且つ之に謂はしめて曰く、我

甘んば心安らかにして憂苦なきこと

は八代に於て宿怨あり、吾之を圖るや日久し。今守護の衆を仮りて孤城を拔くは武にあらざるなり。願くば吾能く我が一家の力を以て之を抜き、生きながら顯忠父子を獲て甘心せんと。既にして能運、使を城中に遣して、降るを諭さしむ。

又八代を領す

永正元年甲子春二月七日、顯忠城を輸して去る。公、城に入り併せて八代豊福を領すると故の如し。能運、宇土城主忠豊を逐ひ、城右京亮を置きて還る。公、將に隈府に如き、師を拜せんとす、能運の卒するに會ひて罷む。能運、子なし。遺言して肥後守重安の子政隆を立て、嗣と爲す。群臣服せず、別に阿蘇惟憲の子武經を請ふて嗣と爲す。是より政隆、武經兵を構へて邦内又亂る。右京亮宇土を棄て、去る、忠豊再び宇土に入る。是に於て豊福保ち易からず、公、又豊福を棄つ。

二年乙丑閏政隆、難を二見に避く。

三年戊辰秋七月、足利義植職に復し、大内義興を以て管領となす。公、大刀一口奉革一百張を幕府に獻じ、大刀一口革三十張を義興に贈りて以て之を賀す。

足利義植職に復す

六年己巳夏四月十四日、幕府内書 義植を賜ふて之を謝す。伊豫守貞陸 副書す。五月三日、義興大刀一口絁帛二端を贈りて之に耐ふ。是の歳、政隆、武經と戦ひ敗れて死す。武經、苛酷にして國人之を怨む、遂に兵を起して隈府を陥る。武經病死す。子惟前未奔して八代川田に匿る。居ると歳餘、公、之を復歸せしむ。

七年庚午夏四月三日、朝廷 後柏原上卿甘露寺中納言、辨官藤原 下に叙し、近江守に任す。義興、貞陸書を與へて之を賀す。公、使を京師に遣して命を拜す。大刀一口、重革一百張、羚羊皮五十張を幕府に獻す。秋九月六日幕府内書花押を賜ふて之を謝す。

八年辛未夏四月二十八日、八代の兵豊福を撃たんとす。耆老之を止む、少壯聽かず。輕しく進んで敵地に入る、宇土の兵來り拒ぎ、久久川を隔て、戦ふ。敵兵後先より來聚して更に戦ふ、我が兵繼がす、力戦して辰より午に至りて死者七十餘人、餘兵多く創を被りて士氣甚だ疲れ、且つ戦ひ且つ退く。敵後を

豊福の戦

途を兼ぬるは二倍行くにて急ぐことなり

躍みて關城の下に蹙り、我が兵益々窘む。公、之を聞きて單騎馳せ至り、聲を勵まして曰く、一步を退くものは之を斫らんと、眉尖刀を揮つて指揮す。我が兵力を得て反り戦ふ、敵兵辟易す。求麻、葦北の兵も亦途を兼て至り、兵勢復振ひ、敵懼れて退く。

九年 壬申に作る、今歴代参考の八代日記を用ふるに従ふ。公、政を嫡子長祇に授く。

惟前惟豊を堅志田に攻む

公を諷して政を嫡子に譲らしむ、蓋し日侯伊東祐隆の意に出づるなり。十年月日、菊池惟前、阿蘇惟豊を堅志田に攻む。惟前來奔して八代福善寺に匿る。居ると何ばくもなふして公、之を復歸せしむ。是の歳、八代の成願寺を創し、内田次郎作、高橋監物をして役を董せしむ。十一年、宮原公忠に命じて靈符を刻せしむ

八代成願寺を創す
董は背と同じ(かん
とくしたすこと)
顯忠守山を侵す

十三年九月、顯忠守山を侵す。公、岩を築きて之を拒ぐ。十月七日、公、豊福を撃つて宇士の兵數十人を斬る。十一月二十二日、再び豊福を撃つ。十二月十三日、又撃つて豊福を取る。是の時、探題豊後守大友義鎮、眞光寺の僧壽元を遣して公に説きて宇士と和せしむ。壽元、肥人鹿子木親員、熊本城主河守入田島重堅

豊福を撃つて取る

成はたいらぎ

伊勢守と俱に守山に來り、告ぐるに義鎮の意を以てす。公、之に従ひ、乃ち伯耆長照、長照洞然狀に據るに別に考ふる所なし。成を行ふ。十四年七月十一日、公、本藩に來りて髪を無量壽院に剃り、戒を僧行阿に受けて、自ら加清と號す。國歌を賦して曰く、

死出の山かねて行く日を定めねは

今日首途しつ身こそ安けれ

長每公薨す

十五年五月十一日、公、今出水の館に薨す、齡五十。高田龍成寺に葬る、法諡龍成寺大池蓮心。井福播磨殉す。播磨は原田の賤士なり。初め地頭豊永氏の民と畔を争ふに、吏地頭を畏れて播磨を曲とす、播磨之を朝に訴ふ。公、獄を爲すと公平、播磨竟に直を獲たり、乃ち深く之を徳とし、自ら矢つて曰く、死せば黄泉に従はんと、是に至りて殉死す。公、勇力絶倫、語音鐘の如し、聰敏にして學を好み、政は壹ら父訓に従ふ。隄防溝洫、自ら之を巡視し、至る所の父老に酒肉を賜ひ、鰥寡孤獨に衣食を賜ひ、緩急に使ふべきものには弓矢を賜ふ。故に群臣職を怠らず、庶民業を廢せず、統内誠に服す。

公の人物性行

法度式目を著し一向宗を禁す

人の罪を謝するものあれば則ち曰く、自ら過を知りて能く改む、善之より大なるはなし、又何ぞ謝するを用ひんと。嘗て學を論じて曰く、學は是非を辨するにあり、苟も是非を辨せずば、萬卷の書を読むと雖も、又何ぞ益せん。法度式目一卷一條を著はし、始めて一向宗を禁す。後世用ふる所の法度概ね公の代に出づと云ふ。公、日侯民部大輔伊東祐隆の女を娶りて夫人と爲し、一男を生む、是を長祇公と爲す。妾は豊永氏一男一女を生む。男は義滋公、女は天す長倉氏一男を生む、是を瑞堅和尚と爲す。二庶子皆長祇公より長す。天文五年九月十八日、夫人伊東氏薨す。祐玉寺に葬る、法證江天祐玉。出水・早田・川越・横田の四氏名聞ぐ伊東氏に従つて來り、遂に本藩に仕ふ。

瑞堅和尚

其の末路

瑞堅和尚は、公の庶子なり。母は長倉氏、明應元年人吉城に生る。年甫めて十一、薙髮して僧となり、觀音寺伯元和尚を師とし、後京師東福寺に學ぶ。永正中、西歸して觀音寺の住持となる。長定公の長祇公を逐ふに及んで大ひに怒りて兵を起し、長定公を逐ふて自ら立ち、還俗して名を長隆と更め、太郎と稱す。群臣服せず、去りて上村に往き、永里城に據る。義滋公、自ら兵に將と

史 論

して來り攻め、長隆脱走して金藏院に匿れ、自ら免れざるを知り、火を縱つて寺を焼き、屠腹して火に投じ死す。實に大永六年五月十六日なり。外史氏曰く、公、聰敏にして學を好み、父の志を繼ぐを以て終身己の任と爲す。故に其の德稱すべきもの少からず。其の智を論すれば則ち散地を棄てて要地を保つ。其の勇を論すれば則ち擊つて八代及び豊福を取る。其の仁を論すれば則ち政壹ら父訓に従ひ、自ら隄坊溝洫を巡り、訴を聽きて善く曲直を辨じ、施すことを好んで恩を餘寡孤獨に及ぶ。著す所の式目は法を子孫に垂る。而して其の爲す所一として繼述の事にあらざるはなし。嗚呼公の孝や至れりと謂ふべし。

一五 長祇公

法 詮 蓮 世

長祇公は、長每公の嫡子なり。母は伊東氏、文龜元年人吉城に生る。幼字滿乘丸初めの名は長聖、太郎と稱す。

永正九年壬申、長每公、政を公に授く。公、嗣いで立つ。時に年甫めて十二。

十三年丙子秋九月、名波顯忠、守山を侵す。公の弱なるを以て、老公親ら兵に將として之を拒ぐ、後屢宇土と兵を交へて遂に豊福を取る、事上文に具にす。

十五年戊寅夏五月十一日、長每公薨す。

大永三年癸未夏六月十二日、左兵衛佐菊池重治、又義武と更む。券書號を書せず、歴代参考に入代日記を引きて曰く、大永三年老臣相其駿河、其田信濃を遣して重治に使せしむ、則ち重治の肥後に來るは是の歳にあるなりと。政廳案するに是の歳、公改めて左兵衛尉と稱す、而して券書は猶ほ太郎と稱す。則ち券書を與ふるは是の後に、公に與へ、八代郡及び益城郡豊福十町故に襲らあらざるを知るべし、因て姑く此に係くを公に與へ、八代郡及び益城郡豊福十町故に襲らしむ。是より先、大友義鎮、討つて肥後を平ぐ。是に至りて叔父義國を以て菊

池氏の後を嗣がしめ、名を重治と改むと云ふ。是の歳、公、改めて左兵衛尉と稱し、名を長祇と更む。

長定反す

四年甲申秋八月二十四日の夜、長定反す。長定は寶山公の第一子頼金の子なり。頼金疾ありて立つを得ず、館を中尾山に築きて居る。長定を生む。長定稍々長じて意に謂ふ、父如し立つとを得ば、己れ當に嗣たるべしと。故を以て常に凱鏡を懐く。嘗て老臣犬童刑部左衛門長廣と陰に公を弑せんことを謀り、事泄る。公、密かに諸を村山治部左衛門に問ふ。治部對へて曰く、事狀なきにあらず、請ふ急ぎ之を糾さんと、公、猶豫して決せず、園田又四郎進んで曰く、長定縱ひ今變を謀らざるも、後に害を爲す者は必ず此の人ならん、臣請ふ往きて之を刺し、君の爲に害を除かんと。刀を提げて起つ。公、怒りて曰く、汝の言ふべき所にあらずと、直ちに之を逐ふて葦北の二見に竄す。公、乃ち長唯の宅に適き、與に計りて久保田右馬允を遣して長定を詰る。長定伴りて驚き知らざる爲し、上書して自辨す。公、書を得て頗る之を信じ、復問はず。是の夜、長定、長廣と兵を率ゐて城を襲ふ。城中大ひに駭きて相購藉し、死傷過半なり。

長定の驕城

倉黄は倉皇と同じ
(あはて、ふためく)

公、倉黄として城を出づ。僅かに親近數人を従へて出水に遯る。二十五日、長定城に入りて自ら立つ。長定、公の出水にあるを聞き、之を誘殺せんと欲し、使を遣し偽り謝して曰く、臣、賊臣に脅從せられて君をして外にあらしむ。臣の罪死を容れず、君今復歸せよ、而して臣幸ひに首領を全ふするを得ば、臣願くば君に従つて賊臣を誅し、以て他なきを明かにせん、請ふ君駕を回せ、臣、今人吉城を空ふして待つ、君若し之に居るを樂ますむば、請ふ駕を水俣城に移せど。公、乃ち之を聽す。

五年乙酉春正月六日、公、水俣城に入る。長定豫め津奈木一に綱木に作地頭犬童内藏丞匡政に命じ、公の城に入るを候ひ之を弑せしむ。又四郎之を風聞し公の城に入るに及び、馳せ來り見へんを乞ふて曰く、事急なり、幸ひに罪を赦されよ、臣請ふ面のあたり之を言さんと、公、出で之に面して曰く、前に汝が言を用ひずして難に及ぶ、悔ゆるも何ぞ及ばん、今汝吾を棄てず、吾甚だ之を嘉す、胡んぞ罪を謝するをなさん、汝速かに事を言へど。又四郎具さに狀を以て聞す。公、駭き怒りて曰く、我れ彼の術中に陥る。之を爲す如何

公自殺す

元は首なり

かせん。又四郎公に勸めて逃れしむ。公、又四郎と潜かに城を出で、山に匿る。八日、匡政來り攻む。公在らず、匡政窮搜す。公、免れざるを知りて自殺す。又四郎も随つて自殺す。匡政、公の元を獲て長定に獻す、長定、梅花筒口の法壽寺師堂是なりに葬る。法論大谷蓮世。

一六 長定公

法諡 蓮秀

長定公は、長祇公の第二子相摸守頼金の子なり。民部大輔と稱す。父の立つを得ざるを以て、故に常に憤色を懷き、私に老臣犬童刑部左衛門長廣に告ぐるに其の謀を以てす。長廣之に賛成す。既にして事泄る。

長祇公を逐ふて立つ

大永四年甲申秋八月二十四日の夜、公、長廣と兵を發して之を襲ひ長祇公を逐ふて自ら立つ。

長祇公を執す

五年乙酉春正月八日、公、犬童内藏丞匡政をして、長祇公を執せしむ。長祇公の庶兄長唯・瑞堅之を聞きて大ひに憤懣す。既にして群臣皆長唯に屬す。是に於て瑞堅、意欲らく、使を遣して公を諭し、城を長唯に致して去らしめ、公若し聽かずむば則ち兵を舉げて之を討たんと。

瑞堅僧兵を率ゐて城を陥る

六年丙戌夏五月十一日、瑞堅立興寺亮海に命じて公を諭さしむ。而して遍く所在の僧兵を招きしに、僧兵の來り聚るもの二百餘人なり、瑞堅の意中變し、翻然として亮海を呼び還して曰く、吾が意決せり、何ぞ論し降すを用ひん、吾

長定公試せらる

れ取りて代らんのみど。即ち火を寺中に縱ち、亮海及び觀林寺宜範と、資勝院、安養寺、定法院、地持院、香水院、清通院、賢順院、林覺寺等の僧兵二百餘人を従へ、直ちに人吉城を攻む。城兵支ふる能はず、公、長廣と夫人及び二公子都々松丸、都々滿丸を従へて八代に遷る。瑞堅入りて自ら立つ。是の夜、觀音寺の佛閣、僧舎焚蕩して遺す所なく、延焼して願成寺の金堂に及ぶと云ふ。公、八代に至るに兵士附かず。七年三月二十九日、八代を去りて葦北に之く。八月三日、津奈木城に入る。八代葦北の兵來り圍む。公、長子都々松丸と舟に乗じて筑後に逃る。蓮乗公立つて、而して屢々使を遣して復歸を請ふ。公、之を聽す。享祿四年十一月十一日、公、筑後より至りて梅花法壽寺に入りて、而して弑に遇ふ。大村の芋煮木に國讀相通す戒藏院に葬る、法諡西池蓮秀。夫人氏尋ぎて至り又弑に遇ふ。戒藏院に葬る、法諡法雲蓮海。

都都松丸

都都松丸は、公の第一子なり。公に従つて出亡す。公の復歸するや、留りて筑後にあり、盜の殺す所と爲る、法諡朝雲幻性。

都都滿丸

都都滿丸は、公の第二子なり、公に従つて出亡す。公の復歸するや、母に従

つて法壽寺に入り、俱に殺さる、法諡花典。

外史氏曰く、嗚呼後世公を議するもの多し。皆以て謂へらく、公、大惡を負ふ、正統に列すべからざるなり。余外史を修するに至りて一に舊史に従つて敢て改めず。議する者或は余を譏りて曰く、舊史の公を貶せざる猶は容すべきなり。子は春秋を知る者、而して公を正統に列するは是れ纂を獎むるなり、大ひに春秋の旨を失ふ。余之に應じて曰く、是れ春秋の志のみ、魯の桓公・隱公を弑して自ら立ち、宣公・子赤を弑して自ら立つ。聖人の春秋を作るに二公に於て皆其の君たるを絶たず、余の公を絶たざる所以のものは、春秋の法を用ふるなり、豈に以て纂を獎むと謂ふ可けんや。聖人の言を立つるや信、然して後善惡明かなり。夫れ言の信ならんと欲するには、其の實を没せざるにあり。其の實君ならば、其の君たるを書し、其の實纂ならば、其の纂たるを書し各々其實を傳へて、而して後世をして之を信せしむ、則ち褒善貶惡の旨自ら判然す。且つ夫れ桓・宣惡なりと雖も魯の君なり、孔子聖なりと雖も魯の臣なり、臣豈に輕しく其の君を貶すべけんや。人能く春秋の此の意を知りて然る後、余の

公を貶せざるの旨を知るべきなり。

一七 義滋公

法隆 遺業

義滋公は、長毎公の庶長子なり。母は豊永氏、延徳元年閏八月人吉城に生る、小字六郎丸、初めの名は長爲、左兵衛尉と稱し、後名を長唯と更め、近江守と稱す。大永四年、長定公、長祇公を逐ひ自ら立つ。群臣服せずして望みを公に屬す。

六年丙戌夏五月十一日、瑞堅、長定公を逐ひ自ら立つて頗る得色あり。群臣之を憎みて背て朝せず、滿朝皆緇衣なり。一二親近の僧瑞堅に説きて曰く、君今義兵を起し、一舉にして志を得しは、君の武多きによる、然りと雖も群臣既に長唯に屬して君に屬せず、君久しく城に在らば、則ち恐らくは自ら禍ひを招かん、若かず速かに城を棄て去らんには。瑞堅之に従ふ。城にあると僅に三日にして去つて上村に往き、落合加賀守に依りて永里城に據る。群臣公に勸めて之を討つ。公、上村城主上村上總介頼興を越がして先鋒たらしめんと欲す。聽かず。公、其の子藤五郎頼重を養ふて以て嗣と爲さんことを約す。

史 論

瑞堅の在朝僅かに三日 瑞堅上村永里城に據る

瑞堅を討つ

瑞堅に攻めて亡ぼす

乃ち之を聽く。外舅原田の地頭豊永某、新宮城主佐牟田上野兵を率ゐて來り會す。十五日、公、親ら兵に將として往きて永里祇園口に軍す。頼興兵を率ゐて麓諏訪山に軍す。一軍は權現山に軍す。十六日、合擊して永里城を拔く。瑞堅走りて金藏院に匿る。進んで之を圍む。瑞堅火を放つて寺を焼き、屠腹して火に投ず。公、厚く頼興を犒ひ、偕に盟つて歸る。十八日、公、城に入りて立つ。群臣皆賀す。秋七月十三日、眞幸の人北原某、我が内亂を覘ひ、兵を率ゐて人吉城を圍む。一軍は梅花の森に陣す。一軍は大岩瀬を涉りて中河原に陣す。一軍は宗慶寺地藏山に陣す。上村の兵來り援け、糧を城に納る、敵兵之を奪はんとす。上村の兵之を拒ぐ。城兵突出して大ひに中河原に圍ひ、敵兵敗走す。山口段四郎・外山市兵衛・中山小平次・守口兄弟・鶴田・高橋・犬童・有瀬 以上六人 老神の祠 深瀬伊賀介・弟 治部左衛門之に死す。伊賀介兄弟闘ひ最も力む。公、皆越の地頭皆越安藝守貞當を招かんと欲するも、路梗り使すべきものなし。祐玉寺の僧樹薫自ら使せんことを請ふ。公、乃ち之に命す、樹薫書を油紙に包み、水に没して河を下り、矢黒の崖に登りて間道より皆越に抵り書を貞當に致す

眞幸北原と中河原に戦ふ 其の戦死者

樹薫の使

貞當の戦略
今の上村柳別府神殿
原ならん

貞當書を拜して之を領く。夜兵を率ゐて出づ。屯火を高土原に置き、沿途往々之を置く。陽て屯兵と爲し、兵士百餘名、各々手に炬を持つて城に登る。大呼して曰く、伊東氏の援兵至る。是に於て敵營の火稍々滅去す。明る比營中に人無し、追ふて之を赤池、十島、花立等の所に撃ち、多く首級を獲たり。公、貞當の功を賞し、上村今井の田町を賜ひ、樹叢をして髪を蓄へ、久保田志摩守と稱せしめ、刀及び田町を賜ふ、時に年十八。

七年丁亥夏四月三日、上村兵庫允長種をして八代城を守らしむ。長種は上総介頼興の弟なり。二十四日、相良刑部大輔豊福城を棄つ。宇土城主肥前守伯耆武顯の臣、皆吉伊豆守來りて之に居る。

賊は薩摩侯作る所云ひ肥後薩摩のみに通用する人名字云ふ
白木社の流鏑馬
湯浦に重良を討つ
庭拍寺を創す

二年己丑冬十一月十五日、桑原次郎太郎・松王丸・岡村藤八・松乘丸・村山虎松丸・内田彌太郎・高橋與一郎・彌次郎丸・深水水松丸・養田源次郎・小田與四郎をして流鏑馬を八代の白木社に行はしむ。十九日、長種をして犬童又三郎重良を湯浦城に討たしむ。重良父子城を棄て、津奈木に逃る。是の歳、庭拍寺を創す。

津奈木を討つ
臣政長廣重安重良の族悉く誅せらる

隠類なしは生きのこるもの一人もなし
犬童休矣

三年庚寅春正月二十六日、津奈木を討つ。重良父子又逃る。二十七日、内藏丞匡政及び其の子左近を捕へて之を八代中島に懸し、其の三族を夷ぐ。三月日開左衛門長廣を八代に捕へて之を人吉中河原に誅し、悉く其の族を戮す。木枝の城代犬童美作守重安に死を賜ふ。重良父子亦選へられて誅に伏す。是に於て犬童氏の族幾んど隠類なし。獨り重安の子熊徳丸年甫めて十一、上村西龍寺の僧某、庇護する所となりて免るゝを得たり、後の美作守頼安入道休矣といふ者は、是なり。是の歳、公、頼興の子頼重を子養して約の如くす。立て、世子と爲し、名を長爲と更む。

四年辛卯冬十一月十一日、賊長定筑後より至る。西淡路之を法壽寺に殺す。長定の妻及び都都丸尋ぎて至る、併せて之を殺す。都都丸は留りて筑後にありしも、又盜の殺す所となる。

天文元年壬辰夏六月十三日、天草尙種・長島但馬守・志岐・栖本・大矢野名聞と兵を合せて上津浦治種を撃つ。十六日、公、八代の兵を遣して之を救はしむ。秋七月朔、我が兵敵兵と戦ふて之に克つ。相良六郎左衛門尉之に死す。二

上津浦治種を撃つ

師を拜するは勢ぞろひしたるに敬意を表するの禮にして今の盟兵式の如きか
阿蘇惟前に婚を許す

八代鷹峰に城く

許候來買す

十五日、公、佐敷に適く。長種來り見ゆ。八月四日、上津浦治種佐敷に來りて師を拜す。冬十一月、遊行上人二十六世八代に來り、長種之に供給す。

二年癸巳春二月二十日、堅志田の城主大膳大夫阿蘇惟前西但馬守をして來りて婚を請はしむ。公、之を許す。夏四月十五日、公の長女惟前に嫁す。秋九月二日、長種、館を八代中島に築く。冬十月十六日、公、世子長爲と八代に至りて屢々長種の中島の館に遊び、俱に聯詞を賦して之を樂しむ。十二月二日、公、世子と八代より至る。

三年甲午春閏正月十六日、新に城を八代鷹峰に築く。三月十日、成りて公之に移居す。夏六月十日、惟前來りて新成を賀す。三永民部少輔・村山參河守・西但馬守等之に従ふ。公、上村出雲・竹下外記・山崎内藏助に命じて之に接せしむ。朽網の城主未だ考へず岡村新左衛門・入田の城主未だ考へず關右馬頭・堅田の城主豊后、姓名未だ考へず竹崎將監をして來りて新成を賀せしむ。其の他津津良に、玉名郡東郷白間庄に居る高津津良と親類相同じ飯島未だ考へず等の城主使を遣して來り賀せしむ。公、今勢織部・桑原次郎左衛門・藤九郎・西兵部大輔・村山玄蕃・平川中務を各所に村

豊福を守る

雙田長種謂せられて頼興に殺さる

美成ははるま調せん

菊池義宗來り會す

分遣して之に報ひしむ。秋七月六日、公、長種と堅志田に如く。九日、堅志田より至る。

四年乙未春三月十六日、阿蘇の兵宇土の兵と豊福の大野に戦ひ、宇土の兵敗走す。皆吉伊豆守豊福を棄て、走る。我が兵入りて之を守る。公、園田美作を遣はして宇土を信はしむ。南條左衛門來り報ふ。夏四月八日、雙田平馬允長親、兵庫允長種を殺す。長種人となり英毅にして武略あり、兼て聯詞を善くし、大ひに士心を得たり、或は之を忌むものあり、嘗て諸を頼興に譖するに異志あるを以てす。頼興之を信じ謂へらく吾れ在るも猶然り、吾れ死せば必ず世子を害せん、早く之を圖るに如かずと。乃ち相良彈正忠長兄、丸目兵庫頭頼美、東參河守直政と謀りて長親をして之を殺さしむ。長親陽て公の命を以て長種を城に召し、刺して之を殺す。二十日、頼興八代に至り中島の館に次す。五月十八日、頼興長親を宇土に遣して世子の爲に婚を求めしむ。伯耆武顯之を許す。皆吉伊豆守來り報す。冬十二月十三日、菊池義宗、何の據る所あるか知らず高來來に奔る、而して今考ふる所なしより舟に乗じて八代に抵る。公、莺田信濃をし

義武來る

て之きて德淵に迎へしむ。地福寺に宿る。十九日、莊嚴寺に移る。二十日、公、義宗と莊嚴寺に會す。二十九日、義宗來りて公に鷹峯城に會す。

五年丙申春二月、義宗高來に還り、名を義武と更む。夏六月十五日、義武八代陣内に來る。十六日、漁を觀る。秋八月二十七日、歴代私鑑には天文六年に作る、今八代日記に従ふ公、武顯を松橋に會す。九月十八日、太夫人伊東氏薨す。實に公の嫡母なり。冬十二月二十二日、世子夫人伯耆氏來りて我に嫁す。皆吉主殿助・森掃部・千田左近從ふ。是の歲朝廷眞帝兵部大輔大内義隆を以て太宰大貳となし、山陽鎮西の事を領せしむ。

茗燕は茶の會なり
散樂は雜樂に同じへ
おどけたることな
す舞樂

島津貴久來る

六年丁酉春二月朔、世子高來に往きて義武を見る、義武八代に來りて之を謝す。龍寶寺に宿る。十八日、正法寺に移る。二十日、茗燕を設く。二十一日、宗像右衛門大夫に命じて散樂を設けしむ。二十五日、義武還る。冬十二月十四日、世子名を爲清と更む。

七年戊戌夏四月十三日、薩侯薩摩守嶋津貴久來りて、公及び世子に佐敷に會す。公、厚く之を饗す。十四日、薩侯歸る。秋八月二十四日、義武嫡子鬼菊丸を從へて來り、元服を八代白木社に加ふ。駿河守と稱し、名を則治と更む。歴代私鑑に曰く、後備前守と稱し、名を高つ。何の據る所あるを知らず遂に公に鷹峯城に會す。二十五日、聯詞を賦す。二十六日、散樂を觀る。二十七日、養田信濃の宅に過ぎる。二十九日、義武父子還る。

八年己亥春二月八日、則治來りて公に八代に會す。十日、散樂を觀る。三月九日、公、平山の館に遊ぶ。十四日、義武來りて公に信濃の宅に會す。晦、是より先、公、命じて新に渡唐船を造りて成り、市木丸と名づく。是の日、公之を德淵に觀る。

惟前來る

九年庚子春、郡民大ひに疫癘を患ふ。公、自ら鬼神に禱るに、疫癘随つて止む。郡民大ひに喜ぶ。夏五月二十一日、阿蘇惟前來りて公に八代鎮に會す。

秋八月十一日、肥前侯龍造寺隆秀來りて日奈久温泉に浴す。二十七日、肥前侯歸る。九月二十日、義武來りて世子に本藩に會す。晦、義武還る。冬十月朔、義武八代に至る。十二月十三日、八代の兵艦地に軍し、葦北の兵堅志田を守る。

今の上益城郡低用か

援兵の首途榎枝槍に懸る

菱刈左兵衛來る
徳川家康生る

高山の戦

阿久根彈正來る
岡の地頭治頼反す

十年辛丑閏ぐ公、宇土の亂を聞き、赴き援けんとし、井口八幡社に首途す。榎樹の枝堅ちて十字の槍に懸る。公、悦ばざるの色あり、梁瀬某ぐ進んで曰く敵槍に懸かるは吉兆なり。榎は俗に之を樅と云ふ。敵と國語同一なり。公、色霽る。往きて宇土を援く、師果して利あり。

十一年壬寅夏六月十五日、世子夫人伯耆氏宇土に大歸す。秋七月、菱刈城主菱刈左兵衛佐來りて公に水俣に會す。是の歲、東照公生る。

十二年癸卯春正月二十六日、宇土の兵小川を侵す。公、親ら三郡の兵に將とし往きて高山に戦ふ、宇土の兵敗走す。秋九月二十一日、上津浦孫次郎來り公に請ふて右衛門大夫と稱す。

十三年甲辰閏ぐ榎本某ぐ來りて公及び世子に湯浦に會し、兵部大輔と稱するを請ふ。

十四年乙巳春二月二十二日、出水の城主阿久根彈正來りて公に八代陣内に會す。夏六月十五日、八代岡の地頭治部少輔治頼反す。治頼は左近將監頼泰の子、刑部大輔長弘の子なり。初め頼泰の誅に伏するや、長弘幼を以て免かれ、

而して治頼を生む。治頼武技を善くし、好んで幻術を行ふて頗る士心を得たり、犬童軍七・宮原玄蕃最も親信せらる。本藩の重臣も亦心を治頼に歸し、密かに不軌を圖るを勸む。事泄る。治頼將に自盡せんとす。軍七・玄蕃之を止めて曰く、徒らに死するも益なし、死は等しく死のみ、去りて人吉に如き、重臣と大事を圖り、事成らずして後死するも未だ晩からざるなりと。治頼之に従ふ。是の夜逃れて本藩に至る。途に井手集人・林田忠次郎に値ふ。治頼二人を捕へて之を詰るに、忠次郎偽りて曰く、君と謀を通ずるの重臣、事覺はれて皆自殺す君の人吉に至るは、計にあらざるなりと。治頼且つ信じ、且つ疑ひて之を詰ると益々急なり。忠次郎語塞がる。治頼手づから之を刃し、去りて眞幸に逃る。公稻留刑部・丸目民部・桑原九郎五郎・上村又九郎を遣して治頼を本藩に討たしむ。至る比、治頼既に逃がる。秋七月朔、三船寶藏寺の僧某ぐ林紀伊介・田代左馬助來りて八代に聘す。十三日、治頼、多良木に來りて將に鍋城に據らんとす。時に税所源兵衛城を守る。陽て善く治頼を待ち、陰に之を公に報ず、且つ治頼に謂つて曰く、城壘堅からず、請ふ地頭岩崎加賀の宅に入れと。加賀亦深水

治頼眞幸に逃る

治頼多良木に來る

耳取原の戦

勅使至る

備註はかた名なり名の一字を興ふるなり

出羽と謀りて出で、之を己の宅に迎へ、陽て之を衛護し、陰に宵遁る。治頼の従兵塵に四十餘人、公、人吉の兵をして之を討たしむ。治頼出で、耳取原に戦ひて敗走し、日向に逃る。去りて豊後に如く。居ると一年、病みて卒す。軍七・玄蕃髪を剃りて僧と爲る。軍七名を傳心と更め、玄蕃名を祖心と更め、二人四方に行脚す。冬十一月二十七日、是より先、朝廷勅使を下し、勅使大外記大宮伊治西下し、大内義隆・弘田彈正忠をして郷導たらしむ。是の日、天使の舟徳淵に達す、二十八日、東泉寺に館す。二十九日、公、天使に東泉寺に謁し、之を陣内に饗す。十二月二日、公及び世子口宣を鷹峯城に拜す。公、從五位下に叙し、宮内少輔に任せられ、世子、從五位下に叙し、右兵衛佐に任せらる。幕府兼利・偏諱を賜ひ、公の名を義滋と更め、世子の名を晴廣と更む。厚く天使を禮す。三日、公及び世子東泉寺に往きて之を謝す。五日、天使を莊嚴寺に饗す。六日、公、始めて官衣を服して白木社に謁す。九日、天使を陣内に饗す。十二日、天使發せんとして雨りて果さず。十四日、徳淵を發す、公及び世子親ら之を送る。

式目二十一條を下す

世子たち諸侯來賀す

公の遺言及び遺歌

十五年丙午夏五月朔、山崎下總、犬童治部少輔をして、式目二十一條を三郡に下さしめ、二十一日より二十八日に至るまで、酒を群臣に陣内に賜ふ、凡そ八百人と云ふ。六月十二日、肥前守伯耆武顯卒す。増福寺の僧某、及び義田平馬允をして之を吊せしむ。秋八月朔、世子八代に至る。三日、公、政を世子晴廣に授く。六日、高來侯有馬某、重恩寺の僧某、をして來り賀せしむ。八日、日侯上總介伊東某、親ら本藩に來りて之を賀す。九日、飯島の城主某、二階堂頼母介をして來り賀せしむ。十一日、矢部の城主某、考へず、津奈禮丹後守をして來り賀せしむ。十五日、上津浦右衛門大夫・平江勘解由左衛門・大矢野某、吉野與一郎をして來り賀せしむ。是の日、公、病に罹り、書を晴廣公に遺す。其の略に曰く、去年帝勅使を下し、將軍偏諱を賜ふ、我が家西遷以來の榮なり、冀くは以て我が家永久の典と爲し、子々孫々慎んで守らざるべからずと、國歌を附けて曰く、

雲井より名を吹き降す月なれば
世々につたへむ我が家つ風

義滋公薨す

公の功績

萬次郎丸

史論

狩伐さばはこりほこるこまなり

二十五日、鷹峯城に薨す、齡五十八。八代運乘院に葬る、法諡運乘院了徳永幸。夫人は豊永氏一男四女を生む。男は萬次郎丸、長女は大膳大夫阿蘇惟前に嫁す、次女千代鶴は、菱刈左兵衛佐重任に嫁す、三女は東郷相摸守の城主に嫁す、四女千代菊は、實に柳江公の夫人なり。公、賊を誅し、亂を平げ、政内に治まり名外に聞ゆ。朝廷天使を下して父子を叙任し、幕府偏諱を賜ふ。時論之を榮とす。

萬次郎丸は、公の第一子なり、夭す。

外史氏曰く、長頼公封を移してより以來三百三十年、公の世に至りて天使始めて來り莅み、幕府始めて偏諱を賜ふ、公の榮や大なり。然り而して公少しも矜伐の意あらず、唯子孫をして永く之を墜さざらしめんと欲すると、公の遺書及び國歌を觀て見るべし。公の意蓋し謂ふ、予が今日の榮を得る豈に偶然ならんや、固より之を致す所以の徳あり、子孫苟も其の徳を修せずして徒らに此の榮を得んと欲するも則ち得べき所にあらざるなりと。公の之を憂ふるや深し。故に子孫を厲ますの意太だ懇到なり。且つ夫れ名と位とは抑も未なり。後の慎しみ守らんと欲するもの着眼を其の本に在らざるべからざるなり。

一八 晴廣公

法諡 蕙慶

晴廣公は、上村上總介頼興の第一子なり。母は上村修理亮長國の女、永正十年月日上村城に生る。幼字藤五郎、初めの名は頼重。享祿三年義滋公の子養する所となり、立つて世子となり、名を長爲と更む、時に年十八。天文五年十一月二十二日、是より先、公、税所新兵衛尉良繼をして家の事蹟を外祖父洞然入道洞然居士に問はしむ。洞然頗る史傳を知る。是の日、書を作りて以て之に答ふ。今の洞然狀是なり。十二月二十二日、夫人伯耆氏來り嫁す。六年正月晦、公、八代に至る。二月朔、高來に往きて菊池義武を見る、義武八代に來りて之に報ふ。十月十四日、公、名を爲清と更む。七年四月十三日、義滋公に従ひ、薩侯島津貴久に佐敷に會す。九年九月二十日、義武來りて公に本藩に會す。十一年六月十五日、伯耆氏宇土に大歸す。十二年十一月二十六日、公の生母卒す。法諡玉室清金、十三年二月八日、世子萬滿丸生る。十四年十二月二日、朝廷勅使を下し、公を從五位下に叙し、右兵衛佐に任す。幕府偏諱を賜ふて名を晴廣と更む。

公嗣立し諸侯來賀す

洞然居士卒す

天草尙種來る

十五年丙午秋八月三日、義滋公、政を公に授く。公嗣いで立つ。八日、日侯伊東某親ら來りて之を賀す。公、厚く之を饗す。其の他四隣の侯伯使を遣して之を賀す。二十四日、義滋公、薨す。栖本兵部大輔來り喪を吊す。大内義隆、安國寺西堂を以て來り弔せしむ。冬十月二十日、修理亮長國入道洞然卒す。年七十八。法諡洞然宗廓。

十六年丁未夏五月、日開尙種來りて公に佐敷に會す。尙種、臉甲及び腿甲を贈る。公、報ふるに身甲を以てす。是の日、大内義隆刀を贈る。

彼は罪人の罪をゆるすこと

十七年戊申春三月、天草尙種、公を招く。二十二日、公、佐敷を發す。二十四日、公、尙種に獅子島に會す。尙種、厚く之を饗す。栖本兵部大輔・大矢野某相繼ぎて公に謁し、供給亦渥し。秋八月二十四日、義滋公の大祥忌に當り、三郡に赦す。冬十一月三日、大矢野某八代に來る、公、之を陣内に享す。十九日、長島但馬守八代に來る。

十八年己酉閏七月、日開尙種、公を招く。二十二日、公、佐敷を發す。二十四日、公、尙種に獅子島に會す。尙種、厚く之を饗す。栖本兵部大輔・大矢野某相繼ぎて公に謁し、供給亦渥し。秋八月二十四日、義滋公の大祥忌に當り、三郡に赦す。冬十一月三日、大矢野某八代に來る、公、之を陣内に享す。十九日、長島但馬守八代に來る。

遊行上人來る
公と遊行上人の聯詞

九月、日開尙種、公を招く。二十二日、公、佐敷を發す。二十四日、公、尙種に獅子島に會す。尙種、厚く之を饗す。栖本兵部大輔・大矢野某相繼ぎて公に謁し、供給亦渥し。秋八月二十四日、義滋公の大祥忌に當り、三郡に赦す。冬十一月三日、大矢野某八代に來る、公、之を陣内に享す。十九日、長島但馬守八代に來る。

公、脇句を賦して曰く
霜をよその松や言の葉家の風

月より馴る、庭の寒けさ

珍阿、蓋し上人の從前なり第三句を賦して曰く

朝日さす岩根の水に鳥は寝て

二十五日、莊嚴寺に賦す。公の發句に曰く、

時雨すば左やは一木の笠宿り

上人の脇句に曰く、

菊に移らふ冬の山路

宗忠は宗忠の何人たる第三句に曰く、

氷るやと岩根の水の底澄みて

十一月十九日、上人舟に乗じて高來の諫早に至る。是の歳より公、歳を青井社に

時雨さらばいかでか
木の下のあまやでか
りすべきと少しの縁
によりて公と會見の縁
たるを發句の法によ
り時雨にこそよせて
よるこびなのべたる
なり

青井社藝談

さだめて

守る。著して永式と爲す。

十九年庚戌春三月十二日、公、平川藤七郎を高來に遣し、義武を存問せしむ。十四日、義武復歸して熊本城に入る。十九日、公、澄川彈正忠をして之を賀せしむ。二十三日、八代の老臣相良織部助・養田平馬允・山崎下總守・阿蘇の老臣西某・村山某を圍ぐ。甲斐親直に豊田宮山に會す。夏六月、皆吉左京進武真兵を起して宇土城を攻む。伯耆行興之を拒く。克たず。城を棄て、走る。武真城に入る。二十三日、公、自ら兵に將とし出で、高津賀に軍す。武真、懼れて宇土を去りて豊福城に入る。行興、宇土に歸る。二十五日、武真、又豊福を去りて八代に来る。公、豊福を取り、兵を遣して之を守らしむ。秋七月十一日、是より先、大友義鎮兵を遣して義武を討つ。是の日、豊人、肥人と大ひに合志郡に戦ひ、豊將朽網・志賀・一萬田名聞ぐ之に死す。二十日、公、老臣織部助を遣して、薩の老臣東郷相摸守に使せしむ。相摸守使僧を遣して、豊肥を和せしむ。冬十一月朔、幸千代を幸千代の何人たるを詳かにせず八代に来る。公、之を陣内に享く。是の月、大友義鎮偏諱を幸千代に授け、名を鎮廣と更め、五郎太郎と稱す。

豊福を取る

豊人肥人と合志郡に戦ふ

頼興頼春を殺す

二十一年壬子秋八月十四日、上總介頼興、岡本の地頭相良相摸守頼春を殺し第四子稻留五郎次郎頼定名を長藏と更むを以て之に代ふ。頼春は洞然居士の子なり岡本城に居る。初め頼興、頼春を殺さんと欲す。子頼定を以て岡本の地頭と爲し事を議するに託して頼春を召す。頼春往かんと欲す。其の臣上田木工之丞之を止めて曰く、今頼興の意測られず、且つ今日は返報の日なり、請ふ君往く勿れど。頼春曰く、彼召す、而して我往かざれば曲我にあり、且つ天道は還を好む、彼若し我を害せば、彼の家必ず亡びん、吾返報の日を以て幸と爲すと、遂に往く。乃ち峯山讀岐・桑幡六郎左衛門の殺す所と爲る。冬十月、世子萬滿丸八代に至る。十八日、白木社祭に與る。十一月、樺本兵部大輔・上津浦右衛門大夫八代に来る。東郷相摸守英彦山前に登る、便ち途に公に八代に謁し、留歡數日、爲に散樂を説く。去年、歳登らず、是の歳米一包斗直六貫錢、大麥一器升直二百錢なり。

二十三年甲寅、作る。今歴代参考に従ふ。春正月、菊池義武私かに大舉して大友義鎮を撃たんと謀る。事覺はる。二月、義武薩に奔る。薩人納れず。三月、義武妻

菊池義武大友義鎮を撃たんとす

米一包六貫錢麥一升二百錢

子を擧げて本藩に來り、永國寺に依る。剃髮して笑屋道闍と號す。公、善く之を遇し、新に館を大村天神の森に築きて居らしむ。今俗に其の地を謂ふ。夏四月朔、人吉城災す。世子萬滿丸火を東彈正忠の宅に避く。是の月、義鎮眞光寺の僧壽元田吹上總介歴代私歴に斐部山城に作をして來り義武を請はしむ、公、與へず。五月二十八日、義鎮妙嚴寺の僧某名聞しほて、搦手越中をして幣を厚ふし來りて再び請はしむ。公、又與へず、秋七月、長嶋鎮眞鎮眞の何人たるかを詳かざるを棄て、出水に逃る。公、山野市允・小田兵左衛門をして長島を守らしむ。冬十一月、義鎮三使姓名を遣はして河尻を義武に與へ、以て固く請ふ。義武も亦自ら往くを請ふ。公、之を許す。戸次某、朽網某二人名きた來り迎ふ。是に於て義武妻及び次子十郎則直、女辰若を公に屬し、長子則治と豊後に如く。十五日、公、之と八代成願寺に別る。二十日、義武豊後木原に至り、盜の殺す所となる。蓋し義鎮の使むる所なり。十二月五日、義鎮使を遣して義武の死を計ぐ。

弘治元年乙卯春二月七日、公、式目式目は天文二十四年を用ふ二十條を三郡に下し一向宗を嚴禁す、著めて永制と爲す。夏四月、義鎮、慶徳坊聚榮をして幣を

義武遂に義鎮に謀り殺さる

式目二十條を三郡に下す一向宗を嚴禁す

晴廣公薨す

諸侯來吊す

薩兵大畑を侵す

十六歳の與兵衛首斬りの逸話

陰謀

厚ふし來りて善く義武を遇するの恩を謝せしめ、贈遺老臣に及ぶ。秋八月十二日、公、鷹峯城に薨す、齡四十三。十六日八代林泉院に葬る、法諡林泉院兆山蓮慶。大矢野某及び河尻大慈寺の和尚名聞きた來りて葬に會し、栝本兵部大輔・天草向種・上津浦右衛門大夫使僧を遣して葬に會せしむ。公の末年、薩兵大畑を侵す。公、兵を遣して之を防ぐ。薩兵敗走し、我が兵之を笠置山に追擊して多く首級を獲たり。北崎與兵衛年甫めて十六、進み戰ふて首を取らんと欲して得べからず。道傍に屍あり、其の陰囊の大なる人頭の如し、與兵衛截りて之を裏み、陽りて首を獲たりとなす。途に横嶺某名聞きた首を裏みて歸るに及び、之に謂つて曰く、首を提ぐる甚だ重し、請ふ兩首を併せて更に之を擔はんぞ、横嶺之を許す。城門に詣る比、與兵衛陰に其の首を換ゆ、横嶺覺らず。與兵衛先づ入りて首を公に獻するや、公、之を檢じて其の功を賞す。横嶺相次ぎ入りて獻すれば、則ち顛狀の醜物なり、横嶺大に駭きて曰く、中途にして化すかど。左右皆失笑す。公、與兵衛の爲す所なることを知ると雖も、心に其の才を奇とし置きて問はず。與兵衛長ずるに及んで果して勇略あり。公及び義陽公に従つ

與兵衛八代に憤死す

相良を東西に分つ

頼貞及び其の末路

て屢々戦功を立つ。柳江公、戦に薨じて後、留りて八代に居る。天正中豊臣
 關白、島津氏を討ち、八代に至るの京兵城下を劫掠す。人皆關白の威を畏れ
 て敢て之を拒むものなし。與兵衛其の憤りに勝へずして曰く、吾の居處は吾が君
 の賜ふ所、肯て彼の兵の踏踐する所とならず、吾又何ぞ關白を懼れんと。眉
 尖刀を執りて京兵八九人を斬り、火を繼つて家を焼き、腹を屠りて焚死す。公、
 上田織部允の女を納れて一男を生む。是を柳江公となす。妾恒松氏一男一女を
 生む。男は大膳助頼貞、女は龜徳、上村新左衛門長陸に嫁す、元和三年十月、
 卒す。永國寺に葬る、法諡西津良意。公の世に至りて相良氏を稱するもの甚
 だ多し。公、命じて東・西を以て之を分つ。

大膳助頼貞は、公の第二子なり。幼字は徳千代。弘治二年、年十三、剃髮して僧
 となり、名を齋雲祖榮と更め、庭柏寺の住持となる。後自ら還俗して今の名に
 更め、八代に居る。後去りて薩に之き、栗野に僑居す。響野原の敗を聞き、間に
 乗じて來り本藩を襲はんとす。島津義久の命を以て兵を卻く。事下文に具にす
 後又去りて日向に之き、伊東氏に寓す。何も亡くして卒す。法諡天利一運。

史 論

一向宗を論ず

外史氏曰く、逸史氏嘗て一向宗を論じて曰く、一向の教其の説たるや、膚淺鄙
 俚にして道ふに足るものなし、而して人心を蠱惑すると他に比して尤も甚だし
 となす、蓋し其の單に成佛報恩の説を立てるを以てなり。此の論良に然り、故
 に其の害たるも亦小々ならざるなり。天文の初め蓮如兵を著へ客を招きてより
 以來、四方の巨利各々倣ふて黨を樹て、自ら一揆を號す。一揆の害卒かに諸
 道に偏ねし。歐陽氏曰く、八尺の夫にして勇は三軍を蓋ふ、而も佛を見れば則ち
 拜すと。當時猶然り、況んや今本邦争亂の久しき而して王道の明かならざるを
 や、人孰れか能く剛腸にして邪説の誑惑する所と爲らざらん。故に徳川氏の
 向宗に於ける深く往日の變に懲り、又其の終に除くべからざるの勢あるを知
 り、而して善く之を待ち、以て己の援と爲す。是れ寛を以て之を御するなり。
 島津氏の一向宗に於けるや、其の僧の賣る所となるを切齒して、其の渠魁を庇
 殺し、其餘黨を彈遂し、而して其の宗を嚴禁す、是れ猛を以て之を制するなり
 是れ皆其の害に遇ふて、而して後之に處するものなり。長每公及び公の一向宗に
 於けるは、身未だ其の害に遇はずと雖も、而も明已に先見する所あり、寛な

らず、猛ならず、以て災を未然に防ぐ。易に云ふ、患を思ふて豫じめ之を防ぐと、二公の謂歟。

註。外史氏の一向宗に對する論必ずしも當を得ず、譯者固より本書批評の位置に立たざるを以て、今之を是非するにあらずと雖も、徳川氏及び島津氏の一向宗を待つの原因聊か誤解あるが如し、敢て後の識者の再考を俟つ。

法 証
柳 江

一九 義陽公

義陽公は、晴廣公の第一子なり。母は上田氏、天文十三年二月八日、木枝上田村の館に生る。幼字は萬滿丸。十八年、立つて世子と爲る。

弘治元年乙卯秋八月十二日、晴廣公薨す。公、代りて立つ、年甫めて十二。

上總介頼興、政を輔く。既にして頼興移りて八代陣内に居る。九月十日、豊後侯大友義鎮、大智寺不二坊をして喪を吊せしむ。十二日、高來侯有馬某を

寶福寺の僧某をして喪を吊せしむ。二十六日、天草尙種使を遣して長島を

復し、且つ弟某をして相良氏、若くは長嶋氏と稱せしめんことを請ふ。公

許さずして曰く、吾裁を探題豊後侯に取らんとすと。冬十月晦、是より先、陶

晴賢其の主大内義隆を弑す。義隆終りに臨んで書を藪侯大膳大夫毛利元就に遺り

て仇を復せんことを請ふ。是の日、元就、晴賢を嚴島島に撃ち、破つて之を斬る。

二年丙辰春正月十八日、公、長福寺の僧某を矢部に遣して和を

阿蘇氏に請はしむ。二月九日、公、首服を加ふ。名を頼房と更め、四郎太郎と

晴賢大内義隆を弑す

次女登利重任に嫁す
公大口を取らん志
今の薩摩
重任と謀つて大口を
陥る

相模守大口を公に與
ふ

稱す。夏六月二十七日、我が老臣阿蘇及び宇土の老臣に娑婆峯に會す。二十九日、栖本の兵上津浦を撃つ。公、佐敷の兵を遣して之を御ぐ。後田浦の兵を以て之に代ふ。遂に更番に之を守らしむ。是の月、考に從ひ、此に保く義滋公の次女、菱刈左兵衛佐重任に嫁す。初め、公、大口隅を取らんと欲す。而して城主西原某、出羽守忠明、何の據る所あるを知らずの勇を畏れ、之を重任に謀る。重任妹を以て西原に妻はせ、陽て之と相親しみ、陰に栗田對馬をして之を偵はしむ。對馬選兵八十人を率ゐて潜かに大口に抵る。夜縫りて城に入り、火を縱つて厩舎を燒く。城中騒擾す。西原時に病に伏す。人に扶けられて起ち、切齒して曰く、憾むらくは左兵衛の術中に陥りしをぞ。遂に火に投じて死す。城陥る。重任取りて以て公に與ふ。公、乃ち東彈正忠長兄・丸目兵庫頭頼美・赤池伊豆守長任をして更番に之を守らしむ。秋七月朔、東郷相模守使を遣して婚を求む。公、之を許す。三日、相模守使を遣し大口を以て公に與へ之を領せしむ。後、義滋公の三女相模守に嫁す。冬十二月十五日、義滋公の生母豊永氏卒す。齡八十七、法諡爲室壽邦。

頼孝等反す

豊福に頼堅を打つ

上村外記を久木野に討つ

薩兵上村を援く

三年丁巳春二月二十一日、上村上總介頼興卒す。三月十五日、薩の老臣伊集院大和守來りて公に佐敷に會す。夏六月十日、是より先、頼興卒するや、公、年猶は弱し。頼興の子上村の城主左衛門大夫頼孝・弟・豊福の城主左馬助頼堅・岡本の城主稻留左近大夫長藏と三郡を分領せんことを謀り、各々其の城に據りて反す。頼孝兵を薩、日に乞ふ。是に於て、公、老臣を召し謀りて曰く、寡人之を熟思するに、其の謀主頼孝を討たんよりは、寧ろ先づ頼堅を討つて其の羽翼を斷たんかど、老臣之を然りとす。公、乃ち八代の老臣東山城をして豊福を打たしむ。是の日、山城攻めて豊福城を抜く。頼堅通れて鏡の福善寺に匿る。捕へて之を誅す。是の日、菊池則直移りて松求麻に居る。秋七月二十五日、是より先頼孝の黨與上村外記、其の子某、久木野の寨に據る。是の日、公、兵を遣して之を討たしむ。攻めて之を抜く。外記父子菱刈に逃る。菱刈重任、頼孝の誘ふ所となり來りて久木野を援く。我が兵之を斬る。此の役愛甲孫左衛門力戦して死す。功を最となす。公、勳狀を其の子米市に賜ふて父の功を賞す。八月十一日、薩人平兵部忠義・子徳滿丸中城出羽兵五百に將とし來りて上村を援く。公、税

大畑の戦ひ

十三歳なる黒肥地徳三郎の一言槍

一軍は上村を討つ

其の戦死者

一軍は岡本(岡原村)を討つ

宮原(岡原村)に眞幸の兵を斬る

所新兵衛繼惠と稱す。後大炊助を遣して之を大畑に防ぐ。繼惠兵を分つて二と爲し、一軍を田代に伏せ、自ら一軍を率ゐて漆田より進みて一坂に戦ふ、伏起る。薩兵以て上村の兵至ると爲して備へを爲さず、我が兵夾撃して大ひに之を敗り、北るを追ふて笠置に至る。西五郎左衛門、薩將忠義を斬り、梁瀬兵三郎、出羽を斬り、箕毛正市丞、坂本大舍人を斬り、長野六左衛門、萩原彌五郎を斬り、早田隼人、栗下三郎を斬る。首を斬ること百二十級、黒肥地徳三郎年甫めて十三、衆に先んじて進み戦ひ、第一槍を爲し、亡ぐるを追ふて一里山に至る。功を最とす。増運寺の僧某、敵を笠置に逐ひて功有り。公、命じて還俗せしめ、漆田の田を賜ひ、漆田讃岐と稱せしむ。是の日、公、八代・葦北の兵を分つて二と爲し、一軍は上村を討つ。頼孝、城を襲りて防戦す、克たず、出で、飯野向に奔る。東源四郎・平川出羽・鹿末彦兵衛・西源太兵衛・深水式部左衛門・修驗道常陸坊之に死す。一軍は岡本を討つ。城兵眞幸の援兵と出で、我を貝崎に拒ぐ。我が兵撃つて之を破り、今井正市丞・上村左京・丸尾刑部・稻津雅樂・木山藤左衛門を斬る。首を斬ること十餘級、長藏飯野に出奔す。十一日、眞幸の餘兵宮原に屯す。我が兵之

を撃つて士卒六十餘名を斬る。田中民部・安藝・左近之に死す。是の歳、犬童傳心豊後より歸る。公、命じて還俗せしめ、改めて美作と稱せしめ、上村の地頭と爲す。

頼野原(黒肥地村)大戦の原因
東源正丸目兵庫の隙頼美或はよりはるならん
頼美かけ之にすがりて出づるを繼出といふ

子(なんぢ)

魚肉は食ふ爲に殺さるの外なし、故に只殺さるるとを魚肉といふなり

永祿二年己未、老臣東長兄、丸目頼美と隙あり。初め頼美の母中城に居りて侍婢多し。兒玉彌太郎・深水新左衛門・早田兵八各々其の婢に通ず。中城壁立す、毎夜縫して登る。遂に其の女を取らんと欲するも得ると能はず、三人相謀り、丸目氏を亡ぼして之を奪はんとす。彌太郎東氏に往き、頼美を誑して曰く、兵庫、子を傾け、權を専らにせんことを圖る、子早く圖らずむば恐らくは騎を噬まんと。長兄信せず。新左衛門・兵八・丸目氏に往きて長兄を誑す。頼美又信せず。彌太郎長兄に謂つて曰く、兵庫毎夜縫して中城に登り、竊かに其の母に謀る、子若し信せずむば、試みに人をして視しめよと。其の夜登ると初めの如し。長兄、甥某をして竊かに之を視しむるに驗あり。長兄終に之を信じて、而して丸目氏を亡ぼすの計を成す。新左衛門・兵八走りて頼美に告げて曰く、彈正、子を攻むるの計既に成る、請ふ子速かに之が備を爲せ、之が魚肉爲る勿

れど。頼美も亦之を信ず。是に於て二氏大に都を構ふ。太夫人内城君之を聞き
 て大ひに憂ひ、湯前の城主東參河守直政を召す。直政意謂らく、頼美は吾の姻
 なり、今長兄・頼美相構ふと聞く、而して太夫人吾を召す、是れ必ず吾に命じて
 頼美を除くなりと。即ち選兵九十人を率ゐて來り、兵を七地の窪に匿し、勇士
 湯前駄左衛門・隼人二人を従へて入り、太夫人に見ゆ。太夫人曰く、今公、弱く
 して二老相よからず、社稷の事一に卿に托す、卿、其勉めよと。直政、命を承
 けて出で、而して二人に謂つて曰く、初め吾が心に期するには、内城君吾に命
 じて兵庫を除かしめば、則ち吾必ず與に相刺して死すべしと、故に汝等二人を
 従へて來る、今命は然らず、吾將た兵庫と相刺さんか、命にあらざるなり、將
 た兵庫を棄て、彈正に與せんか、亦不義なり、遂に丸目氏に往く。頼美、具さ
 に狀を以て告ぐ。直政曰く、事既に此に至る、如何ともすべきなし、子如し急
 あらば、公と内城君とを奉じて難を我が湯前城に避けよ、俱に力を竭して以
 て社稷を安んせん。頼美之を諾す。直政馳せ還る。長兄之を聞き、以爲らく
 二子公と太夫人とを挾んで兵を擧げば、我必ず叛名を受けん、若かず我二子に

先だち公母子を奉じて去り、彼に叛名を得しめ、然る後之を討たば克たざるなけ
 んど。乃ち入りて太夫人に見へて曰く、前日君參河を召すは、必ず社稷を安
 んずるを命せしならん、而して臣今聞く、參河・兵庫と社稷を利せざるを謀る、
 君參河の賣る所となるなけれ、臣請ふ君と公とに従つて難を赤池城に避けん
 と。太夫人之を許す。之を公に請ふ、公も亦許す。夏五月十九日夜、長兄竊かに
 公及び太夫人を奉じて赤池城に逃る。東常陸介・恒松十郎左衛門城に登り大呼
 して曰く、東老臣、公と内城君とを奉じて叛臣丸目氏の難を避く。火を放つ
 て頼美の宅を焼く。頼美警れて措を失ひ、母及び妻子を挈て湯前に走らんとす
 牧野越後之を城中に遮りて戦死す。伯耆式部之を赤池原に遮りて曰く、吾敢
 て叛臣をして逃れしめずと、又戦死す。二十日、頼美湯前に至り、使を馳せて之を
 直政に告げしむ。直政、使者を詰りて曰く、我兵庫と公母子を奉じて來ることを
 約す、今兵庫至る。公と内城君何くにあると。使者具さに事を告ぐ。直政勃然
 として曰く、我肯て叛臣を納れず、汝反りて之を汝が主に言へと。其の老臣上田
 兵部、直政を諫めて曰く、吾子固より兵庫を約るゝを約す、而して今之を拒むは

奥野(久米村)の戦
 牧原に戦ふ
 豊はしんがりにて後よりゆく軍兵

不信なり、請ふ信を失ふ莫かれど。直政之を然りとし、出で、頼美を迎へ、俱に其の城に據る。城中糧乏し。直政、弟恒松藏人及び深水左近をして上村の糧を取らしむ。是の日、長兄、公及び太夫人を奉じて人吉城に歸る。犬童美作・佐牟田三郎左衛門・川邊伊賀・税所彈左衛門・丸目兵八等人吉の兵を率ゐり往きて湯前の糧道を絶つ。藏人等と奥野の一度橋に戦ふ、藏人敗走す、三郎左衛門・彈左衛門・兵八之に死す。初め左近、三郎左衛門と相好し、左近の人吉を去るや、敵一人を斬りて然る後去らんと欲して得ず、三郎左衛門の宅に至りて訣別し、手巾を相易て出で、往きて湯前城に入る。諸を其の友に語るに、其の友笑つて曰く、三郎は敵にあらずや、盍ぞ之を斬らざると。左近慚色あり。一度橋の役左近衆に先んじて前み、自ら名を呼びて曰く、前日の手巾を反せと。三郎左衛門と奮闘して俱に死す。美作・伊賀劍を被りて神氣撓まず、亡ぐるを追ふて湯前の牧原に抵る。藏人又城兵を率ゐりて出で戦ひ、敵勢復振ふ。小田左馬允・北島主水・高田與九郎之に死す。人吉の兵利あらずして引き退く。美作・宮原玄蕃故名に復すと殿す。敵兵後を躡んで至る、射て玄蕃の股に中つ、玄蕃走る、進んで將に之を賊

岩崎加賀守

一勇使命を全ふす
 健歩は足の速者なるもの

多良木の戦

羅城は城のそごる
 わなり
 伏起りしも克たす云々は王宮山に伏せたる須藤深田の兵起り湯前勢たる直政等に抗せしも克たざりしを以て、其の伏に勝

らんとす。美作立どころに之を斬る、敵懼れて復進まず、美作稍く兵を收めて去り、多良木城に入り、遂に人吉に還る。是に於て直政・頼美多良木城を攻めんことを謀る。會々多良木の城代岩崎加賀守、長友の惣某名湯前の城中にあり、事を長友に告げんと欲するも使すべきものなきを苦しむ。而して其の婢頗る勇あり、婢に命じて曰く、汝吾が爲に多良木に使せよ、城門出で易からず、吾に一策あり、吾手づから汝を杖たん汝泣き且つ罵り、伴りて川に投ずる爲して出でば、必ず誰何するものなからんと。婢諾す。竟に其の策の如くして出で、命を長友に達す。長友、健歩を遣して之を公に白す。公、乃ち美作及び久保田下野・稻留播磨・東能登・恒松十郎左衛門・深水治部左衛門をして、兵三百を率ゐり往きて多良木を援けしむ。人吉の兵往きて里の城に陣す。木枝の地頭久保田越後、往きて多良木の羅城を守る。須惠、深田の兵王宮山に伏せ、以て敵の至るを待つ。秋八月十五日の夜、直政・頼美及び藏人と多良木城を襲ふ、伏起りしも克たす。直政勝に乗じて城に逼るも城兵堅く守りて進み攻むると能はず、退きて彌野原天道ケ尾に陣す。越後湯前の兵を望みて曰く、敵は闘士多し、易る

ちたる直政等は勢ひに乘じて多良木城に迫りしを云ふなり
椎葉山の湯前援兵
頼野原の大戦
各隊の陣所

深水惣左衛門其の子孫今在り

夫は丈夫なり

惣左衛門の功

黒肥地村産原を流る劇戦の状況

べからざるなりと、那須山、大内内の地頭那須兵部大輔武宗、小崎の地頭那須下野武晴、向山の地頭那須佐兵衛各々其の部兵に將とし來りて頼野原に陣し、湯前の兵を援く。十六日味爽、人吉の兵は、横瀬大王祠前に陣す。多良木の兵は波志鹿倉に陣す。須惠、深田の兵は、小堤尾立に陣す。美作人を多良木の營に遣して士一人を招く。深水惣左衛門至る。美作之に謂つて曰く、敵兵勢ひ鋭し、犯し易からざるなり、吾前鋒と爲りて之と戦はん、足下機を相し、横より之を衝け、則ち勝つこと必せりと。惣左衛門可かずして曰く、吾敵をして城に逼らしむるすら猶ほ以て辱となす。而して今戦に臨んで己れ之が先鋒たる能はず、援兵をして先鋒たらしめ、坐して之を觀ば、人必ず吾を夫にあらすと謂はん、恥孰れか之より大ならん。肯て命を聽かずと。即ち營に還りて士を聚め、杯を舉げて曰く、今日の戦ひ吾先登して死せん、吾に従ふものは來りて此の酒を飲めと。來り飲むもの二十人、俱に甲を擡きて出で、牛久里川を涉り、顧みて曰く、吾此の川を以て三途の河と爲す、諸君如何と。答ふるものなし。惣左衛門、津留八郎左衛門、木通清藏と進んで天道ヶ尾に登り、力戦して死す。多良木の兵

後ろより來るもの、

高宗堀の戦

湯前勢の死者

敗走す。美作敗を聞きて能登、下野、播磨、十郎左衛門と疾馳し、能登先登し、美作後に至りて指揮す。能登怒りて曰く、敢て後者の指教を受けずと。美作大ひに怒り、刀を撫して之に就く。播磨、十郎左衛門同聲にして之を止めて曰く、強敵前にあり、私闘の時にあらざるなりと。俱に進んで頼野原に登る。敵兵の後にいで大ひに高宗堀に戦ふ。敵兵披靡し、十郎左衛門及び上村左近、津留左京、田浦彌兵衛之に死す。圓満院の僧某、其の徒五十餘名を率ゐて來援す。那須山の兵の挫く所となりて皆走る。將監坊獨止りて敢て戦ひ、創を被りて退く。須惠、深田、木枝の兵尋ぎて至る。人吉の兵と夾撃して大ひに湯前の兵を破り、其の將直政、弟藏人、湯前豊前、駄左衛門、隼人、小兵衛、松田小左衛門、仙龜、岩永將監、中山但馬、式部、平瀬玄蕃、野田治左衛門、治部左衛門、吉六、北村新助、馬返新兵衛、山口舍人、濱崎與一兵衛、森山新介、岩松八郎、志折入兵衛、矢野又入、田中掃部、岩野藤介、小太郎、長岡民部、新左衛門、木原彌五郎、丸目次兵衛、西主水、上淵内膳、眞瀬千介、南條次右衛門、小谷九七郎、永田源右衛門、丸山新兵衛、北川五郎作、小野彌兵衛、幸野豊前、大石掃部、釜山七十郎、岡村新八、平田甚五郎、沼崎市左衛門、那須

人吉勢の死者

逸角・東新左衛門・高山十郎・西光寺住持某・林泉庵住持某・修驗道覺仙・玄覺
 及び那須山の將武宗・武晴・左兵衛を斬る。首を斬ること三百三十餘級。佐牟田
 源左衛門・小田太郎左衛門・奥野大炊・久保田源左衛門・三郎左衛門・田浦左京・五郎
 左衛門・又兵衛・九郎三郎・三郎兵衛・五藤左衛門・養田八兵衛・左近・宮崎六郎左衛
 門・荒川豊前・新堀筑前・高橋兵庫・五藤兵衛・内田太郎兵衛・彌左衛門・宮原主税・木
 工之丞・兵部左衛門・甚九郎・玄蕃・堀切左衛門・犬齋喜三左衛門・野稻又十郎・後代
 院喜六・松木平三郎・井芹主馬・小岩野春藏主・稻留玄蕃・北嶋七郎・塩津留又九郎・
 水俣千七兵衛・白坂若狭・桑幡兵部・前田玄蕃・西筑前・大石新五郎・稻山宰相・源島
 雅樂・井福四郎左衛門・弓削田三郎左衛門・米良美濃・早田又四郎・吉田藏人・橋藏人・
 横瀬圖書・松江掃部・上村九郎左衛門・仁王木土佐・有馬次兵衛・光福寺住持某・
 修驗道岩柴等之に死す、戦死七十餘人なり。頼美亡げて日向に奔り、伊東氏に依
 る。時に中山和泉、留りて湯前城を守る、頼野原の軍敗るゝを聞き、火を縱
 つて城を焼き、直政の妻子を殺して、而して自盡す。頼美の母及び彌太郎等の通
 する所の婢皆死す。人吉の軍、首虜を小稚川に墮して凱旋す。稻留玄蕃は、戦に

黒肥地多良木界

稻留玄蕃の逸話

槍 柱

臨み、石を以て其の槍刃を磨滅す、人怪んで其の故を問ふに曰く、凡そ人皆生
 を全ふして後能く功を建て名を知らる。今日の戦ひに吾と槍を接するものは必
 ず敵の良なり、吾唯之を殺すを樂まざるのみと。聞くもの皆其の志に感ず。
 後犬童美作其の子頼兄に謂て曰く、頼野原の役に多良木の士多く戦死す、時論は
 以て優劣なしとす、余の論は然らず、余は惣左衛門を以て第一とす。昔日晴廣公
 宇土と二たび戦つて二たび敗る。是に於て晴廣公三郡に令して曰く、各郡槍柱
 一人を撰びて來れど。槍柱とは士中第一の人を謂ふなり。求麻は岩崎藤左衛門
 を推し、葦北は竹下播磨を推し、八代は養田三浦介を推す。晴廣公、三浦介に問
 ふて曰く、八代中の槍幾桿ぞと。對へて曰く、十二人なりと。晴廣公、喜ばずし
 て曰く、何ぞ其の寡きやと。藤左衛門に問ふ、對へて曰く、二十五人なりと。
 播磨に問ふ、對へて曰く、二人なりと。晴廣公曰く、絶倫なるものは多くを得べ
 からずと、乃ち三人に命じて宇土を撃つを謀らしむ。三人相議して策を獻す。
 晴廣公、其の策に従つて師果して利あり。余を以て之を視るに、惣左衛門の如
 きは、則ち槍柱たるものなりと。

外史氏曰く、甚だしい哉女色の能く人を敗ることや。古より女禍の大なるものは天下を亡ぼし、其の次なるは國を亡ぼし、其の次なるは家を亡ぼし、身を亡ぼす。然れども其の本末を原めれば、則ち未だ始めより忽微に起らざるはあらざるなり。夫れ獺野原の亂たるや、丸目・東二氏相構ふるの日に起らずして、兒玉・深水・早田三人婢に通ずるの日に起る。三人婢に通ずるの日に起らずして、丸目氏の母侍婢多くして、家訓嚴ならざるに起る。故に善く國家の爲に慮るものは、敢て忽微に怠らずして常に能く禍を未だ萌さるに杜ぐなり。慎まざるべけんや、戒めざるべけんや。

八代陣内火す

獺野原戦因覺はれて連累集首さる

獺野原役の行賞

深田有の一武大平山

九月二十七日夜、八代陣内火く。
 三年庚申春閏月彌太郎・新左衛門・兵八、事覺はる。宗慶寺の僧智勝に連及す。乃ち四人を中河原に斬り、赤池原に梟首す。公、東能登を以て湯前の城主となす。須惠、深田、木枝の地頭を召して之を慰勞し、勤狀及び田三反を越後に賜ふ。越後辭して曰く、是れ臣一人の功にあらず、實に衆士の力なり、願はくば田を以て山に易へ、一武の大平山を以て木枝の有となさんことを、則ち衆士皆君の

水俣を取る
天草尙種城を授く

種子島に銃傳はる

眞幸を撃つて取る

賜を拜せんと。公、之を許す。越後の弓手久保田彌九郎・西佐吉・塚原興兵衛善く射る。射て多く敵を殲す。公、之を賞す。其の他賞を行ふと差あり。三月阿蘇惟前、孫惟氏と密かに八代を去りて小代城に入る。秋七月二日、公、東左京亮を遣して水俣を取る。政補案するに是より先、蓋し水俣を失ふ所なし。天草尙種來りて城を我に授く。公、佐牟田民部少輔を天草に遣して之を謝す。冬十一月二十八日、公、千代菊君を納れて夫人と爲す。是の歳、公、無量壽院の住持正阿彌で、前出羽と稱す。祐玉寺の僧某、を飯野に遣し、甘言を以て頼孝・長藏を召す。二人喜んで來る。乃ち頼孝をして水俣城に居らしめ、長藏をして八代城に居らしむ。
 四年辛酉春二月十七日、夫人氏八代より至る。老臣東加賀守・宮原筑前守從ふ。是の歳、公、改めて遠江守と稱す。稻留筑後始めて鳥銃を得て之を公に獻す。初め天文中疊船種ヶ島摩に來りて互市を求む、齋す所のものに鳥銃あり、嶋主時堯、購ふて之を得、人をして之を學ばしむ、是より國人始めて鳥銃を傳ふ。天主教の我が國に入るも亦是より始まると云ふ。
 五年壬戌夏五月十日、兵を遣して眞幸を撃つ。公、出で、大畑に陣す。薩

人北原又太郎、飯野城にありて勢援を爲す。我が兵撃つて眞幸を取る、乃ち東彈正忠・深水右馬助・佐牟田太左衛門をして更番に之を守らしむ。日向の兵屢々來侵す。六月八日、伊集院大和守來援して眞幸を守る。秋七月五日、東郷相摸守來りて之に代る。

八代の士に更番に眞幸を守らしむ

六年癸亥閏六月、八代の士東左京亮・六郎左衛門・三郎左衛門・八郎左衛門・木工右衛門・佐牟田民部少輔・宮原東市允・田浦六右衛門・的場市十郎・犬童傳六・桑原九郎五郎・野橋又太郎・高橋中務少輔・九郎次郎・養田平馬允・木工左衛門・紀伊介・恒松喜三右衛門・内田九郎左衛門をして更番に眞幸を守らしむ。二月九日相摸守、公をして日候伊東祐隆守加賀と和せしむ。公、之を許す。三月十八日、日候荒竹千左衛門・坂本佐渡・須木左兵衛をして來りて成を行はしむ。夏五月二十七日、公、移りて八代陣内城に居る。六月六日相摸守使僧を遣し、公をして併せて眞幸、飯野、大明寺を領せしむ。秋八月十五日、是より先、公、使を遣し、薩侯修理大夫島津義久を聘問す。是の日、義久書を與へて之に報ふ。冬十二月二十一日、是より先、公、普門寺の僧某を遣して身甲を義久に贈る。

島津義久を問ふ

是の日、義久書を與へて之を謝す。

七年甲子春二月九日、朝廷町帝宣旨を下し、公を従四位下に叙し、修理大夫に任す。幕府義經内書花押及び偏諱を賜ひ、兵部大輔細川藤孝手書を副ふ。是に於て、公、名を義陽と更む。歴代私監、族譜備考に曰く、是の時公、本藩の士恒松七郎兵衛・豊永某と菱刈の士楠原某、柄本某等に會す。十一日、赤池長任、眞幸の筈尾城を撃つ。初め長任毎に大口城を守る。薩兵輒ち來り侵す。長任怒りて曰く、彼れ我を輕侮するなり、我も亦之に我の伎倆を示さんと。乃ち岡本河内守・岩崎六郎左衛門・桑幡新六と騎兵六十五、歩兵三百を率ひ往きて筈尾城を撃つ。城兵出で戦ひ、六郎左衛門・新六敵兵河田半左衛門・稻瀬六郎五・有川兵藏等數人を斬り、奮闘して死す。長任、河内守創を被りて引き退く。此の役東出羽・菱刈に使用して事を誤り、遂に薩に出奔す。後捕へて之を誅す。三月五日、是より先、公、使を京師に遣し、刀一口・黄金百兩を幕府に獻じ、黄金十兩を藤孝に贈り、其の佗贈遺之に稱ふ。是の日、幕府内書花押を賜ひ、藤孝書を與へて之を謝す。夏四月八日、宇土の城主左兵衛尉伯耆行與卒す。子某、猶幼な

朝本姓菱刈になきが如し楠本にあらざるか

長任眞幸筈尾城を撃つ

豊福城主行直字士を撃つ

り、豊福の城主伯耆行直兵を起して宇士を撃ち、城に入りて自ら立つ。八代の兵豊福に至る、行直の立つを聞きて還る。五月三日、幕府の使者櫻本坊、口宣を奉じて本藩に来る。公、之を人吉城に拜す。

足利義輝試せらる

八年乙丑夏五月、松永久秀、大將軍足利義輝を弑す。細川藤孝、義輝の弟僧覺慶を奉じて近江に走り、還俗して名を義昭と更む。冬十月二十八日、義昭書を興へて兵を徴す。上野大藏大輔書を奉じて来る。十一月五日、兵を遣して豊福を撃たしむ、公、往きて高津賀に陣す。八日、大野、松橋を撃つて火を放ち、民舎を焼く。公、三船の城主甲斐斐宗運して宗運と號す。に下久久に會ひ、豊福を取りて歸る。是の歳、長女虎滿生る。

豊福を撃つて取る

水俣に頼孝を討つ

深水源八郎の建言

十年丁卯夏四月朔、公、兵を遣して頼孝を水俣城に討たしむ。深水源八郎長則諸父參河守長智に謂て曰く、頼孝は公の族なり、輕士をして之を討たしむるは禮にあらざるなり、吾請ふ往きて相戦つて死せんと。長智卒然として曰く可なりと。長則之を箴めて曰く、亞父は執政の重臣なり、輕々しく言を出すべからずと。長則往きて水俣に抵る、頼孝門を閉ちて堅く守る。長則、梯して城堞

頼孝自殺す

市山の戦

大口をさるの上に市山城はと入れて解すべし
候人は斥候なり(たんでい)

後藤左衛門忠元と接戦す

忠元他日市山役を談す
八代に長藏を討つ

に登り、自ら名を呼んで曰く、守將罪あり、死を逃るゝ所なし、堅く守るも何ぞ益せん、吾請ふ俱に相戦かつて死せんと。頼孝之を聞きて門を開きて長則を入らしむ。酒を取りて與に飲み、槍を操りて接戦す。長則槍に中りて殪る。頼孝甲を脱して櫓に登り、大呼して曰く、大丈夫人の手に死せず、敵來りて吾が死を觀よと。子頼辰と同じく腹を屠りて死す。士卒悉く戦死す。九日、大口の守將赤池長任、市山城を攻む。初め薩侯義久、新納武藏守忠元をして市山城を守らしむ、大口を距ること遠からず。是の日、薩人町田新右衛門・鎌田左京市山に使用して還る。忠元二人を送りて小苗代原を過ぐ。我が候人之を長任に告ぐ。長任、東藤左衛門・上村彌九郎・的場後藤左衛門をして之を撃たしむ。忠元戦はずして退きて城に入る。我が兵進み攻めて羅城を破る。城兵殊死して戦ひ、藤左衛門之に死す。後藤左衛門、忠元と槍を接して之を刺す。從兵來り援け、忠元免るゝを得たり。後天正中、忠元來りて頼兄の宅に宿る。酒酣にして語市山の役に及ぶ、忠元自ら其の耳根の疵を指して笑つて曰く、是れ後藤の槍痕なりと。十三日、高橋駿河・東尾張・源兵衛・主馬をして長藏を八代城に討たしむ

長藏自殺し上村氏絶す

深水長智剃髮して宗方と號す

馬越宗木初栗の合戦
宗木は今の曾木ならん

初栗野は羽月野か

激戦の情況

長藏自殺す。是に於て上村氏絶す。初め公の二人を召すや、立どころに之を誅せんと欲せしも、多難を以ての故に稽留して此に至ると云ふ。秋八月十二日、晴廣公の十三回忌に當り、三郡に赦す。十五日、放生會を井口八幡社に行ひ、深水長智髮を剃り、自ら宗方と號して四方を歴遊す。是の歳、次女千代滿生る。

十一年戊辰春正月二十日、薩侯義久弟飯野の城主兵庫頭義弘、出水の城主薩摩守義虎と兵三千に將として來る。義久差刈馬越に陣す、義弘・義虎進んで宗木に陣す、大口の守將長任城を出で、宗木川に逼りて陣す。歩卒川を涉りて初栗野に登り、互に銃矢を放つて相争ふ。内田傳右衛門、長任に謂つて曰く、彼は衆我は寡なり、川を涉りて戦ふは計にあらす、請ふ薩摩御せしめんと。長任之を然りとし、中山帶刀左衛門をして之を卻けしむ。歩卒聽かず、益々進み戦ふ、帶刀已むを得ず、又進み、流矢に中り、人に扶けられて退く。我が兵悉く川を涉る。傳右衛門先登たり、岡本河内守之に次ぐ。薩兵楯を列ねて相待つ。傳右衛門、伊集院備後と接戦し、劍を被りて退く。河内槍を揮つて直前し、別將川上左近將監を刺す。左近槍に串されて來り逼る。河内槍を抜きて

義虎危きを免る
我が戦死者
上村は薩人が相良の士か薩士は(かみむら)相良士は(うへむら)と云む

之を仆す、將に之を誅らんとして、從兵來り拒む、遂に其の首を得ず。既にして河内其の誰たるを知らず、久しきを歴て始めて始めて其の左近將監たるを知る。後軍繼ぎ至りて又戦ひ、死傷過半なり。我が兵氣沮み、別府・安藝馳せ至る。傳右衛門、安藝に謂て曰く、今日の戦ひ、傳や又先登せりと、安藝曰く、吾未だ面あり之を見ずと、傳右衛門怒りて槍を把り、又前んで敵中に入る。安藝も尋ぎ前みて奮闘し、兵氣復振ふ。安藝、流失に中りて死し、薩兵敗走す。義弘、遠矢下總と兵を引き退く。豊永大藏尾撃して永野忠右衛門を斬る、義弘顧みずして去る。黒肥地紀伊、義虎の兵を引き退くに遇ひ、大ひに呼んで曰く、敵將止れ、吾請ふ君と樂戦せんと。義虎且に止らんとす、其の臣市來嘉兵衛、其の甲を被ふて之を被り、偽りて薩摩守義虎と呼び、反り戦ふ。紀伊之を斬る。義虎遂に免る、を得たり。首を斬ると百餘級なり。我が兵竹下藤治左衛門・吉賀江軍八郎・原田孫次郎・平川助左衛門・左近・伊集院昌花・牧野大膳・次郎左衛門・上村彌九郎・湯前與次郎・米良右近・桑原隼人・田代小三郎・樺木早左衛門・左近・平次郎・宮原主税・治部・次郎五郎・繪兵部左衛門・高田五郎左衛門・田浦六右衛門・藤三郎・地左衛

門・小田又四郎・村山源次郎・西九郎左衛門・吉牟田六郎左衛門・鹿末助次郎・山崎木工右衛門・池田藤左工門・恒松平七郎・西山彌七郎・細木彌七郎・桑幡又九郎・犬童軍四郎・南江某々 悉地院住持某々 譜代の卒馬鞍金兵衛之に死す。

十二年己巳春正月二十四日、平出水の守將中務大輔家久、初栗の役に報ひんことと謀り、兵を砥上に伏せ、糧を運び以て大口の兵を誘ふ。大口の守兵出で、之を奪はんと欲す。小田八郎右衛門之を止めて曰く、是れ敵の我を餌するなり、輕しく出では、恐らく敵の謀中に陥るべしと。丸目岩見・内田傳右衛門從はず。大ひに入郎右衛門を罵りて曰く、男兒膽あり、背て死を惜まず、足下獨り死を惜む、長生して大官に至らんと欲するかと。俱に馳せて砥上を過ぐるに、敵營螺を鳴らす、伏兵四起して圍み撃つ、我が兵敗績し、石見傳右衛門皆亡ぐ。八郎右衛門笑つて曰く、快口男兒膽何にかあると、獨り止りて去らず。從兵衣を引きて曰く、丸目・内田皆奔る、子獨り止まりて何の益かあらんと。八郎右衛門之を叱して曰く、汝余を以て石見傳右の比と爲すか、余ただ之を取つと、衣を拂つて前み、深く敵中に入り、苦戦して死す。伯治者部右衛門・村山紀伊・平

平出水砥上の合戦
薩隅日地理参考は戸
神尾に作る
砥上は島神なり伊佐
郡山野羽月兩村の境
に位する山にして山
富士に似るを以て山
野富士の稱あり、麓
に一瀨ありて若稚子
の姿現るに蓋し八
郎右衛門に關する傳
説か
後註參照

入郎右衛門の勇

其の戦死者

八郎の死を載せず

川彌兵衛・長喜兵衛・市瀬三郎次郎・久保田讃岐・桑幡六郎三郎・松本三郎兵衛・井口清兵衛・黒肥地半右衛門・紀伊・田代左京・東主計・大藏・右馬助・藤左衛門・江代大膳・枝尾傳助・平田紀伊・高柳源兵衛・萬江段右衛門・早左衛門・深水源三郎・愛甲六郎次郎・湯前下野・米良甚右衛門・修驗道園田日圓之に死す。守將東伊勢守大口を棄て、去る。使を馳せて敗を公に告ぐ。公、其の簿を見て八郎右衛門の死を載せず、時に小田加賀守朝す。公、之に謂つて曰く、此の役や輕銳多く死す、唯汝が子八郎あり、予深く頼みとす。加賀守對へて曰く、然らず、兒や必ず死す、臣兒を譽むるにあらず、然るに兒勇あり、敗に臨みて敢て生を偷まず、蓋し其の深入するを以て、其の死所を知るものなきなりと。使又來り、八郎右衛門の死を報ず、果して加賀守の言の如し。公、歎じて曰く、父をして子を信せしむると此の如し、豈に難しとなさすや、予益々其の死を惜むと。涕言に隨つて下り、一座爲に泣く。石見傳右衛門人の言を聽かず、輕躁にして敗を取るを以て、公の疎んずる所と爲る。夏六月七日、是より先、毛利元就、大友義鎮と豊筑の間、に戦ひ、累歳決せず。是の日、元就及び孫右馬頭輝光、書を公に與へて援を求

元就等援を求む

七年の租税七十兩

む。駿河守吉川元春。左衛門佐小早川隆景副書す政圖案するに元就。元龜元年卒す。参考、備考は証なり。今日本外史、皇朝史略、逸史にあり。是なり。秋九月二十七日、是より先、濃侯上総介織田謙爾、則ち萬世一覽は是の年に係くるは是なり。秋九月二十七日、是より先、濃侯上総介織田信長、義昭を奉じて京師に入る、義昭、征夷大將軍を拜し、信長、爲に二條の第を修め、諸國に課して役を助けしむ。是の日、幕府義昭内書花押を賜ひ、租金を求む。紀伊守上野豪爲、書を奉じ來る、公、黄金七十兩を獻じ、以て費用を助く、蓋し七年の租と云ふ。豪爲京に歸り、書を與へて之を謝す。

註。薩隅日地理参考に曰く、永祿十二年肝付兼寛。新納忠元。島津義成に代りて羽月の城主たり。菱刈隆秋。慶長來りて寇す。兼寛。忠元。市山の守將島津家久と相謀して、同年五月六日大野駿河忠宗。宮原真前。景種に命じ戸神尾及び稻荷山（一説諏訪山）に兵を伏せ、忠元戸神山にありて潛に期を窺ひ、兼寛白水河内に在りて相圖を待つ。島津家久、市山城を出でると余多の人馬をして兵糧を平泉城に運ばしむ。菱刈隆秋、足輕を出して路を遮る、家久是を追ふ、隆秋又大軍を出して是を救ふ、家久暫く戦ひ伴り敗走す、隆秋が大軍勝に乗じて逐ふ、家久神尾の西に至り、兵を遣して奮戦す。時に忠元相圖の螺を吹く、忠宗。景種が伏兵左右より起り、忠元又敵の横を撃つ、兼寛亦兵を發して前後より夾み撃ち、首を斬ると百三十六（壹岐氏聞書に三百余人と在り）此の外平泉川に落ち入りて死する者數を知らず、是より隆秋勢ひ衰へ、再び兵を出さず（一説に島津家久大口の城下に至り鐵砲を放ち伴り戦を挑む故に隆秋城兵を出さずと云ふ又隆秋が兵溺死せし潭を竹瀬と云ふ、今に懸氣磯り五月六日には土人此の淵に至るとを禁す）同年八月十八日、島津義久大軍を領ひ大の城を圍む、隆秋力盡きて降を請ひ、九月十日相良帶刀。深水太郎左衛門を賞とす、是に於て義久是を許し、大軍圍を解き薩

秋以下大口を去て東摩に退く、義久城に入り、鎌田尾張政年凱歌を唱ふ、忠元を菱刈・牛屎兩院の地頭に命じ、大口城に在りて其の後隆秋再び冠をなす事能はずと。此によりて之を觀る、島神の戦ひは一回にあらざりしものなるべく、又月日人名等諸説相違する所多きも、今俄に之を究むるに由あらず、記して以て参考に供するのみ。

元龜元年庚午春閏月日、市房社に調す。國歌を賦して曰く

神垣の霞は注連と引はへて

花の白綿誰祈るらむ

深水頼金、廣き賦して曰く

梓弓八百萬代の春かけて

祈る心は神の隨意

赤池長任、賦して曰く

春霞分て詣でし君が代は

萬代までも神や守らむ

犬童頼安、賦して曰く

代代かけて霞吹なす神風に

市房社に調す
公以下の國歌

古歌に
千早振加茂の社のゆ
ふたすき一日も君な
かけの日はなし

四方の草木の靡かぬぞなき

深水宗方、賦して曰く

君が代の久しき影を春毎に

植てぞ祝ふ神垣の松

秋八月十五日、幕府内書を賜ふて、猩猩の皮、虎豹の皮を求む。是の歳、第三女千代菊生る。

二年辛未、月日ヤブる。矢津留新助・松田謙岐、忿闘して佐無田賢順の庵に死す。其の住持某ぐは新助の弟なり。逸れて葦北に匿る。後還俗して矢津留隼人と稱す。

三年壬申、春三月八日、世子龜千代生る。夏五月四日、日侯伊東祐隆其の子新次郎と親ら兵に將として飯野城を攻む。城主義弘城を出で、拒ぎ戦ひ、大ひに之を敗る。五代井左衛門、祐隆を斬りて之を馘る。鎌田關清、寛朝に作る。瀬戸口八郎左衛門・久留半左衛門力戦して功あり。新次郎、義弘と槍を接して戦死す。日兵五百六十餘人、二將の死を見て皆戦死す。薩兵も亦死傷頗る多し。永祿中我が頼野原の役に逃れて伊東氏に寓するもの丸目頼美・須藤源左衛門・長倉主水之

祐隆飯野を攻む

日向兵の戦死者

義昭信長を伐たんと
して敗る

信長天下に號令す

頼盛を誅す

に死す。公、佐牟田常陸介・深水播磨・帶刀・淡路・知田伊豫・稻留助左衛門・永田但馬・奈須新八・北島五左衛門・東藤助・八郎・堀助左衛門・養毛治部左衛門・西土佐をして、歩卒八十名を率ひて往きて日侯を援けしむ。我が兵小林口に抵り、敗を聞き引き還す。是より薩兵の威稍やく強し。

天正元年癸酉、秋七月、大將軍義昭兵を擧げて信長を伐たんとす。信長、急に京師に入りて攻めて二條の第を陥れ、義昭を若江内に徙す。義昭、遂に安藝に走る。朝廷、詔して義昭の官爵を削らしむ。是に於て信長足利氏に代りて天下に號令すと云ふ。

歴代私歴に曰く、是の日、名を義昭と更むと。族譜備考に曰く、元龜元年名を義

二年甲戌、秋八月十五日、公、井口八幡社に謁す。是の歳、第二子長壽丸生る。

三年乙亥、秋七月四日、公、命じて愛宕祠の別當將軍齊頼盛を誅せしむ、初め頼盛幻術を好み、紙上の役に我が兵敗れて後、密かに志を薩に通ず、事覺はる。乃ち久保田將監をして之を誅せしむ。是の月、近衛前關白前久と號す薩に適く途に入代を歴て白木嶽妙見社に詣す。白木嶽は一名三室嶽と云ふ。前久、國歌を

關白前久公及び其の歌

賦して曰く

音に聞く三室の嶽に來て見れば
妙に見へたる二本の杉

公、前久に宮地に謁す。前久、相良氏の祖先を問ふ。公、具に之に答ふ。前久容を改めて曰く、眞に藤原氏の宗なりと。席を下りて拜す。公、之を鏡の福善寺に饗す。前久、國歌を賦して曰く

庭の面池の玉水詠むれば

類なかりし萩の下露

公、賦して曰く

水の上に立つ朝霧は曇りても

磨け鏡の池の秋風

前久、稱へて措かず、筆を把りて其の扇に書す。前久、遂に薩に適く、留ると二年、是の歳、薩侯義久日向を撃つ。日向の諸城風を望んで潰ゆ。伊東祐兵豊後に奔り、大友氏に依る。義久乃ち日向を併す。

義久日向を撃つ併す

清兵衛元服

頼兄或はよりもりならん

義久宇土を攻む

下野城を攻む

長堅大隅に殺さる

今の伊豆郡山野村にて字深仁田山あり、又大隅高邊村に字深仁田ありと云ふ、其の何れなるや知らずと雖も、旁かに求麻より來り窺ふとすれば前者を以て正とすべしか

長堅の人物

義弘萬右工門に長堅を招かしむ

四年丙子夏四月十一日、前久、馬を公に贈る。家司因幡守伊勢貞知副書し、告ぐるに京に歸るの意を以てす。

五年丁丑春三月、日開、犬童美作守頼安、深水下總頼延に代りて水俣城を守る。其の子熊徳九年甫めて十二、始めて甲を愛宕嗣に授き、名を軍七と更む。後の清兵衛頼兄といふもの是なり。

六年戊寅秋九月、薩侯義久弟義弘をして宇土城を攻めしむ。城主伯耆顯孝降る。義弘即ち鎌田關清を遣して山本郡下野城を攻めしむ。城主内空閑鎮房弟鎮照も亦降る。冬十二月二十四日、佐牟田城之介長堅、深仁田山野に獵し、鉛に中りて死す。長堅、人となり木強にして膽略あり、單身犬を率ゐて鳥銃を負ひ、論語及び略韜を帶ぶ、而して常に山野に獵し、獸を逐ひ餘聞あれば趣ち書を讀む。屢々薩隅の間に潜行して其の形勢を察し、擊ちて薩摩を取らんと欲す。義弘其の名を聞き、得て以て臣と爲さんと欲す。其の臣飯野萬右衛門、長堅と相識るを以て、義弘、萬右衛門をして之に説かしむ。長堅既に其の意を察し萬右衛門に謂て曰く、余足下と多年の知己なり、今足下を煩さんと欲す、足下

長堅薩城に入りて義弘に見ゆ

之を辭するなかれ。萬右衛門曰く、諾と。長堅曰く、足下主人の首を斬り來れと、萬右衛門答ふる能はずして退き、具に之を義弘に告ぐ。義弘曰く、眞に城之介の語なり、我之を一見せんと欲すと。乃ち萬右衛門をして之を招かしむ。長堅至る。萬右衛門告ぐるに義弘の意を以てす。長堅、徑に義弘の館に入る。城中長堅の來るを聞き、聚りて之を觀るに、則ち野様の一獵夫なり、義弘喜んで之を引見し、手づから佩刀を賜ふ。長堅、拜受して復坐し、其の腰間を搜りて火石一塊を得、之を義弘に獻じて退く。左右口を掩ふ。義弘之を稱へて曰く無雙の奇男子なり、此の奇男子あらば、未だ求麻を取るべからずと。左右頸赦らむ。後義弘、長堅を忌み、謀りて之を害せんと欲す。長堅の出獵するを聞き、銃手を深仁田山に伏せて之を狙撃せしむ。

長堅の史論

外史氏曰く、唐末に揚行密、朔方を成らんとして軍吏の舍を過る、軍吏何の欲する所あるかを問ふ。行密、奮然として曰く、惟公の首を少くのみと。即ち其の首を斬りて而して出で、兵を起す。行密、志大にして起手凡ならず、遂に吳王と爲りて雄を一方に稱す。今長堅の一言大ひに行密に似たり、而して其の志

大友島津耳川の戦

薩信限府を攻む

薩兵朴河内を侵す

も亦決して行密の下に出でざるなり。若し長堅に生を全ふせしめて、永く公の爪牙たらしめば、則ち必ず非常の功を建てしなるべし、嗟惜い哉。

是の歳、大友義鎮日向を撃つて伊東祐丘を納る。義久之を禦ぎて耳川に戦ひ、大ひに之を敗る、義鎮逃れ歸へる。祐丘京師に奔る。義久、勢聲大ひに振ふ。

七年己卯夏四月晦、是より先、肥前侯龍造寺隆信守限府城を攻む。是の日、隆信、書を八代の老臣養田平馬允・高橋中務少輔・東山城守に與へて援を求む。秋九月、公、八代にありて、薩兵の將に朴河内を侵さんとするを聞き、佐敷に陣して聲援を爲す。十三日、新納忠元・肥地島宮内少輔騎兵三千に將とし來りて朴河内城を攻め、正門及び牙城を破る。城兵殊死して拒ぎ戦ふ。兵寡ふして支ふること能はず。守將東駿河守頼兼・其の子喜兵衛頼一に作る城を棄て、湯浦に通る。喜兵衛の妻上村氏作る。今歴代參考に従ふ。槍を執りて城門に立ち、敵數人を卻く。忠元使を遣して諭し降らしむ。上村氏將に城を授けて去らんとす。公、親ら兵に將として來り援ひ、又戦ふ。薩兵敗走し、城遂に完きを得たり。乃ち頼兼父子をして復城を守らしむ。

水俣濱口の戦

八年庚辰春三月三日、出水の兵來りて水俣濱口を侵す。我が兵撃つて之を卻く。初め頼安の水俣を守るや、薩人屢々利を以て水俣の士を誘ふ。前田下野・監物・掃部・溝口但馬・飛彈・武藏・大島越後・淵上大和・小島備中の九人肯て之に従はず、而して頼安屢々兵を出して薩界を侵す。其の出水、菱刈を侵すや、淵上段四郎之に死し、村山傳助・大島越後を被むる。其の久木野を侵すや、龜澤若狭射て敵兵を卻け、歩卒の隊將犬童甲斐之に死す。其の子右近及び惣右衛門を被る。其の薩界を侵す毎に前田監物・溝口武藏・輒ち之が嚮導たり。薩人大ひに二人を惡む。是より先、三船の土石井半眼來り仕ふ。半眼善く鳥銃を習ふ。公、嘗て半眼及び神瀬豊前・次松大隅・段兵衛をして薩界を巡らしむ。久木野に至りて半眼段兵衛を斬り、其の首を取りて薩に走る。夏五月十二日、忠元、精兵九十名を遣して、夜林河内を襲はしむ。其の夜風雨迅雷あり。薩兵暗に乗じ潛みて城に入り、火を放つて郭郭を焼き、大喊して進み攻む。城中膽落ち、頼兼父子及び田中彌五郎、奮闘して之を拒ぐ、克たず、城を棄て、又遁る。井福彌五郎・西飛彈之に死す、城遂に陥る。是の日、義弘、皆越を侵す。時に白髮嶽俄かに雷雨あり。

石井半眼
今の御船以下同じ

郭郭はくるは

井河内城忠元に落さる

薩兵皆越及び大畑を侵す

軍浦なく海の浦ありと誤りか
佐敷計石の戦

義弘、畏れて引き退く。薩兵大畑を侵す。八吉の兵撃つて之を卻く。是より先皆越六彌太・鹿目八重金藤薩に降り、常に薩兵の嚮導となる、後六彌太は水に溺れて死し、金藤は竊盗して戮せらるると云ふ。秋九月、義弘・家久戦艦三十艘を浮べ、忠元、歩騎三百人を率ゐて水陸並び進む。公、豫じめ求麻、八代の兵を聚め、柵を宗に作る津、横尾、竹藪、軍浦等の處所に列ね、以て水陸軍に備ふ。十六日、水軍は佐敷の斗石に至り、陸軍は湯浦に至る。十七日、敵船一艘岸に抵る大磯平内左衛門陸に上りて直前し、自ら其の名を呼ぶ。我が兵五代に作る喜兵衛、柵を出で、自ら名を呼ぶ。平内左衛門と槍を接して勝負未だ決せず、敵兵來り援く。喜兵衛卻くと數歩、高橋市之丞・主水柵を出で、之を援け、偕に平内左衛門を刺して其の首を獲たり。敵兵相繼ぎて陸に上り、我が兵皆柵を出で、相戦ひ、紛撃す。佐敷の士・菱田縫殿助・弟・其兵衛・西隼人・中村吉助・八代玉井院の僧自ら犬童自然左衛門と呼んで齊しく進んで奮闘す。園田清右衛門・恒松藤兵衛之に死す。八代關の地頭西左馬助、弟・備中と部兵を指揮して善く戦ふ、薩兵辟易す。左馬助重創を被りて死す。備中之を見て益々健闘し、手づから敵數

薩兵敗れ速く

三高橋の功

阿蘇の臣井芹加賀麿
に通ず

深木氏家記には天正
十四年に作る云ふ

人を斬る、劍を被り兵に扶けられて退く。餘兵猶能く力戦す、薩兵敗れて船を争ふ。我が兵矢丸を放つと雨の如く注ぎ、薩兵多く傷死す。暮に至りて水軍帆を揚げて去る。陸軍も亦水軍の敗れ聞き、兵を收めて去る。既にして喜兵衛・市之丞・主水と其の功を相譲りて肯て自ら居らず。公、馳せて佐敷に至る。之を聞きて大ひに稱して曰く、今日の戦ひ三人の功を最と爲す、而して今相譲るの美又今日の功に過ぐると遠し。是に於て喜兵衛に姓を高橋と賜ひ、之を稱して三高橋の功と云ふ。以て其の優劣なきを示し、齊しく勳狀を三人に賜ふ。是の歳、阿蘇氏の臣井芹加賀、私に志を嶋津氏に通じ、薩兵を導びきて以て阿蘇氏を滅さんと謀る。甲斐宗運の次子藏人・第三郎四郎・四郎兵衛と之に黨す。宗運之を聞き大ひに怒り、立どころに加賀を誅し、手づから藏人・三郎四郎二人を刃す。四郎兵衛は日向に逃る。歴代参考、歴代私記に曰く、元和中宗運の季子本藩に來り、妻刈美もの蓋し四郎兵衛なり

九年辛巳表二月十四日、是より先、薩兵屢々火筒を放つて水俣城を燒かんとす。而るに城中の衛宇皆茅屋にして火を防ぐに便ならず。頼安竹を以て茅に代

忠元水俣を襲ふ
深木保相距る一里

深木丹後

へんと欲す。深木丹後をして之が工を督せしむ、功未だ竣らず。是の日、忠元、兵に將として袋に抵り、連りに火筒を放つ、丹後身に甲を擡かず、手に烏銃を執りて出づ。犬童軍四郎・蘆原六介・村山逸角・西六郎・塩津留勘左衛門等、相隨ぎて出づ。丹後烏銃に精なり、立どころに敵二人を倒す。敵兵銃を放ち、丹後の右股を洞く。軍四郎も丸に中る。二人劍を被り、巨石に依りて自ら敵ひ、連りに烏銃を放つ。薩兵進むと能はず、我が兵稍く蟻集す。丹後、軍四郎に謂つて曰く、足下創重し、退きて城に入り、劍を療し、以て後舉を圖れ、我創重からず、衆と死を決して戦はん。軍四郎諾す。兵に扶けられて退く。遂に劍を病みて死す。丹後劍を襲み、衆を督して競ひ闘ふ。守山助六・松木半駄左衛門善く射る、射て敵七人を斃す。薩人荒井川勘解由左衛門、自ら其の名を呼び、衆に挺んで、闘ふ。峯山市兵衛之を斬る。薩人野村彦十郎、射て市兵衛の胸に中て之を倒す。丹後銃を投じ、刀を抜き直前して馬形豊前と互に名を呼んで闘ふ。豊前、丹後を斬りて之を誅り大ひに呼んで去る。助六・半駄左衛門箭盡く、弓を投じ刀を揮ひ、奮闘して死す。戦死するもの四十餘人、衆寡敵せず、兵を引

薩兵再び水俣を攻む
今の井川藩か

き退く。豊前、丹後の首を義久に獻す。義久之を檢じて曰く、此我が知る所の吉賀江丹後なり、其後必ず今姓に改めしならん、其の口物を含むに似たり、左右をして之を啓かしめ、鉛丸七を得たり。義久歎じて曰く、我聞く丹後善く鳥銃を習ふと、果して聞く所に異ならざるなりと。其の首を函にし、水俣城に送る。丹後、本姓は吉賀江、出水の役に功あり、公、之を賞して今姓を賜ふ。十八日、公、勳狀を丹後の子源四郎に賜ひ、父の功を賞す。秋九月十九日、薩兵水俣に入る。分つて四隊となし、義弘、燒井原に陣し、右馬頭幸久、南福寺、井川手に陣し、樺山則久、之に副たり。義虎、藁原に陣し、忠元、鏡船尾に陣す。頼安、頼兄と三郡の士を聚めて城を守る、兵一千に過す。頼安、竹下兵部左衛門・西隼人・川邊兵部左衛門を召して軍事を議す。頼安曰く、義滋公より今公に至る幾ど五十年、我れ薩人と屢々兵を交ふ、未だ嘗て利あらず、砥上、朴河内の役に我頻りに利を失つてより以來、薩兵勝に乗じて屢々來り侵す、是れ將士の恥なり。吾今意を決し、必死して出で戦はんと欲す如何と。兵部左衛門等皆以て然りと成して曰く、兵は神速を尊ぶ、請ふ明日味爽を以て期と爲さんと。都

水俣戦の我が死者

交綏とは敵味方が
ひにひき退くこと

義家故事に倣ひし
武藏守の矢文

署已に定まる。二十日味爽、城兵門を開きて出づ。薩兵合して一と爲り、大明神口より源藏渡を涉りて齊しく進み戦ふ。川邊兵部左衛門・隼人と第一槍をなす。兵部左衛門、溝口武藏と薩の隊將伊勢守を刺し、重創にて死せしむ。前田監物、古垣右馬助を刺し、蘆原萬左衛門、石川萬兵衛を斬りて、而して各々其の首を取る。斬首百四十餘級なり。高橋忠右衛門・西隼人・矢津留新介、政福案するに矢讀岐は元龜二年闘死す、今同姓名なるは蓋は其の子の父の名を襲ぐものか、疑ふべし隼人・船山新六・溝邊主税・大童藤四郎・松田讀岐・東香左衛門・山下傳内・平瀬掃部・大石平太兵衛・西源藤兵衛・久保田八郎・松本舍人・弟龜五郎・眞福寺の僧普門等に死す。戦死百六十餘人なり。兩軍交綏して退く。薩兵城を環り、垣を結び、往々屯火を置きて之を成る。暮より旦に達す。問々城に向つて大銃を放つ。二十一日明るる比、敵營扇を揚げて箭を城中に射る。頼安取りて之を視るに、則ち箭に忠元賦する所の聯詞の發句を刺して曰く、秋風に水俣落つる木の葉哉。頼安、立ちどころに脇匂を賦して其の箭に刺し、以て反り射て曰く、寄せては沈む月の浦波。

菊池軍記、九州記に以て深
水宗方の句を爲すは非なり

外史氏曰く、戦争の際忠元・頼安歌詠を以て相戲謔す、其の雅量愛すべし。昔衣川の役に源義家、父頼義に従ひ、撃つて貞任を破る、走るを追ふて其の巢窟に偪り、火を放つて衣川の館を焚き、戯に衣綻の句を賦して以て之を諷す。貞任、立どころに糸素の句を得、以て之に廣ぐ。義家、其の風流を愛して之を脱す。即し新納氏をして八幡公の量有らしめば、則ち必ずや圍を解きて去らん、其の圍を解かざるは、獨り其の量の小なるを憾むのみ。

註。衣川の句、先づ義家の

衣のたてはほころびにけり

さ下の句せるに貞任は、

年をへし糸のみだれのくるしさに

さ上の句を附せりといふ。

村山傳助の使

是の日、頼安使を八代に遣さんと欲す。而して途必ず薩營を歴、廻ち能く使する者を募る。東源次郎・村山傳助爭ふて使たらんとを乞ふ、二人をして門を括らしむ、傳助探りて之を得たり、傳助使して還る。夜將に垣を踰へんとす、戍卒之を覺る。槍を以て其の股を刺す、跳りて免る。遂に城に入る。二

溝邊半五の使命と其の忠義

起居とは訪問するこ
となり

十三日、公、溝邊半五に命じて水俣に使せしむ。半五夜に乗じて潜かに薩營を過ぐ。薩兵捕へて之を窮責す。半五佯りて曰く、吾は求麻人なり、今來りて父兄の城中に在るものを起居するのみと。薩兵信せず、之を責むると益々急なり。半五敢て伏せず、忠元、之を諭して曰く、汝吾が言に従はば、則ち厚く汝に酬ひん、否らざれば則ち汝を死せしめん、汝城に呼んで言ふべし、公、頼安に命じて曰く、小敵の堅きは、大敵の禽なり、速かに城を致して去れ、徒らに士卒を損する勿れと。半五、佯りて之を許す。薩兵護りて之を城下に送る。半五呼んで曰く、八代の使者至る、城兵出で、公の命を聴け、頼安、僧守闍・神瀬・豊前・深水勘解由・溝口出羽をして出で、之を聴かしむ。半五大ひに呼んで曰く、城兵努力堅守し、慎んで輕しく戦ふ勿れ、三日を出でずして公親ら求麻、八代の兵を率ゐ來り援けんごすと。言未だ畢らざるに薩兵其の首を斬りて之を竿頭に掲げ、以て城中に示す。城兵之を觀て半五の忠を感じ、而して薩兵の暴を憤らざるなし。是に於て城兵益々堅守し、且暮公の旌旗を企望して曰く、君來らば一戦して、薩兵を塵にせんご。

外史氏曰く、長篠の役に奥平氏の臣鳥井勝商、濱松に使す、敵人囚へて其の言に反せしめんと欲す、勝商伴りて之を許し、遂に君命を致して殺さる。是の役、溝邊半五も亦復爾り。夫れ二人の爲す所、晋の解揚を學ぶものに似たり。然れども二人蓋し史傳を知らず、且つ又人の故智を蹈むものにあらざるなり。願ふに忠臣の志、古今易らず、其の爲す所實に一轍に出づるのみ、豈に奇ならずや。

公水俣援兵を請す

深く一城云々はたはかり考へるためにあまたの士卒をこりてはいかぬなり

公、一日諸老臣を召し議して曰く、寡人初め親ら往きて水俣を援げんと欲す。今之を熟思するに、薩兵の銳輒く挫くべからず、寡人若し二郡の兵に將とし往きて戦はば、必ずや多く士卒を損せん、深く一城を惜んで、三軍の死傷を顧みざるは、兵に將たるもの、志にあらざるなり、若かず寡人師を出すを罷め而して頼安をして姑く城を薩兵に授けて去らしめ、與に後舉を圖らんには、汝等如何とか謂ふと。老臣、皆以て然りとす。乃ち使を遣して之を頼安に告ぐ、城兵望みを失ふ。二十六日、頼安、城を授けて去らんとす。忠元、嘗て溝口武藏・但馬・飛彈・肥前・前田下野・鹽物・淵上大和・小島備中と私怨あり。是に於

水俣遂に落つ

島津氏兵を撃す

島津氏に和して進退谷まる

て人を城中に遣して八人を得て、而して甘心を得んとを乞ふ。頼安答へて曰く、足下、此の八人を得んと欲せば、則ち旗鼓を動して來れ、吾八人と城を枕にして死せんとす、肯て城を授けずと。忠元、人をして謝せしめて曰く、足下の言義固より然り、八人の事の如きは吾復言はず、請ふ速かに城を致せと。二十七日、頼安城を薩兵に授け快々として去る。冬十月、義久・義弘使を遣して和を講せしむ、公、之を許す。乃ち誓書を交ゆ。十一月、義久、使を遣して曰く、孤、師を出し、以て大友宗麟・義親・義統を撃たんと欲す。而して阿蘇氏の梟將甲斐宗運三船城にあり、彼若し我を中路に要せば、志を得易からざるなり、孤將に足下を煩はさんとす、足下幸ひに先鋒となりて宗運を撃ち、孤親ら大兵に將として後繼とならば、則ち大友氏を滅すと易々たらんのみと。公、之を許す。是より先、晴廣公、宗運の父親宣守と好を結ぶ。公も亦嘗て宗運と誓書を交へ、以て先君の好を修む。故に公自ら謂らく、義久に逆けば則ち和を敗らん、宗運を撃たば則ち累世の誓に背かん、和を敗るは不祥なり、誓に背かば神必ず之を罰極せん、進退維れ谷まる。若かず師を出して宗運と一戦して死

公白木社首途の奇瑞

公の守山の歌

決死の戦の首途、ま
らのだに夜の明けた
る先はいかに折ふし
鳴く鷄子の聲のあは
れをそゆるあり
あゝ婆娑峰

今は婆娑峰に作る
豊野村下郷寺村に
御手洗水とて清泉あ

し、罪を先君に地下に請ひ、以て子孫をして長久ならしめんにはと。即ち宗運の誓書を取りて之を焚き、自ら祝辭を作り、巫、尾形惟勝をして死を白木社に祈らしむ。惟勝猶豫す。義久、又使を遣して兵を促す。公、求麻、葦北の兵を徴するに暇あらず、特に八代の兵八百を従へしむ。葦北の兵期せずして來る者僅に數人なり。東左京進前鋒たり、屬兵五百八十。十二月朔、曉、公、自ら兵に將として出で、白木社に首途す。公、頗る惟勝を疑ふ。復祝辭を讀ましむ。公、拜し詔りて且に出でんとす。少女織具を挟んで血を嘔くを見る、忽焉として復見へず。將に發せんとす、旗旒靡りて楠枝に挂り、牢として揺かず、解つて後發す。小川の守山に至りて天明く。公、國歌を賦して曰く

守山の下す嵐のはげしくて

明しかねたる鷄子の聲々々

婆娑峰の下に懸ひ、行厨を開く所の川、今之を御手洗水と謂ふと葦田三浦介、賦して曰く

言語道斷又も越へなん婆娑が峯

ながらへつべき命ありとは

今一度婆娑峰を越
へたさは山々なれば
決死の出陣なれば
も命のながらふべし
とは思もよらぬこと
さて思もよらぬこと
鬼沙川は今名なし
豊野原の大戦

宗運驚きて起つ

公、峯を下り、往きて豊野原に陣せんとす。高塚上總介、三浦介と之を諫めて曰く、臣等審かに地形を相するに、彼の地敵を防ぐに便ならず、請ふ止りて此に陣せよと。公、聽かず。鬼沙川を涉りて豊野原に陣す。時に薩人鎌田關清、宇士を成る。酒を贈りて我が師を稱ふ。是の日、堅志田の守將西村金吾曰く、初め右衛門と稱し、又北君と稱す。新池軍記に曰く、堅志田の城主西左衛門大輔と。元後古城記に曰く、北左衛門と。肥後國志野原古戦場圖には北左衛門尉に作る、孰れが是なるを詳かにせず。政談案するに藤原抄に左右衛門府唐名金吾なり、故つかひに時人呼んで金吾とす。使を馳せて宗運に告げて曰く、相良義陽、今島津義久の先鋒と爲りて來る、請ふ速かに之が備を爲せと。是より先、事已に三船に聞ゆ。宗運信せずして曰く、誓書獻めて府にあり、匠作豈に遽かに之に背かんや、是れ必ず民間の訛言か、否らざれば則ち薩人の間諜のみと。金吾の使至るに及び、宗運大ひに驚きて曰く、果して然るか、島津氏の肥、筑、豊を蠶食せざるは、獨り相良氏力なり、而して今相良氏既に島津氏に降る、則ち我が滅亡日無けんこと即ち、公の誓書を取り人をして諸を阿蘇山の神池に沈めしめ、自ら關を千光寺に探りて吉を得たり、乃ち兵を分つて四隊と爲す。一は田代宗傳、運記に此の役田代宗傳後に至り、豊野原の戦に及ばず、會々宗運退きて諸坪に軍し、獲る所の首級を檢じ、宗傳宗運に見へて捕を賀し、且つ相良氏の餘兵を撃たんと欲す。宗運之を止む、宗傳聽かず、乃ち部兵二百を率ゐて之を桑原

左京進堅志田甲佐を援く
油坂の援道を絶つ
中尾山

海東の間に追撃す、斬首五十餘級、而して部兵一人を損せず。をして之に將たらしめ、一は宗傳の子快尊を其の他の舊史之を載せず、をして之に將たらしめ、以て先鋒と爲し、堅志田、甲佐を防ぐ。一は宗運自ら將として出で、田代、戸井、田口に陣す。一は三船に留めて以て他敵に備ふ。斥候宗運に報じて曰く、義陽、既に響野原に陣す。其の兵五百騎に過ぎず。宗運曰く、是れ匠作にあらず、是れ必ずや其の前鋒たる東以伯、箕田信濃、高橋駿河の徒ならん、匠作の若きは決して鬼沙川を渉らす。人をして之を視しむるに、則ち公なり。宗運曰く、匠作、陣する所の處、形勢便ならず、我之を襲撃せば、破るゝと必せり、機失ふべからず。二日曉、左京進堅志田城を攻めて之を拔き、守將西村金吾を斬る。勢に乗じ、轉じて甲佐城を攻めて又之を拔く。守將矢部一能を斬る。勢に乘じ、肥後古城に曰く、伊津野山城響野原に戰死す。肥後國志響野原古戰場圖に曰く、伊津野、東に戰ふて死す。政訓案するに伊津野一能國音相同じ、舊史蓋し誤り伊津野を記して一能に作る、以て其名となすなり、其の矢部を以て姓とせしむる、守將及び隊將の首九級を公の營に獻す。兵を油坂に移し、而して阿蘇氏の援道を絶ち、快尊と相當りて大ひに戰つて之を敗る。快尊、中尾山に走る。左京進追はず、兵を收めて士馬を

實運寺今はなし
糸石谷
戸内、馬立、後藤等は凡て響野原近邊のみにして今皆糸石字の内なり
切杭は道路の堀り下りある所なれば切通ならんか
人生五十年と云へどそれすら得さげすむに比ぶれば日々に老ひゆくあはれさをかこつこのまされ

中尾村の戦死者

休め、宗傳の兵を邀撃せんと欲す。宗傳他道を取りて、竟に此の路に出でず。是の日、天小雨、烟霧四塞、咫尺を辨せず。宗運、枚を衝み、旗を捲き、潜行して實運寺の山後より糸石谷に沿ひて我が營の西北に出で、諸軍潜かに我が營の北に出で、戸内、馬立、後藤、切杭等の諸處に分布す。宗運父子我が營の東中尾村に伏し、以て動靜を観る。我が營覺らず、時に左京進の捷報至る。公、大ひに喜び其の首を檢じて關清の贈る所の樽を開き、士卒に飲ましむ。公、賦して曰く
老の坂下るも憂しと思ふなよ
登りも果てぬ人もこそあれ
快尊、中尾村より潜かに戸内に抵り、機を相して連りに鳥銃を放つ。諸軍齊しく起り、砲銃を浪發す。宗運、旗を張り、白鷺の馬標を建て、鼓噪して我が中堅を衝く。我が軍大ひに驚き、銃を放つて相拒ぐ。上總介・三浦介衆に挺んでて前み闘ふ。玉井院僧某・光明寺僧某、二人名、槍を執りて競ひ闘ふ。擊槍卒藤八、自ら相良藤八郎と呼び、槍を揮つて闘ふ。五人相次ぎて死す。東刑部・松木壹岐・高橋内膳・桑原紀伊力戰して死す。興善寺の城代義田筑前、部兵を督して

馬立切坑の戦死者

健闘す。手づから敵數人を斬り、重創を被りて死す。淵上刑部左衛門忠良、眉尖刀を揮ひて奮闘し、敵を斬ると頗る多し。甲士一人槍を操りて之に向ふ。忠良撃つて之を斃す。甲士五人尋ぎ至り圍み撃つ、忠良眉尖刀を遺て、佩刀を抜き格闘す。克たずして死す。一黄甲部卒二人を従へ、大ひに呼んで踴躍し來り進む。修驗道園田教音射て之を殛す。敵數十人直前突闘す、教音が左右に射て半ば之を殛す、矢盡きて刀を抜き戦ひ、數創を被りて死す。東越後・周防・高橋志摩・豊永備前・右田若狭・村山飛彈・恒松美濃・平川右衛門・外山主計・澄川孫八郎・下山佐波・有瀬與一兵衛・養田喜六・犬童藤七・木工・修驗道教阿坊等、二十四人齊しく進み殊死して戦ふ。敵兵披靡す。緒方後藤左衛門・犬童喜兵衛・五兵衛・原口佐左衛門・桑原喜兵衛・川邊新右衛門・勢に乗じて前み闘ふ。斬獲過當にして敵兵卻走す。追ふて馬立、切坑に至る。敵兵還り戦ふ。我が兵後繼なし。前の二十四人と併せて皆戦死す。成願寺の僧某・江林寺の僧某・海上庵の僧某名聞ぐ公を諫めて曰く、爪牙の士悉く敗死し、敵鋒銳きこと甚し、戦ひ必ず利なけん、營を望婆峯に移し、士馬を休めて、而して後勝負を決せんと。公、聽か

響野原の戦死者

す。宗傳父子横より之を衝く。小田美作・濱田源太左衛門・小谷與市郎自ら其名を呼び、死を願みずして戦ひ、多く敵を斬りて、而して死す。敵兵勝に乗じ稱呼し來り逼る。我が軍大ひに亂る。控馬卒源四郎・修羅助馬を捨て、先づ逸る。犬童長門・存藝・喜右衛門・長藤八郎・小田與太郎・十郎左衛門・東三郎左衛門・左衛門・村山土申・養田左衛門・前田喜三右衛門・蘆原小左衛門・成願寺・江林寺・海上庵・修驗道智仙坊等相繼ぎて戦死す。侍童井邊千宮年甫めて十一、力戦して死す。本間朔巴は關東の人、儒を以て來り我が藩に宣し、常に公の左右にあり進んで公の前に拜して曰く、臣謹んで黄泉の先導をなさんと、腹を刺して死す。公、團扇を乗り、胡床に坐して動かす、野本太郎左衛門刀を揮つて之に就く。公刀を抜かすして元を授く、時に年三十八。太郎左衛門斬りて而して之を悔ひ、敢て元を取らず、唯其の佩刀を取りて以て他日の證と爲す。緒方喜藏公の元を提たり。宗運退きて星窪に陣す。宗傳父子退きて糸石山に陣す。喜藏公の元を提げて宗運の營に抵る。宗運之を驗じ、流涕して曰く、匠作既に死す、我が家の滅亡三年を出ですと。乃ち公の元を響野原に還す。士卒一人身を脱して敗を左

本間朔巴

公養す
元は首なりかしらと
よむ

星窪今なし
宗運流涕す